



第73号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090  
FAX 03(3432)5567

編集人 飯田正能  
発行人 栗原宏

# 第56回特攻平和観音年次法要

日時 平成19年9月23日(日)

14時～15時10分

場所 世田谷観音寺・特攻平和観音堂

参列者 御遺族36名、御来賓・会員等276名

式次第 第

司会 乗兼 英史

梵鐘点打 三回

野口 清三

大衆着座 (堂内・堂外)

式衆入堂 世田谷山観音寺住職

駒撃神社宮司

トランペット

国歌斉唱 トランペット

山主願文 特攻平和観音経

神 儀 駒撃神社宮司 澤田 浩治

修祓の儀・降神の儀・献饌の儀

祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀

祭文奏上 特攻平和観音奉賛会

会長 山本 卓真



「世界平和の礎」  
吉田茂元総理書

## 目次

第56回特攻平和観音年次法要……………1

「特攻勇士之像」奉納開眼除幕式……………6

8月15日の靖國神社……………7

瀬島名誉会長を偲んで……………10

奉納雪洞に秘める思い……………11

空母「雲龍」の海没と忘れ難い人……………12

「海行かば」の歌の出所……………15

碑は語る特攻隊③……………16

碑は語る特攻隊④……………17

世田谷区長挨拶……………熊本 哲之

献 吟……………石橋 一歌

献 歌……………逢坂 竜信

世田谷コールエーデ合唱団……………充

指揮 本間 充

（見上げてごらん空の星・千の風になって）……………

奉納献奏 トランペット(海ゆかば)……………梅澤 伸之

世田谷区民吹奏楽団……………新井 一徳

全員合唱 海ゆかば……………

ラッパ献奏……………海軍軍装会ラッパ隊

陸軍軍装会……………

焼 香……………特攻平和観音奉賛会

会長 山本 卓真

御遺族各位……………

御来賓各位……………

会員・一般各位……………

式衆退堂……………

池前にて、住職 読経(般若心経)……………

神官 修祓・祝詞奏上後、式衆退場……………

直 会……………15時30分～16時30分

安田操さんの歌集に込えて……………18

短歌に見る昨今……………19

私の接した將軍達③木下勇中将……………21

私の接した將軍達④吉田惠中将……………23

海軍落下傘部隊一代記⑥……………24

比島戦最後の航空特攻……………27

地元住民によって建てられた……………

山添勇夫陸軍大尉の記念碑……………30

遊就館特別展「英霊たちの言葉……………

―書画に魅る若者決死の声―……………31

高野山「空」の碑前祭……………32

「陸軍挺進部隊外史」の……………33

自衛隊空挺隊員の読後感③……………33

来年の靖國カレンダ―の五・六月に……………

義烈空挺隊の絵を掲げる……………58

特攻隊絵本『お父さんへの千羽鶴』……………

出版記念講演会……………59

事務局からの報告等……………60

献 吟……………石橋一歌

献 吟……………逢坂竜信

海上挺進第十五戦隊 篠崎圭二……………

昭和二十年二月十日……………

水漬くとも清く散りなん若桜……………

比島ナスグブ沖で戦死……………

などかへりみん大和魂……………

多聞隊 関 豊興……………

昭和二十年八月四日……………

沖繩南方海域で戦死……………

風に散る花の我が身はいとわねど……………

心にかかる日の本の末……………

## 第56回特攻平和観音年次法要

平成19年9月23日(日) 秋分の日、世田谷山観音寺・特攻平和観音堂において、第56回特攻平和観音年次法要が厳かに齋行された。

前日までの猛暑が嘘のように過ぎ去り、今朝は薄曇りながら爽やかな秋風が吹き渡る絶好の日和となった。

今日は特攻平和観音年次法要に先立ち、午前中「特攻勇士之像」の除幕式が行われることと、今年から年次法要が神仏習合で行われるとあって、

まずは、土地の氏神「駒撃神社」に参詣しておかなくてはと、早朝に家を出た。同社は、世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座します古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は、大国主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であると共に、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子の奥州征討に当たって武運を祈願され、頼朝公また藤原氏征伐に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する(詳しくは後掲)。

下馬5丁目でバスを降り、公園横の表参道より入り、鮮やかな朱塗りの神

## 祭文

本日、ここに、第五十六回特攻平和観音年次法要を執り行つに当たり、在天の御霊に謹んで申し上げます。

今回から、年次法要を神仏習合で行うことに致しました。住職の太田賢照師は、予てから、我が国に仏教が伝来して以来、惟神の道と調和融合して醸し出されてきた、本地垂迹説・神仏習合思想に深い関心を抱いておられました。この度、この地の氏神で、本年が創建九百五十年に当たる、由緒深い駒撃神社の澤田浩治宮司と意気投合されて、これからは、年次法要を神仏習合で齋行することになりましたことを、先ず初めにご報告申し上げます。

次に、大阪芸術大学の学生が中心になって結成された、「日本人の心を伝える会」が自ら構成したCD「あゝ特攻」の売上剰余金で「特攻勇士之像」を铸造して、全国の護国神社に逐次奉納していきたい、という同会の趣旨に賛同して、協会は昨年の春からCDの製作・販売に携わって参りました。その結果、本年四月に、福井県と鹿児島県の護

国神社に、それぞれ勇士之像をお納めすることができました。そして、本日午前、三休目の除幕式が、本山の客殿、代官屋敷門前で挙行されました。

特攻勇士之像は、地藏菩薩像に向かって左側、最も人目に付きやすい所にそのお姿をお現しになりました。これからは、未永く特攻烈士の皆様方が、戦局日毎に悪化する中、愛する国土と同胞を護るためには、他に方策なしと、空に、海に、更には空挺、戦車に至るまで、敢然と敵陣営に突入、散華された、壮烈無比の御偉勲と、その基となった、長年にわたって培われてきた日本人の心とを、無言のうちに道行く人々に語り続け下さることでありましょう。

このような若者が育ちつつあることは、誠に頼もしいことであります。一方、各界の指導的立場にあり、あるいは、かつてその地位にあったがために、より一層、公の観点からの言動が求められるにも拘らず、嘆かわしい行為に走る輩の存在が目につくようになって参りました。親殺し、子殺しの増加に象徴される倫理・道徳の退廃に、歯止めが掛

からないことを併せ考えると、寒心に堪えません。

世界が瞠目した経済成長を続けている間に、拝金思想に塗れ、心の教育を蔑ろにしてきた半世紀ぶり、その弊害は予想以上に大きいと認めざるを得ません。

教育基本法の改正が実現したことには、喜ばしいことではありますが、今回の参議院議員選挙の結果から、暫くの間、政局が不安定化するであります。憲法改正への行程に滞りを生じないことを切に祈るものであります。

私共は、長年にわたって、我が国が真の独立国家たるに相応しい自信と矜持を、一日も早く取り戻せるように努力を続けて参りましたが、その途は未だ遠きことを痛感させられております。

在天の諸霊、何とぞ私共により一層の御加護を賜り、前途を御照覧下さいますように、心からお願いを申し上げます。

平成十九年九月二十三日

特攻平和観音奉賛会

財団法人特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会

会長 山本 卓眞



住職・神官入堂



山本会長祭文奏上



献吟 吟 石橋一歌 笛 逢坂竜信



献歌 世田谷コールエーデ合唱団

橋を渡って、石造りの鳥居をくぐれば、そこは銀杏や樺、松や楓などの大木が繁る神域である。石段又は坂道を登った小高い丘の上の御社は、如何にも由緒深き森厳の気に包まれている。

境内の「駒繫之松」は五代目とあるが、高さ20メートルはあろうかという黒松の大木である。境内は実に綺麗に掃き清められていて、参詣者の心を引き締めてくれる。そういった雰囲気のある古い御社である。

駒繫神社に詣でて身も心も清めた後、「特攻勇士之像」の除幕式が行われる世田谷山観音寺に向かった（除幕式の模様は後掲）。

世田谷山観音寺の境内は、これまた

松や樺、楓などの屋敷林に囲まれ、間に苔むす古い堂塔の見え隠れする静寂・森厳の気に包まれている。その境内も、今日ばかりは、久々の再会を喜び合う元戦友達を始め、老若男女大勢の参詣者で活気づいている。低気圧の通過で照り曇りの変わりやすい天候ながら、さしもの暑さも和らいだ絶好の彼岸日和である。本堂脇の特攻平和観音堂正面の祭壇には、菊や竜胆など山の季節の生花が供えられて香が焚かれ、本堂の欄干に掲げられた若き特攻勇士達の御影にも花束が手向けられている。寺域中央の蓮池には、もみじ葉や白いさるすべりの花卉が浮かび、池中に立つ大慈大悲の観世音菩薩（法隆

寺夢殿の夢違い観音像を模して铸造された菩薩像）が、慈悲慈愛の眼を注いで、特攻勇士達の御霊と御遺族を始め参会の衆生をやさしく見守り給う中、やがて14時、法要は始められた。

住職、神官ら入堂に始まり、梵鐘三打、国歌斉唱、山主願文奏上と続く。

世田谷山観音寺住職太田賢照山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の龜鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相対せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。

真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・・・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。

真に特攻勇士は、護国の鬼神となつて散華され、今や平和守護の観世音菩薩となつて我ら衆生を見守っておられるのである。

この後、駒繫神社の澤田浩治くにはら宮司祭主となつて神儀が執り行われ、修祓の



儀・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れる中、清らかに齋行された。

続く祭文奏上(祭文は後掲)の中で、特攻平和観音奉賛会兼財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の山本卓真会長は、今回から年次法要を神仏習合で行うこととなった、その由来に触れ、世田谷山観音寺住職太田賢照師とこの地の氏神で、本年が創建950年に当たる由緒深い駒撃神社の澤田浩治宮司との深い友誼と信条により、今後より一層手厚い祭祀が行われることを報告された。更に、大阪芸大の学生達が中心となって結成された「日本人の心を伝える会」の制作に係るCD『あゝ特攻』の売上剰余金で鑄造した「特攻勇士之像」が、本年4月、福井県と鹿児島県の護国神社に奉納され、本日、更にその三休目の像の奉納除幕式が本山で執り行われたことを報告された。

また、世田谷区長熊本哲之氏は、永年にわたる特攻平和観音法要に敬意と感謝の念を捧げ、昭和60年に平和都市宣言を行った世田谷84万区民の生命を預かる身として、特攻隊勇士の意志を継ぎ、安全・安心の世田谷区実現に向けて全力を傾注したいと誓われた。

その後、献吟二曲が、石橋一歌氏の吟、逢坂竜信氏の笛で朗詠され、世田

谷コールエーデ合唱団による献歌(見上げてごらん空の星、千の風になって)二曲の合唱、更に世田谷区民吹奏楽団によるトランペットの吹奏に合わせる全員で「海ゆかば」を斉唱し、会長・御遺族を始め、参列者全員祭壇前に進んで焼香。その後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う観世音菩薩に向かつて朗々と『般若波羅蜜多心經』の声明並びに神官による祝詞の奏上があつて、滞りなく第56回年次法要の幕を閉じた。

【神仏習合】我が国固有の神の信仰と仏教信仰とを融合調和すること。神仏混淆とも言う。奈良時代に始まり、神宮寺・本地垂迹説などはその現れ。

【本地垂迹説】本地の仏・菩薩が衆生を済度するために、迹を垂れて我が国の神祇となつて現れるとする神仏同體説。奈良時代に芽生え、平安時代に本格化し、鎌倉時代に教理形成にまで至つた神仏習合思想。元来法華経には絶対

的理想的な仏(法身仏)が本地で、歴史的現実的にこの世に現れた仏(応身仏)が釈迦で、即ち垂迹(跡を垂れる)であるとする思想がある。これを拡大解釈し、インドの仏が本地で日本の神は衆生済度のための垂迹であると

説く。既に奈良時代には、神も衆生の一つ故、読経の功德により済度せられ

るとして、神前読経が行われ、神宮寺が建てられ、平安初期には、神は仏法により悟りを開いて菩薩となるとされ、中期に入ると、菩薩より進んで仏陀となり得るとされるに至つた。ここに神仏同體の説が起り、遂に山王一実神道・両部習合神道・法華神道等となつた。日本神道の立場から、反本地垂迹説も現れたが、一般には、明治の廃仏毀釈の頃まで行われた。

【廃仏毀釈】仏教廃止運動。近世水戸藩において最初に行われたもので、小寺を整理し、一村一社制を採つたのが起り。明治維新(1868年)の祭

政一致により、神仏判然となつたが、それは、江戸時代の旧弊打破と神祇崇拜に連なる天皇崇敬とが絡み合つて、仏教排撃を激化させた。その結果、仏像・仏具は焼棄又は売却され、信州松

本・伊勢・土佐・富山・讃岐の多度津等の各地で激しく行われ、興福寺の塔は25円で売りに出されたりし、所によつては、神葬祭が行われ、維新後数年の騒ぎは、仏教徒にとっては忍従の時代であつた。

【神仏分離】明治初年、維新政府が祭政一致の方針に基づき、神仏習合を廃止した。

【駒撃神社】世田谷区下馬4丁目27番に在つて、世田谷観音寺とは、その北

東約300メートルの近距離に鎮座する下馬一帯の由緒ある鎮守様である。御祭神は、大國主命(別名を、子の神、大物主神、大國玉命、大己貴神とも)、昔から「子の神」「子の明神」又は「駒撃神社」とも称され、里人達によつて出雲大社の御分霊を勧請し、守護神として祀つたとされている。

社伝によれば、御冷泉天皇の天喜4年4月(1056年)、源義家が父の頼義と共に朝廷の命を受けて奥州の安倍氏征討(前九年の役)に向かう途中、この地を通過するに際し、「子の神」に武運を祈つたと伝えられており、降つ

て文治5年7月(1189年)、源頼朝が奥州の藤原泰衡征伐のため自ら大軍を率いて鎌倉を発し、世田谷郷のこの地に至つたとき、往時義家が子の神に参拝したことを回想し、愛馬芦毛よ

り降りて境内の松の樹に駒を繫いで参拝した。この事があつて以来、「子の神」を「駒撃神社」とも称するようになった。また、頼朝がその時乗馬して発進しようとしたが、当社社前より駒留八幡神社(世田谷区上馬町)までは一面のぬかるみであつたため、下馬してこの間を徒歩で渡り、それより乗馬

(上馬)した。後世この故事に因み、駒撃神社付近一帯を下馬といい、駒留八幡神社付近一帯を上馬と呼んで現在

に在つて、世田谷観音寺とは、その北



に至っている。

新編武蔵風土記稿（江戸幕府の大学

頭林衡らの建議によって編纂された武蔵国一国の風土記である。昌平覺地誌局によって成った。すべて265巻、

総国沿革・建置沿革・山川・芸文・任国革表を載す。その内容は江戸時代に残存せる史料を含み、また広く伝説等の民俗的資料をも網羅しており、地理歴史の研究に資するところ大である）

によれば「子の神の境内は五反（一五〇〇坪）下馬引沢の内小名子の神丸にあり、その所の鎮守なり、此社の鎮座の年歴を詳にせず、本社九尺に二間、拜殿二間に三間、社地の入口に柱間八尺の鳥居を建て、これより石段二十五

を経て社前に至る。又本社末の方に

も同じ鳥居一基をたてる」とある。

そこに記された形状は今も余り変わっていない。参道の入口、かつては堀割があつたであろう所には朱塗りの神橋

が渡され、石造りの一の鳥居が建っている。そこから参道及び境内一帯は銀杏やけやき、樟、楓などの大木が鬱蒼と覆い、昔ながらの里山の景観を留めている。頼朝縁りの「駒繫之松」も、

昔は参道の入口付近に在つたであろうと思われるが、今は、坂道と階段を上がつた境内の南東の隅に移植されて五代目を名乗っているが、高さ20メートルはあろうと思われる黒松の大木である。

駒繫神社では、今年（令和五〇年）

式年大祭を齎行し、記念事業として、

老朽化した社殿等の修復工事を行うため、同神社奉賛会により社殿修復奉賛金の募集を行っており、平成20年の完成を期している。

【陸稲の藤蔵糯】

この地一帯は、江戸時代から陸稲栽培が行われていたが、陸稲は水稲に比べて粘りが少なく餅を作るには適していなかった。ところが、明治30年代に

荏原郡駒澤村下馬引江（現在の世田谷区下馬）の清水藤蔵氏が、それまで栽培していた尾張糯を改良して、粘りのある陸稲を作り出したことから「藤蔵糯」と呼ばれた。それまで一般に、水稲に比べると粘りが弱い陸稲は、赤飯に用いられ、餅には水稲が用いられていたが、この「藤蔵糯」は水稲に劣ら

ぬ美味しい餅を作ることができ、収量

も多く、病気にも強いので、東京都の奨励品種に採用されて、「陸稲農林1号」を始め優れた品種を生み出す母体ともなった。

（飯田正能記）



駒繫神社入口の神橋



駒繫神社・拜殿



5代目駒繫之松



駒繫神社境内

# 「特攻勇士之像」 奉納開眼除幕式

平成19年9月23日(日)、世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要に先立ち、10時30分から、同寺表参道入口の地蔵菩薩(代受苦・身代わり地蔵)像左脇に安置された第三体目の「特攻勇士之像」奉納開眼除幕式が厳粛に挙

行された。  
理事長始め特攻協会関係者ほか数十名が参集する中、本山太田賢照住職が導師を勤めて懇ろに読経した後、理事長以下理事、遺族代表らの手により、像を覆う白布の綱を引き落とすと、あ

かがね色の凛々しくも初々しい特攻勇士の英姿が現出し、住職らによる『般若波羅蜜多心経』の読誦と共に撒かれた「散華」が碑前に舞い散って、あたかも欣求浄土の相を表出した。

その後、住職らの読経のうちに一同焼香し、山主の挨拶があつて式典は無事終了した。  
山主の挨拶にもあつたが、この度、勇士の像が安置された場所は、本山表入口の左側、代官屋敷門前右に鎮座する身代わり地蔵尊の左脇という格好の場所であり、国のため、家族や愛する人々を護るために、身を捧げ、身代わりとなつて国難に殉じた特攻勇士を慰

霊し、顕彰するには最も相応しい所と言へる。参詣人や道行く人々の目に留まり、絶えず崇敬の念を集めることであらう。  
(飯田正能記)



住職読経



遺族・役員代表による除幕



開眼法要の読経・散華



焼香



竹田恒徳元宮殿下書「奉安特攻平和観音」



「特攻勇士之像」に合掌する一般参詣者



## 8月15日の靖國神社

飯田 正能

あの日、あの時から62年、深く脳裏に刻み込まれて忘れ得ぬ心象風景。

平成19年8月15日、今日も暑い。8時過ぎには既に30度を超えた。日中はまた、35度を超える猛暑となるであろう。見上げる大鳥居が青空に突き立つ巨人のように雄々しく思われる。

神域に入ると、さすがに凜とした森の気が漂う。黙々と社殿に向かう人波の中には、背中を丸めて行く高齢者の姿もある。黒の礼服に身を包んだ一



行は、地方から上京した遺族の方々であらうか、娘に手を引かれて行く老母の姿もある。様々な思いを胸に秘め、懐かしい夫や父、愛しい息子達の御霊に会いに行くのであろうか。

この日靖國神社では、9時から英霊にこたえる会主催の「第32回全国戦没者慰霊大祭」が、引き続き10時30分から、参道の特設テントにおいて、英霊にこたえる会と日本会議の共催による「第21回戦没者追悼中央国民集会」が執り行われた。

慰霊大祭は、大拝殿に溢れる大勢の参列者の真摯な祈りの中に、定刻、拓殖大学吹奏楽部の伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓、献饌、祝詞奏上の神儀に続いて堀江正夫会長（陸士50期）が祭文を奏上された。

「小泉前総理が、退任直前の昨年8



月15日に靖國神社参拝の公約を果たして、兎にも角にも16年の長きにわたって中斷していた総理の参拝が復活したことに、大きな意義を認めるとともに、

次期総理により更にこれが定着し、陛下の御親拝への道を開くものと確信していたところ、昨年7月の「福田メモ」なる新聞報道、依然として根強い中国による不当な内政干渉、これらに迎合する国内外の勢力の存在等誠に遺憾の極みである。このような状況の中で、「戦後レジームからの脱却」「美しい国日本」を目指す安倍内閣が誕生したが、

安倍総理の掲げるこれらの目的達成のためには、戦後60余年を経過してなお、戦後の占領政策の影響を強く受け、その呪縛の中にいる我が国、我が国民を、速やかに真の日本人としての心に回帰させることが必要であり、その第一歩は、御英霊が一命をもって示された祖国日本への熱い思いに心を致し、行動することである。

安倍総理は、官房長官時代に、総理の靖國神社参拝を強く推進したにもかかわらず、今日まで「あいまい戦術」を取り続けている。先般の参議院議員選挙の大敗は、不幸にも色々な不祥事や不測の事態が重なったことなどにもよるが、その大きな要因の中に、総理就任前の総理とは違った姿を国民が敏

感に感じ取ったからにはかならない。今後政局が混沌し、国政の渋滞、民

主党への妥協なども予想されるが、この中であって少なくとも安倍総理は、その政治信条を曲げることなく、基本的な諸問題につき強力な指導力を発揮し、毅然として初心を貫き、その第一歩として、靖國神社への公式参拝を実現するよう期待し、願ってやまない。

一方、近年、靖國神社の参拝者は、逐次増加しており、昨年8月15日の参拝者は25万8千人にも上り、若年層も増えてきた。そして、若者達の中に、遊就館を参観して、我が国の正しい近現代史を探究しようとする姿勢が高まりつつある。

私共は本日、御英霊の大前に、これらの国民の声を受けながら更に心を合わせ、力を尽くして、総理等の公式参拝、そして御親拝を目指し、その国民運動を推進することを、改めて心からお誓い申し上げます。」と力強く奏上された。

続いて佛所護念会教団合唱部により「海ゆかば・同期の桜・ふるさと」の3曲の献楽があつて、一同順次本殿に進み、玉串奉奠をして閉式となった。なお、拝殿中央には例年のように、千葉県茂原市にある「マリアの里カトリック日曜学校」の生徒達の折った千





羽鶴が奉納されていたが、これについては、先に、この日曜学校の代表者塩崎深雪さんの父親が、日曜学校建築の際、屋根の十字架よりも高い日章旗の掲揚塔を建てるよう棟梁に頼んだこと、キリスト教徒である前に日本人であることを忘れるなど言われた話などを伺い、日本人の誇りを失っている今の人々に対する警告と受け止め、感銘深いものがあつた。

また、小泉前総理は、この日も早朝昇殿参拝を終えて、慰霊大祭前に退出された。

慰霊大祭を終えて、次の追悼中央国民集会に向かう。境内は次第に人波を増し、若い人々や子供連れ、外国人の姿も多く見受けられるようになった。記録的な猛暑にもかかわらず、参拝者は昨年を上回るのではなからうか。

なお、この暑さの中で、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若い会員による冷たい麦茶の接待は誠に有り難い。これまでは長年「英霊にこたえる会」の会員のご奉仕をいただいていたが、会員の高齢化に配慮し、次代を担う若者の心意気を示すものとして心温まる思いがした。

また、この暑さの中で、高齢者など



体調を崩す人も多からうと、靖國神社では、境内に救護所を設け、当協会の会員でもある成田赤十字病院の看護師佐々木ひろろ子さんを始め、数名の看護師のご奉仕を得て救護に当たっておられることは、誠に有り難いことである。

国民中央集会が開催される参道の大テントは既に超満員、周辺にも大勢の人々が、記録的な炎暑にもめげず立ち尽くし、熱心に集会を見守っていた。

集会は、定刻、国歌斉唱に始まり、靖國神社拝礼の後、終戦の詔書の玉音放送を拝聴し、あの日あの時の感慨を新たにした。主催者を代表して日本会



議の三好達会長、英霊にこたえる会の堀江正夫会長がそれぞれ挨拶をされ、また、各界代表の提言として、台湾人留学生で、日本李登輝友の会青年部・副部長の薛格芳さんと亜細亜大学の東中野修道教授が、それぞれ講演をされた。

特に、日本会議の三好達会長は、挨拶の中で「先の大戦において勇戦奮闘して散華された勇士を始め、戦禍に殞れた多くの人々の本当の姿を語り継ぐべきことは、日本国民の責任であり、それ以上に大切なことは、英霊の慰霊と顕彰、そして、英霊によってお護り頂いた国民の感謝の誠を捧げることである。それは国家としても当然の義務である。「戦後レジームよりの脱却」「美しい国日本」を目指す安倍内閣によって教育の再生が図られ、教育基本法の改正が行われたが、内外情勢の厳しい変化により、政局の不安定、米国内閣での慰安婦問題決議、南京事件関係映画の製作等憂慮すべき事態が生じているが、今こそ戦後60余年の偏向教育により失われた日本民族の誇りと矜持を取り戻して、この勝れた伝統と誇りのある日本の国家と国民のために、一命を捧げた英霊の御心を安んじるよう更に努力しなければならぬ。」と力強く述べられた。



「あさなぎ」の麦茶接待奉仕



看護師有志の救護所奉仕・左端 佐々木ひろ子さん

の英霊は、靖國神社で祀ってもらえなかつたら、どこで祀ってもらえるのですか、台湾では祀ってもらえないかもしれません。戦後台湾人は、中国大陸からやって来た国民党政府の弾圧を受け、日本統治時代の教育、文化等を一

掃しようとしたが、今でも私たちの祖父母は、日本の統治時代を懐かしみ、日本の教育、文化の素晴らしさを語り、台湾の振興発展に尽くした日本人を尊敬しています。台湾と日本は、言わば運命共同体です。日本にとって台湾は、国防上、通商上色んな面で大事な国です。もっと多くの日本人に台湾の重要性を知ってもらい、指導と支援、協力をしてもらいたいです。」と語り、日本人の奮起を促されたのは、いささか汗顔の思いであった。

正午を過ぎて社頭へ向かう人波はますます増え、拜殿前には参拝者の長い列ができる有様。この分では参拝者の数は昨年の約25万8千名を上回るのではなかるうか。一人でも多くの人が参拝することによって国のために命を捧げられた英霊の御心が伝わることにならる。社頭には英霊の遺書や遺詠が掲げられているが、多くの人々がその前に佇んでいる。戦争を知らない若い人の姿も多く見受けられる。

「あめつちのまことのみたまあつまりてやまと心となりにつらしも・・・

英霊こそは、日本人の精神としての大和心を極めつくして散華されたのである。」これは、最高裁長官を退官後、昭和51年6月から昭和54年5月急逝された石田和外氏の会長就任挨拶の中で言葉である。氏は、昭和53年7月靖國神社第六代宮司に就任された松平永芳氏の相談を受け、法的には何ら問題ないことを明言されて、松平宮司が、長年の懸案であったいわゆるA級戦犯とされて刑死を遂げた7名のほか未決拘禁中病死の2名、受刑中死亡の5名、計14名の殉難者の合祀を決断され、同年秋に合祀の儀を執り行うに当たって寄与された方である。

靖國神社の一番のものは、国のために命を捧げられた英霊を祀ることに尽きる。「ものふのかなしき命積み重ね積み重ね守る大和島根を」である。

靖國神社の本殿に祀られている英霊簿記載の御祭神は、嘉永6年（一八五三年）の黒船来航以来二四六万七千余柱であり、その中には女性五万七千余柱、当時日本人であった朝鮮・台湾出身者八万余柱（その中には李登輝前台湾総統の実兄も含まれている）も含まれている。また、本殿内の相殿には、内々陣へお遷しするまでの御霊（千鳥ヶ淵戦没者墓苑のお骨を含む）が祀ら

また、台湾人留学生で、日本李登輝友の会青年部副部長の薛格芳さんは、今年5月30日〜6月9日の間来日された、台湾の李登輝前総統ご夫妻の「奥の細道」探訪の旅に随行した際の感想や、李登輝先生が語った日本へのメッセージ（日本会議の月刊誌「日本の息吹」8月号掲載）に触れつつ、「日本人は、自国の素晴らしい文化や歴史、伝統を余にも知らな過ぎるのではないかと誇りと自信を持ってもらいたい。李登輝先生ご夫妻一行は、来日中の6月7日に靖國神社に英霊として祀られているお兄さんの御霊に会うことができたが、同様に靖國神社には、当時日本人であった台湾出身者二万七

千余柱の英霊が祀られています。これらの英霊は、靖國神社で祀ってもらえなかつたら、どこで祀ってもらえるのですか、台湾では祀ってもらえないかもしれません。戦後台湾人は、中国大陸からやって来た国民党政府の弾圧を受け、日本統治時代の教育、文化等を一掃しようとしたが、今でも私たちの祖父母は、日本の統治時代を懐かしみ、日本の教育、文化の素晴らしさを語り、台湾の振興発展に尽くした日本人を尊敬しています。台湾と日本は、言わば運命共同体です。日本にとって台湾は、国防上、通商上色んな面で大事な国です。もっと多くの日本人に台湾の重要性を知ってもらい、指導と支援、協力をしてもらいたいです。」と語り、日本人の奮起を促されたのは、いささか汗顔の思いであった。

正午を過ぎて社頭へ向かう人波はますます増え、拜殿前には参拝者の長い列ができる有様。この分では参拝者の数は昨年の約25万8千名を上回るのではなかるうか。一人でも多くの人が参拝することによって国のために命を捧げられた英霊の御心が伝わることにならる。社頭には英霊の遺書や遺詠が掲げられているが、多くの人々がその前に佇んでいる。戦争を知らない若い人の姿も多く見受けられる。

「あめつちのまことのみたまあつまりてやまと心となりにつらしも・・・

英霊こそは、日本人の精神としての大和心を極めつくして散華されたのである。」これは、最高裁長官を退官後、昭和51年6月から昭和54年5月急逝された石田和外氏の会長就任挨拶の中で言葉である。氏は、昭和53年7月靖國神社第六代宮司に就任された松平永芳氏の相談を受け、法的には何ら問題ないことを明言されて、松平宮司が、長年の懸案であったいわゆるA級戦犯とされて刑死を遂げた7名のほか未決拘禁中病死の2名、受刑中死亡の5名、計14名の殉難者の合祀を決断され、同年秋に合祀の儀を執り行うに当たって寄与された方である。

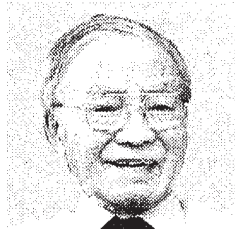
靖國神社の一番のものは、国のために命を捧げられた英霊を祀ることに尽きる。「ものふのかなしき命積み重ね積み重ね守る大和島根を」である。

靖國神社の本殿に祀られている英霊簿記載の御祭神は、嘉永6年（一八五三年）の黒船来航以来二四六万七千余柱であり、その中には女性五万七千余柱、当時日本人であった朝鮮・台湾出身者八万余柱（その中には李登輝前台湾総統の実兄も含まれている）も含まれている。また、本殿内の相殿には、内々陣へお遷しするまでの御霊（千鳥ヶ淵戦没者墓苑のお骨を含む）が祀ら

れていて、慰霊の対象となっており、戦死・戦病死された軍人・軍属（従軍看護婦・船員・報道員等）・準軍属（民間防空員・勤労働員学生・女子交換手等）のほか幕末の志士、法務死者（靖國神社では昭和殉難者）等の方々も祀られている。また、「元宮」（本殿に向かって左側回廊外側の二社殿のう

## 瀬島名誉会長を偲んで

会長 山本 卓眞



瀬島龍三名誉会長は、本年九月四日早暁、九十五歳の天寿を全うされました。茲に謹んで追悼の誠を捧げ、特攻隊慰霊顕彰会の会長に御就任以来の、特攻隊戦没者に対する慰霊顕彰事業への御尽力に対して、深甚の謝意を表するものであります。

名誉会長が、戦後、我が国の政財界を始めとする各界で、多大の貢献を続けて来られたことは、会員の皆様方のご高承のことと存じます。しかしながら、最後まで慰霊顕彰事業に献身されたことは、必ずしも広く知られていな

ち右側の御社）は、文久3年、幕末の志士の霊を祀るため、幕府にかくれて少数の有志により京都に建立された招魂社の元をなす小祠で、昭和6年の奉納鎮座。左側の「鎮霊社」（昭和47年創建）には、国内戦で賊軍となった方々（西郷隆盛他）並びに全民間の戦禍犠牲者の御霊と共に、国籍を問わず万国

のように思われます。

昭和二十八年に発足した、特攻平和観音奉賛会は、昭和五十六年に、特攻隊慰霊顕彰会に組織替えをして、会長に推戴した竹田恒徳元宮様が、平成五年にお亡くなりになって、後任に当時伊藤忠商事の特別顧問であった、名誉会長が就任されました。

その時名誉会長は、特攻隊戦没者に対する慰霊顕彰は、確実に後世に継承されなければならず、その為には、会を財団法人化する必要があると、強く指示されました。その結果、翌平成五年十一月に、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が設立されたのであります。以来、平成十六年四月に名誉会長に就任されるまでの間、本会の発展に尽力して来られました。

名誉会長は、昭和六十二年四月に、財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の会長に就任されて、本年四月に名誉会

（米・英・仏・支他）の戦死者・戦禍犠牲者の霊が祀られている。この二社は、宮司はじめ神社職員により、毎日のお勤めが行われている。したがって、戦没者墓苑にお預かりしている「御遺骨」も、将来にわたって収集の術のない空中散華者や海底深く横たわる「御遺骨」も、また、それぞれの墳墓に眠

長に就任されるまでの間、身元の判らない収集御遺骨の埋葬と慰霊に奉仕を続けて来られました。

平成四年六月からは、昭和四十一年に設立された財団法人南太平洋戦没者慰霊協会が、平成四年にシベリア抑留中に非業の最期を遂げた方々に対しても、対象を拡げて財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会に改名された機会に、会長に就任されました。

更に平成十七年七月には、多くの慰霊団体が、会員の老齢化に伴う会員数の減少という厳しい状態に直面しつつあることを直視して、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴いて、財団法人大

る「御遺骨」も、全てその御霊は靖國神社に祀られているのである。このことから靖國神社が、幕末以来の全ての国の、全ての戦没者を慰霊する唯一の施設であることを銘記しなければならぬ。

靖國神社こそが日本人の心の拠り所なのである。

東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会を設立されて、会長として最期まで幾つもの慰霊団体の業務に身を挺して来られたのであります。

残された私共は、瀬島名誉会長の御意志を体して、特攻隊戦没者の慰霊を象徴として、全戦没者の慰霊顕彰という日本人として決して忘れてはならないことを、我が国の風土の上に永年に亘って培われて来た日本人の心と共に、後世に継承して行く努力を重ねて行くことを、改めて誓うものであります。

瀬島名誉会長の御冥福を心からお祈り申し上げます。



歩兵第三十五聯隊旗  
(旗手 瀬島少尉)



### 奉納雪洞に秘める思い

田中 賢一

靖国神社たま祭に会員が奉納した雪洞九点は前号で紹介したが、その一つについて遅れながら申し述べたい。それは会員の小栗楓子さんが次の歌を揮毫して奉納したのであるが、そのことについてである。

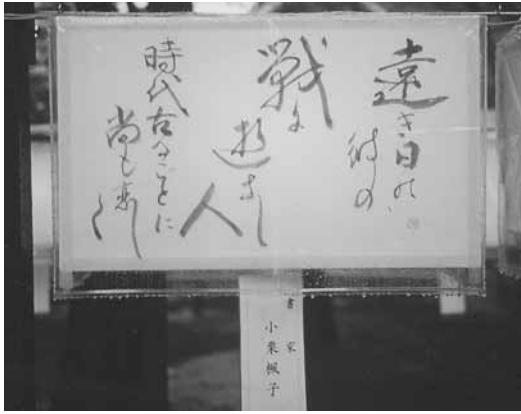
遠き日の

彼の戦に

逝きし人

時代古るごとに

尚も恋しく



逝きし人とは、この女性が将来を約束した林義則少尉である。林少尉は第一〇五振武隊長として20年4月22日知覧発沖縄近海で散華された。



林少尉は岐阜県可児郡御高村出身、岐阜県師範二部を出て、東京農業教育専門学校に学び、徴兵で騎兵第三聯隊に入営、甲種幹部候補生となり、18年5月より騎兵学校幹部候補生隊で教育を受けた。幹候9期の機甲科は約二五〇人程いたらしい。卒業は12月だったが10月頃志願者は航空や船舶に転科し、航空操縦学校や船舶練習部に入った。その数は明確ではないが五〇名くらいと想像する。戦後の調査でその中九名が航空特攻戦死となっている。以上は機甲科だけのことで、歩砲兵は予備士官学校で教育したので、同様だった

と思う。とにかく殉国の精神に燃えた若い幹部候補生が、進んで国難に当たろうとする気持ちが発溢していたので、特攻隊の名簿を見ても幹候九期は多く載っている。

林候補生は太刀洗飛行学校菊池教育隊で18年11月から翌19年3月まで基本操縦の教育を受け、満洲にて実用機の訓練を受ける。その部隊は第二十五教育飛行隊(白城子)、第四錬成飛行隊(桂木斯)、第十三錬成飛行隊(公主嶺)と転属し、一人前の戦闘操縦者となり、第百五振武隊を編成し、その隊長となった。少尉任官は19年7月である。

菊池教育隊を卒業し渡満する間、帰郷して村役場を訪い、当時役場に勤めていた小栗さんと会うが、これが最後の出会いとなる。

その後はすべて手紙だけのお付合いとなる。そして知覧出撃前に林少尉が書き送った手紙、

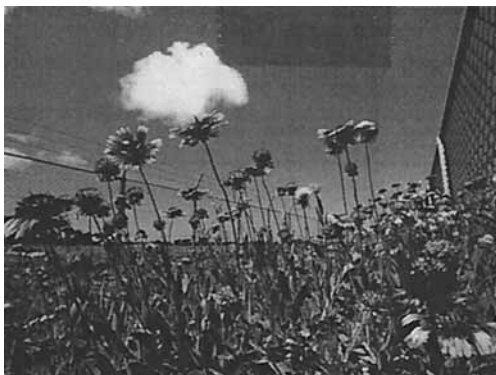
「いよいよ今日出撃する。この期に及んで何も言うことはなし。お前の心を大切に持ってゆく。体を大切に。静かに平和に暮してくれらることを祈る」

最後に会った村役場で楓子さんが渡した紙片「大空を御楯と翔ける雄姿にもいとけなき日の面影残る」お二人は小学校同級だった。

### 第一〇五振武隊

階級	氏名	出身別	戦死日
少尉	林 義則	幹候9期	20・4・22
少尉	中川昌俊	特操1期	20・4・22
少尉	渡辺利広	特操1期	20・4・22
伍長	小野寅蔵	少飛14期	20・4・22
伍長	陣内政治	少飛14期	20・4・22
軍曹	藤野道人	少飛11期	20・4・22
伍長	田淵哲雄	少飛14期	20・4・22
伍長	日下弘美	少飛14期	20・4・23
伍長	石川正美	少飛14期	20・5・4
伍長	山本儀吉	少飛14期	20・5・4
伍長	仲西久雄	少飛14期	20・5・25
伍長	服部武雄	少飛14期	20・5・25

編成当初の全員が出撃戦死している。



当会会員 仲田千穂さん作 写真集「特攻花」

# 空母「雲龍」の海没と

## 忘れ難い人

田中 賢一

佐世保海軍墓地に雲龍の慰霊碑がある。その碑文にいう。

航空母艦雲龍（一七四八〇噸）は太平洋戦争愈々苛烈を極める中昭和十九年八月六日横須賀海軍工廠にて竣工し海軍機動部隊の主力である第一航空艦隊に編入された

竣工するや否や海軍少将小西要人艦長のもと千五百余名の乗員一致団結祖国と民族の為身を鴻毛の軽きにおき日夜ひたすら出撃に向けての訓練に励み昭和十九年十二月十七日マニラ方面緊急輸送作戦に呉軍港を出撃東支那海大陸沿岸を一路激戦地のマニラに向かった 十二月十九日一六三七時及び一六五一時敵潜水艦の雷撃を受け勇戦空しく海底深く沈んだ小西艦長はじめ乗組員 便乗中の第六三四海軍航空隊将兵 陸軍滑空歩兵第一聯隊将兵が艦と運命を共にされ生存者は僅かに百四十二名であった 童顔十五歳の少年兵も 学徒出陣の少尉もいた 初めて生まれた子にも会えなかった兵曹もいた 父、母に、兄弟姉妹に、最愛の妻や子に

も別れを告げることもなく嵐の海にのまれてしまった

あれから四十三年 今日この平和な繁栄は英霊の方々の尊き犠牲により築かれた

このたびやっと遺族、生存者相つどい御魂らを慰め再び戦争の悲劇を繰り返さないことを希ってここ佐世保の海軍墓地に慰霊の碑を建立する 御魂よ 安らかに鎮り給え 合掌 昭和六十二年十一月十九日

航空母艦雲龍戦没者 慰霊碑建設委員長 森野 廣 元雲龍航海士

乗艦していた陸軍部隊について、碑文には滑空歩兵第一聯隊だけしか書いてないが、挺進集団の次の部隊が乗っていた。

- 集団司令部人員の大部
- 滑空歩兵第一聯隊の主力
- 挺進工兵隊の一個中隊
- 挺進通信隊の一個中隊
- 滑空飛行戦隊の一部
- 第百三飛行場中隊

輸送指揮官は集団司令部付の面高俊秀少佐だった。挺進集団の生存者は数名に過ぎないが、面高少佐は敵魚雷命中の衝撃を受けた時も、落着いて碁を打っていたという。



慰霊堂に掲げてある絵

さて私はこの人とは三回も巡り合わせがあり、御縁はまことに深いものがあった。

士官学校予科を卒え士官候補生として騎兵第十六聯隊に配属されたとき、面高大尉は新設の機関銃中隊長だった。天衣無縫という言葉そっくりの人だった。当時聯隊には古馬で白馬が一頭いて、これは吉原聯隊長の乗馬だった。騎兵聯隊には毎年育成馬が何十頭か補充されるが、その年の補充馬の中に白馬が一頭いた。新馬調教して各中隊に新馬を分配するのは、籤引で順番に取るのだが、機関銃中隊が一番札を引き当てたので、最先に白馬を取った。その時の得意そうな顔、今でも目に浮かぶ。

私は本科卒業とともに騎兵第一旅団の十四聯隊付となり、蒙疆の包頭に赴任した。一年ばかり経ったころ旅団の戦車隊長に面高さんが着任された。しばらくして旅団の計画で中少尉の集合教育があり、三年振りでお会いした。この教育の中に戦車隊長の行った対戦車戦闘の展示演習があった。このことは会報69号に栗林旅団長のことを述べた中に書いておいたが、重ねてのべれば、突進して来る敵戦車に発射発煙筒で目つぶしして肉迫攻撃するという構成だった。何回も予行を行ったらしく、発煙手の場所、肉攻手の潜伏場所など壕が掘ってあった。敵の戦車は勿論この隊の95式軽戦車である。いよいよ本番で、発煙筒を打ち込んだが予行の時と風向きが反対だったらしく、一向に目つぶしならぬ。肉攻手はまごまごしていたがやむなく暴露突進し、この展示演習は失敗のこと歴然だった。

「面高さん（めんこうさんと呼んだ）

何と締め括るか我々は興味津々だった。めんこうさん曰く「日本一の戦車隊長が計画し、日本一の戦車隊員がやっても、対戦車戦闘はこのように難しいものだ。それがわかれば本日の教育は目的を達した」とふんぞり返って言った。正に面高さんの面目躍如とした一幕だった。

さて三回目の巡り合わせは、昭和十八年十月陸軍挺進練習部の隷下に滑空部隊が新設された。その一つに挺進戦車隊があり、隊長に騎兵学校教官の面高少佐が発令された。当時私は挺進練習部の本部にあって教育訓練担当の幕僚だった。部隊の所在地は宮崎県児湯郡川南村で急行も止まらない小駅なので隣の高鍋到着時間を打ち合せ迎えた。面高さんは夫婦で着いたが、ずいぶん田舎だな、今夜は宮崎へ泊まるよと言って下りない。せっかく宿を取っておいたのに、相変わらずだと思いいも立たなかった。

#### 挺進戦車隊と面高独特の部隊練成

戦車を搭載できる滑空機はまだ出ていなかったが、早晚実用化する見通しのもと、次のような部隊が編成された。本部、戦車中隊（2式軽戦車一四輛）、自動車中隊（四輪起動小型自動車六四輛）、材料廠。

自動車中隊は輸送隊であって、便宜上戦車隊の中に入れていたもので、隊の実質は戦車一個中隊である。この戦車を空輸する滑空機のこととは後で述べるが、小型自動車車を空輸できる滑空機「ク」18はすでに滑空飛行戦隊が持っていた。

2式軽戦車は全備重量7.2噸、乗員3名、車高は極めて低く、運動性は優れ

ていた。37ミリ砲と機関銃が双連になっており右の引金が砲、左の引金が銃という当時としては斬新な構造になっていた。

日本陸軍の戦車用法には二つの流れがあり、歩兵学校や千葉戦車学校の思想は陣地攻撃で歩兵の支援に戦車を使うことを主眼としていた。これに對し騎兵学校では、たとえ小兵力でも戦車を主体とした機動用法を唱えていた。この考えに徹して成功したのは、マレー作戦における搜索第五聯隊（佐伯搜索隊）である。

騎兵学校で研究と教育に従事していた面高少佐は勿論この考えだが、手持ちの兵力には戦車以外には何も無い。そこで戦車中隊の車外員や自動車中隊の人員を歩兵に仕立て、戦車の後部に踏板を取り付け、一車に三名の跨乗歩兵を乗せて盛んに練習していた。私に見に来いというので、度々見に行った。

もう一つこの人の教育で感心したのは、将校教育で対抗現地戦術である。専習員を赤青二手に分け、相対する二個所に配置し、両方に搜索計画と前進部署を書いて出させ、それぞれ搜索計画に見合った状況を与える。その状況というのは教官が勝手に作るのではなく、相手方の前進部署で搜索の結果当然知り得ることを与える。このように

私が隊長になってから三笠宮の御視察があり跨乗歩兵を使う訓練を供覧した



松本武彦画く挺進戦車隊戦闘の想像図





# 「海行かば…」の歌の出所

田中 賢一

聖武天皇の天平二十一年二月と四月に、陸奥の国から黄金を貢ぎした。当時東大寺の大仏を建造しており、金の欠乏に悩んでいたので、天皇は大いに喜ばれ、四月一日にこれに関する詔書が下された。その中に大伴氏の祖先以来の忠功を賞されているので、家持は感激して次の歌を作った。

葦原の 瑞穂の 国を 天降り しらし  
めしける 天皇の 神の命の御代重ね  
天の日嗣と しらし来る 君の御代御  
代 敷きませる 四方の國には 山川  
を 廣み淳みと 奉る 御調寶は 數  
へ得ず 盡しも兼ねつ 然れども わ  
が大君の 諸人を 誘ひ給ひ 善き事  
を 始め給ひて 金かも たしけくあ  
らむと 思ほして 下悩ますに  
鶏が鳴く 東の國の 陸奥の 小田な  
る山に 金ありと 奏し賜へれ 御心  
を 明め給ひ 天地の 神相納受ひ  
皇御祖の 御靈助けて 遠き代に  
なかりし事を 朕が御世に 顕してあ  
れば 食国は 栄えむものと 神なが  
ら 思ほし召して もののふの 八十  
伴の雄を まつろへの むけのまにま  
に 老人も 女童兒も 其が願ふ 心  
足ひに 撫で給ひ 治め給へば ここ

をしも あやに貴み うれしけく  
よよ思ひて 大伴の 遠つ神祖の そ  
の名をば 大来目主と 負ひ持ちて  
仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行  
かば 草生す屍 大皇の 邊にこそ死  
なめ 顧みは 為じと言立て 丈夫の  
清きその名を 古よ 今の現に 流さ  
へる 祖の子等ぞ 大伴と 佐伯の氏  
は 人の祖の 立つる言立 人の子は  
祖の名絶たず 大君に 奉仕ふものと  
言ひ継げる ことの職ぞ 梓弓 手に  
取り持ちて 剣太刀 腰に取り佩き  
朝守り 夕の守りに 大君の 御門の  
守護 吾をおきて また人はあらじと  
いや立て 思ひし増る 大君の 御言  
の幸の 聞けば貴み  
(意訳)

葦原の瑞穂の国に天降り統治なさつ  
ている大君は、代々受け継がれておっ  
て、今のみ代にいたった。そして領有  
しておられる土地は广大であり、財宝  
は数えきれない。  
大君は国民を率いて、よい事をお始  
めになった。(大仏お造りになる事)と  
ころが悩むことが起きた。それは費用の  
不足である。その時陸奥の小田なる山  
に金が出たと言う報告があり、悩みを  
晴らすに至った。天地の神がよしとお  
引き受けになり、皇祖の神がお助けに  
なり、古来なかったことが現れた。統



治なさる 国を 栄えさせようと 神様がお  
考えになった。大勢のもののおふを従え  
老人や女子供も願いを叶え、愛撫し給  
うのだ。大君はうれしくお思いになられ  
たが、それにつけてもお考えになられた。  
大伴の遠い先祖は大来目主と申し、  
海行かば水漬く屍山行かば草生す屍大  
君の辺にこそ死なぬ顧みはせじと遍っ  
て、丈夫の清い名を今に伝えている。  
我等はその子孫である。大伴と佐伯の  
一族は先祖の申ししているこのことを、  
子孫として恥ずかしめてはならぬ。大  
君に仕えまつるといふこの職務は、梓  
弓を手に執り、剣太刀を腰に佩き、朝  
夕皇居を守らねばならぬ。大君の御門  
の守り我らを措いて他にない。大君の  
お言葉は誠に尊い。  
この歌が現在謡われるようになった  
のは、昭和十二年日本放送協会が、信  
時潔という作曲家に委託して曲を作っ  
てもらい、戦意高揚のため度々ラジオ  
放送したことによる。



反歌三首  
反歌とは長歌のあとに添える短歌で  
長歌の大意を要約し、あるいはその補  
足を述べるものである。本稿の主題と  
離れるが、万葉集に出ているので追記  
する。  
丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸を聞  
けは貴み  
大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立  
て人の知るべく  
天皇の御代栄えむと東なるみちのく  
山に金花咲く  
私の中学同級生でわが会の会員でも  
ある原崎郁平君は、全国にある万葉の  
歌碑を調べていて、この二枚の写真は  
同君の提供による。上の海ゆかばの碑  
は、京都竜安寺の門前にあり、鈴木孝  
雄大将の揮毫になる。下の碑は三番目  
の反歌を刻んだもので、宮城県遠田郡  
湧谷町にあるが字はよく読み取れない。

# 碑は語る特攻隊③

田中 賢一



下関市小月町蓮成寺境内

散る時が

浮かぶときなり

蓮の花

山本少尉

詠者山本三男三郎は松山高商出身幹候9期、飛行第四戦隊で編成した回天制空隊隊長。

20年4月18日太刀洗上空でB-29に体当たり撃墜戦死。

その日記にいう

(昭和19年12月12日)雲染む屍、何と崇高なるそして壮烈なる然かも美しい響を持つ言葉だろう。北九州の空で皇土防衛の第一線の責任の為に、B-29を身機一体となって撃墜した野辺機、それは単なる感傷的なもの即ち衝動ではない。(編者注 これはB-29に対する体当たりが正式戦法として取り上



げられる以前の8月20日に同戦隊の野辺重夫軍曹が体当たり撃墜戦死したことをいう。)清純にして烈々たる若人の心なのだ。平常の大精神を一つの事実として顕現せしめたるに過ぎないと確信する俺は言う「俺は死ぬのだ」と、我々の世代が我らの命をもって敵を倒さずして、何者がこの難局を打開勝利へ導く戦機を掴み得るだろう。俺は死ぬ、しかし俺は勝つのだ。勝利の黎明の鐘は高らかに俺達の腕でかつぐのだ。人生二十五年何の感傷があるうぞ。

(12月13日)忠節の心の根幹をなすものは報国の心である。「義は山嶽よりも重く身は鴻毛よりも軽しと覚悟せよその操を破りて不覚を取り汚名を受くるなかれ」と教えられている。このお訓しこそ忠節の最高点のものだと考えられる。

特攻隊の敢闘はこの忠節の御訓を最

高度に発揮したものにしか過ぎない。

「骨ばこに小さくねむり帰る日のあろうと家族のものよ嘆くな」

(12年12月17日)身辺の整理も大体出来たようだ。遺書・遺爪も準備出来た。安川と母上とに書く。本日特攻隊一同師団長閣下・戦隊長と一緒に記念撮影する。



中央は第十二飛行師団長古屋健三少将、その向かって左戦隊長小林公二少佐、左端が山本少尉



海法秀一画

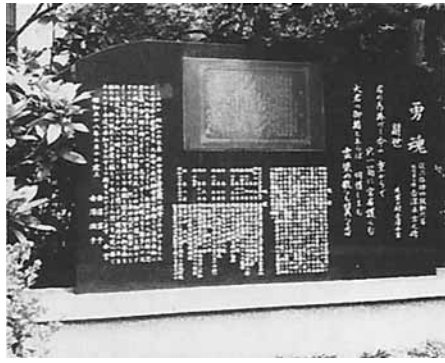
B-29の来襲が激化し我が戦闘機が要撃に奮闘するが、高空性能が敵機より劣るのでなかなか成果が上らない。そこで自発的に体当たり撃墜戦死する者が出るに及び、19年11月に至り第十(東部)、第十一(中部)、第十二(西部)の各飛行師団では体当たり専任部隊を編成し、その飛行機は装備火器等を取り外し機体の軽量化をはかった。この師団では、飛行第四戦隊に編成を命じ、回天制空隊と命名した。



# 碑は語る特攻隊④

## 吉沢平吉之碑

田中 賢一



北上中という情報が頻りにあって、ピストの空気が俄然緊張した。この頃戦隊は二式戦から四式戦に機種変更は終わっていた。私はいつもの通り第二小队長吉沢中尉の僚機である。

「伴少尉僚機」と申告すると、微笑しながら中尉は「今日についてこいよ」と、これまで出動の度に僚機として上がったが、第一撃をかけるのと長機について行けず、単機行動となるのが常であった。そのときはこれを注意されたものと思った。見れば吉沢中尉は誰から貰ったのか、首から小さなマスコット人形をぶら下げてここにこしている。これまでの出動には無かった装いだ。

この碑は遺族の建てたもので、武蔵野市吉祥寺東町の大法禅寺にある。飛行第四十七戦隊は成増飛行場に展開、帝都防空に任じていた。吉沢中尉は4式戦に搭乗、昭和二十年2月10日、太田上空に於いて、B-29に体当たり攻撃し、自らも散華した。同中尉はそれまでにB-29三機撃墜、五機撃破の偉勳を立てている。

手順で編隊離陸し、かねて指定の空域に向かっていた。ところが今日は様子が変わり地上の戦隊本部から「太田上空へ向かへ」と命令してきた。今日は太田の飛行機工場が敵の目標らしい。編隊は太田に向かい高度九〇〇〇米ぐらいで水平飛行に移った。吉沢機が急に増速したので、私もレバーを一杯に入れたがどうしても引き離されてしまう。そのとき右前方にB-29の編隊を発見した。吉沢機は敵を追い越して前方から攻撃する積もりだと思っていた。とうとう吉沢機は小さくなって見えなくなってしまう。まもなく前方

に猛烈な勢いで四式戦が攻撃するのが見えた。吉沢機かと思ったが確認できなかった。私は敵編隊の腹の下に潜って、機首を上げて射撃したが、敵からも射たれエンジンをやられ、付近の飛行場に不時着してしまった。その直協機に乗せてもらい成増に帰った。まだ吉沢機は帰っていない。

間もなく吉沢中尉は体当たりして戦死したことが、地上からの報告でわかった。私はこれを聞いて耳を疑った。なんで体当たりしたのだろう。しかも、私は出動時注意されたのに長機について行けず、その最後も確認できない始末だ。まことに相済まないことであつた。

吉沢中尉(少佐)はなぜ体当たりしたか、よく考えてみると、かねて覚悟の決行であったと思う。中隊では前回の要撃戦までに特攻隊員はすべてが戦死している。吉沢中尉は私と幸軍曹(1月9日の要撃戦で「幸軍曹ただ今より体当たり」と無線で放送し体当たりした)を前にして「俺が特攻隊になりたかった」と言った。中尉は中隊の先任将校として率先して体当たりすべきだと思つたが指名されなかった。そこで部下の特攻がすべて終わった時、所信に従い部下の後を追つたのだ。平素はなにも言わないのにこの日に限っ

て「今日についてこいよ」と私に言つたのは、自分の最後を僚機にはつきり見届けさせようと思つたに違いない。

### 感状

陸軍中尉 吉沢平吉

右者マリヤナ基地ヨリスル米空軍ノ数次ニ巨ル帝都空襲ニ際シ其都度勇戦以テB29撃墜二機撃破四機ノ赫赫タル戦果ヲ収メアリシガ昭和二十年二月十日敵B29約九十機ノ太田付近空襲ニ方リ勇躍之ヲ下館上空ニ要撃シ忽チ其一機ヲ撃破セリ敵機攻撃ニ方リ自機モ亦被弾損傷シタルモ吉沢中尉ハ毫モ之ニ屈スルコトナク勇戦奮闘遂ニ後統敵編隊ノ左外側機ニ対シ敢然体当リヲ決行シ之ヲ完全ニ撃墜スルト共ニ自ラモ壮烈ナル戦死ヲ遂グ吉沢中尉ハ真摯着実而モ内ニ烈烈タル気魄ヲ蔵シ戦技亦卓抜ナリ敵機要地ニ侵襲スルヤ憤然挺身シ勇猛果敢毎戦武勲ヲ重ネ遂ニ玉碎以テ要地援護ノ大任ヲ完遂セルモノニシテ其行動真ニ武人ノ龜鑑ト謂ウベク武功亦拔群ナリ仍テ茲ニ感状ヲ授与シ之ヲ全軍ニ布告ス

昭和二十年二月二十三日

防衛総司令官 稔彦王

## 安田操さんの歌集に込めて

田中 賢一

安田操さんは一昨年亡くなった安田義人さんの夫人である。この度「偲び草」と題する自作の歌集を上梓されたとして贈られた。昭和六十二年以降詠まれた短歌集であり、第一部は夫との思い出となっており、心打たれるものがある。安田君が亡くなってからのもの三首ばかり取り上げてみれば、

戦死者の霊を弔い六十年

夫はずかに黄泉へ旅立つ

逝きし夫離さず巻きし腕時計

今も寂かにときを刻みおり

息子の胸に抱かれし夫は空を飛ぶ

最後の飛行はお骨となりて

(郷里は島根県と聞いているので、埋葬に行ったのであろう)

私は歌集を贈られた礼は歌でと思

次の腰折を送った。

大空の勇士みまかり聞くすべのとわに絶へたることぞ悲しき

いく度か死線くぐりしますらをの

なを語り部と在りてまほしき

行く雲や流るる水と去りし君

はやぶさは行く空はてしなき

安田義人さんとは戦争中面識は無かつ

たが飛行第六十四戦隊は、パレンバン空挺作戦でも、その後の途中で引き返したラシオ空挺作戦でも、援護に任じてくれたので、事前の作戦会議で加藤戦隊長にはお目にかかっている。

戦後特攻協会や航空碑奉賛会で面識を得て、共通の思い出があるので語り合う中の、戦争中からの知己のようになってしまった。

ここに「耐燈社」発行の「日本陸軍戦闘機隊」なる書物がある。その中のエース列伝に載っている安田君のことを転載する。

## 安田義人准尉

大正5年島根県に生まれ、昭和11年12月現役兵として飛行第6連隊(平壤)に入隊したが、操縦者を志し、15年6月第81期操縦学生を終了して、満州・東京城の飛行第64戦隊に配属され、第3中隊に属した。16年1月広東に転進、

太平洋戦争開戦を迎えた。開戦第1日の12月8日安田曹長は、安間大尉の2

番機として、スнгеイパタニ爆撃掩護に出撃、空戦はなかったが、燃料を使い

いはたし、滑空状態でようやくフコク島基地に帰着した。その後マレー半島

に躍進し17年1月シンガポール攻撃に16回出撃して、ハリケーン2機(うち

不確実1)を撃墜、2月にはパレンバンで1機、バタバア上空で1機を加えた。

ついでビルマに転戦、4月10日のローウィン攻撃ではP-40を撃墜した帰途奇襲されて被弾し、ようやくタイのチェンマイ基地に生還した。また29日にはラシオで空挺掩護に出動中、機の故障で敵中の密林に不時着、原住民に助けられ、120kmを突破して3日後に基地に生還した。5月には加藤戦隊長と共に

アキャブへ前進、21日には偵察に飛来したハドソンを単機でチタゴン沖まで追って撃墜したが、翌22日ブレニム来襲の報により、加藤戦隊長らとともに迎撃に出動した。安田曹長は先陣を引き受け、逃走するブレニムを一撃したが、逆に被弾負傷し、アキャブ基地に着陸した。加藤中佐の自爆は、安田機の離脱直後のできごとであった。

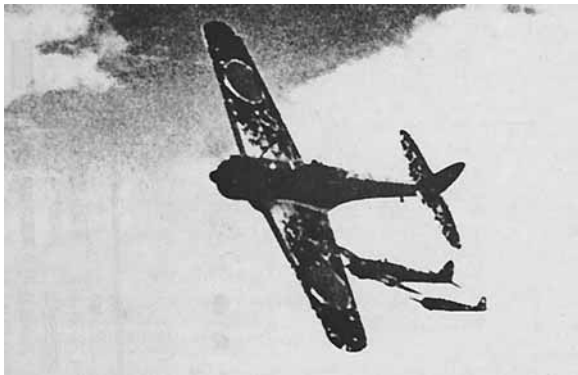
その後も、ビルマ航空戦に健闘し、



同年末にはB-24をラングーン上空で夜間に迎撃して撃墜したが、側方銃座により被弾炎上し、大火傷を負って沼地に落下傘降下し、救出された。

18年7月熊谷飛行学校の助教として

本土に帰還、20年4月飛行第26戦隊付に転じ、8月14日びわ湖上空の空戦でP-51を撃墜したのを最後に、終戦を迎えた。爆撃機攻撃を得意とし、総撃墜数10機以上。



ビルマ上空を飛ぶ64戦隊の1式戦II型

短歌に見る昨今

田中 賢一

和歌は古来我が民族の心の表現である。国を思う歌は萬葉以来綿々と続いている。然るに何ぞ今の世に暁天の星を見るが如きは。

ここに昭和十七年に編集された「愛国百人一首」

なる書物がある。時代区分を飛鳥藤原、奈良、奈良(防人)、平安(前期)、平安(後期)、鎌倉、吉野、室町織豊、江戸(前期)、江戸(中期)、江戸(後期)、江戸(幕末)、としてそれぞれ代表的短歌を合計百首挙げてある。その中の幾つかをかかけてみよう。丈夫の 弓上振り起し 射つる矢を

後見む人は 語り継ぐがね 千万の 軍なりとも 言挙げせず

笠 金村

命をば 軽きになして 武士の道よりおもき 道あらめやは

源 到雄

身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも とどめおかまし 日本魂

吉田松蔭

とりて来ぬべき をのことぞ念ふ 土やも 空しかるべき 万代に

高橋蟲麻呂

かへらじと かねて思へば 梓弓 なき数に入る 名をぞとどむる

楠 正行

岩が根も 砕かざらめや 武士の国のためにと 思ひきる太刀 大君の 御旗の下に 死してこそ 人と生れし 甲斐はありけれ

語り継ぐべき 名は立てずして 大君の みこと恐み 大船の 行きのままに やどりするかも

山上憶良

いのちより 名こそ惜しけれ ものものふの道にかふべき 道しなれば

森迫親正

取り佩ける 太刀の光は ものものふの常に見れども いやめづらしも 大君の 御楯となりて 捨つる 身と

田中綏猷

降る雪の 白髪までに 大君に 仕へまつれば 貴くもあるか

雪宅麻呂

大御田のみなわも泥も かきたれば とるや早苗は 我が君の為 すめ神の 天降りましける 日向なる

加茂馬淵

大山の 峰の岩根に 埋めにけり わが年月の 大和だましい

久坂玄瑞

大君の 命かしくみ 磯に触り 海原わたる父母おきて

橋 諸兄

あし原や この国ぶりの 言の葉に 栄ゆる御代の 声ぞ聞ゆる

楢取魚淵

思へば軽き わが命かな 大山の 峰の岩根に 埋めにけり

津田愛之助

霰降り 鹿島の神を 祈りつつ 皇御軍に 吾は来にしを

大舍人部千文

しきしまの 大和ごころを 人間はは 朝日に匂う 山さくら花

小沢蘆庵

もののふの やまと心を より合せ ただひとすじの 大綱にせよ

真木保臣

今日よりは 顧みなくて 大君の しこの御楯と 出で立つ吾は

今奉部与曾布

かけまくも あやに畏き すめらぎの 神のみ民と あるが楽しさ

栗田土満

誓ひしことを われ忘れめや

野村望東

高杉晋作

山のごと 坂田の稲を 抜き積みて 君が千歳の 初穂にぞ春く もろこしも 天の下にぞ 有と聞く 照る日の本を 忘れざらなむ

大中臣輔親

君がため 花と散りにし ますらをに 見せばやと思ふ 御代の春かな

加納諸平

君が代は 松の上葉に おく露の つもりて四方の 海となるまで 山は裂け 海はあせなむ 世なりとも

成尋母

かきくらす あめりか人に 天つ日の かがやく邦の てぶり見せばや 天皇に 仕へまつれと 我を生みし

藤田東湖

君にふた心 われあらめやも 曇りなき みどりの空を 仰ぎても 君が八千代を まず祈るかな

源 俊頼

我がたらちねぞ 尊かりける 君が代は いはほと共に 動かねば くだけてかへれ 沖つしら浪

伴林光平

末の世の 末の末まで 我國は よろずの国にすぐれたる国 西の海 よせくる波も 心せよ

源 実朝

天皇の 御楯となりて 死なむ身の 心は平生に 楽しくありけり 君が代を 思う心の ひとすじに

鈴木重胤

神の守れる やまと島根ぞ 命をば 軽きになして 武士の道よりおもき 道あらめやは

宏 覚

吾が身ありとも おもはざりけり 大君の ためにはなにか 惜しからむ 薩摩の瀬戸に 身は沈むとも

梅田雲濱

道にかふべき 道しなれば 道のちより 名こそ惜しけれ ものものふの

源 正行

身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも とどめおかまし 日本魂

月 照

かへらじと かねて思へば 梓弓 なき数に入る 名をぞとどむる

源 到雄

岩が根も 砕かざらめや 武士の国のためにと 思ひきる太刀 大君の 御旗の下に 死してこそ 人と生れし 甲斐はありけれ

有村次左衛門

いのちより 名こそ惜しけれ ものものふの道にかふべき 道しなれば

楠 正行

取り佩ける 太刀の光は ものものふの常に見れども いやめづらしも 大君の 御楯となりて 捨つる 身と

田中綏猷

あし原や この国ぶりの 言の葉に 栄ゆる御代の 声ぞ聞ゆる

楢取魚淵

思へば軽き わが命かな 大山の 峰の岩根に 埋めにけり わが年月の 大和だましい

津田愛之助

しきしまの 大和ごころを 人間はは 朝日に匂う 山さくら花

小沢蘆庵

もののふの やまと心を より合せ ただひとすじの 大綱にせよ

真木保臣

かけまくも あやに畏き すめらぎの 神のみ民と あるが楽しさ

栗田土満

誓ひしことを われ忘れめや

野村望東



愛国百人一首は昭和十七年に作られたのであるから、明治大正の時代のものまであってもよさそうだが、幕末までで終わっている。それに続くものとして、国語問題協議会（代表宇野精一）が出した「平成百人一首」がある。この歌集も記紀・萬葉の時代から挙げていて「愛国百人一首」と重複しているものもあるが、その中から明治以降のものを引用してみる。

あさみどり澄みわたりたる大空の

広きをおのが心ともがな

明治天皇

明治天皇の御製は九万三千三十二首もあるという。

この百人一首の解説書には右の御製に続いて次のものが掲げられている。何れも日露戦争中にお詠みになったものである。

年々に思ひやれども山水を

汲みて遊びむ夏なかりけり

子らは皆軍のにはに出て果てて

翁やひとり山田守るらむ

明治天皇の御製を掲げたので、大正天皇、昭和天皇

と続けてみよう。

神まつるわが白妙の袖の上に

かつうすれ行くみあかしのかけ

大正天皇

降る雨の音のさびしくも聞こゆるなり

世のこと思ふ夜はのねざめに

(大正八年)

かきくらし雨のふり出でぬ人心

くだちゆく世をなげくゆうべに

(大正九年)

国のまもりゆめおこたるな子猫すら

爪とぐ業は忘れざりけり

(大正九年)

遠つおやのしろしめしたる大和路の

歴史をしのびけふも旅行く

昭和天皇

昭和天皇の御製については稿を改めて書くことにする。

支那の古典毛詩大序に言う「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し言に発するを詩と為す」と。また大詩人白居易は言った「詩はたんに風雪に戯れ花草を弄ぶだけの、ものであってはならない。人の苦しみを救い助け、政治の欠陥を補うものでなくてはならない」と。彼はそれを「諷諭詩」と呼んだ。我が平安貴族が愛読した白氏文集の、長恨歌や琵琶行などは彼のいう諷諭詩ではなく感傷詩である。

このような考えに立てば特攻隊遺詠集に出ている歌は、悉く支那先哲の言に叶うものである。ここでは靖國神社発行の「英霊の言乃葉」より拾ってみる。

君のため何か惜しまむ若桜  
散って甲斐ある命なりせば  
海軍少佐 古野繁実

雲湧きて流るるはての青空の  
その青の上わが死に所  
海軍少佐 古川正崇

益良雄のゆくとふ道をゆききはめ  
わが若人らつひにかへらず  
海軍大将 山本五十六

うつそみはよし砕くともはらからの  
なさけ忘れじ常世ゆくまで  
海軍中尉 松吉正資

はたとせの三つのいのちはうつしよに  
かふるものなし母のふみみる  
海軍少尉 井上 長

面たれて涙かくせる吾が妻の  
ころくみてぞいざたち征かん  
海軍大尉 石川延雄

今も尚生き続けをり敵軍の  
重圍の最中に戦ひつわれ  
陸軍少尉 小原福三

身はたとひ千尋の海に散り果つも  
九段の杜に咲くぞ嬉しき  
海軍水兵 長弓野弦

皇国よ悠久に泰かれと願ひつつ  
桜花と共に靖國に咲く  
海軍少佐 高野次郎

斃れたる友を嘆かずいつの日か  
吾もたどりゆく道と思へば  
海軍少尉 寺尾博之

あふぎ見て飛び交ふ雲に父と呼び  
母とささやき独りほほゑむ  
海軍少尉 板橋泰夫

たらちねのちははは迎へん靖國に  
明日はゆくなり南冥の空  
海軍少佐 福山正通

うつそ身はもろこしの野に朽ちるとも  
魂は永久に大和守らむ  
陸軍曹長 谷 温

散りて行く我が身なりとは知りながら  
蝶ぞ恋しき春の夕空  
海軍少尉 加藤啓一

泣くだらう坊や思ひて子守唄  
今宵も東向ひて唄ひぬ  
陸軍軍曹 戸塚 昇

# 私の接した將軍達③ 木下 勇中將

田中 賢一

僅か1回の出会い

昭和十八年の夏頃だったと記憶するが、当時私は陸軍挺進練習部付で、本部にあって教育訓練担当の幕僚を務めていた。ある日練習部長の久米大佐から「航空本部付の木下少將が視察に見えるので部隊を案内せよ、来年師団になったらこの人が師団長になるらしい」と言われた。

久米大佐は砲兵から航空に転科した人で、部下に任せると細かいことは何も言わぬ。唯このときは木下少將は騎兵から航空に転科した人だ、と付け加えられた。私が騎兵出身ということ

はいつも念頭にあったらしく、前年南方に向かう折、広東に立寄った際、二十三軍の栗林參謀長を訪問するのに、私を連れて行かれたのもそうだった。

木下少將は騎兵第三旅団長をされたが私が落下傘部隊に来る前の聯隊長須藤大佐、旅団長栗林少將、それに木下少將と三人とも26期の騎兵である。私は木下少將とは初対面だったが、こんなご縁で初めから親近感を覚えた。

この視察は公式のものではなく、木

下少將が勉強の為に来られると聞いていたので、展示練習等はなく、説明は全部一大尉である私に任されていた。隊の現況を解説した書類はお渡ししたと思うが、あとは私が降下場や第三、

第四聯隊に案内し、道中の自動車の中で説明した。第一挺進団（挺進一、二聯隊と挺進飛行第一戰隊）はその時南方に出ていて、内地にあったのは、第三、第四聯隊と挺進飛行第二戰隊だけだった。練習部と両聯隊は唐瀬原降下

場に沿って一キロ程離れた所に兵舎があり、飛行場は一〇キロ程南の新田原にあった。途中木下少將から、色々なことを質問されたが、挺進部隊について事前に相当勉強されておられるよう

にお見受けした。挺進師団長という下馬評については、私は黙っていたし、木下少將も何も言われなかった。

今年の十月には滑空機搭乗部隊である歩兵、戦車、工兵、通信の諸隊が編成されることになっており、私は研究部の部員も兼任だったので、それらの部隊の編制案も承知しており、確か印刷して差し上げたと思うが、これから

の空挺部隊の主体は滑空機搭乗部隊になると申し上げた。前年5月のドイツ軍クレタ島空挺作戦は、グライダー主体の作戦で、我々はある程度情報を得

ていたのでそんなことも話題になった。

挺進練習部の滑空機部隊は、その時はまだ実現しておらず、滑空班と称し所沢で訓練と研究を行っていた。西筑波に移り滑空飛行戦隊となるのは、前記搭乗部隊が編成されたのと同様であった。落下傘兵を多量に養成するのは容易でないが、滑空機搭乗部隊なら既教育の将兵を集めれば直ぐに出来る。そんなこともお話ししたと記憶する。

木下少將にお会いしたのは後にも先にもこれ一回だけになってしまった。我々は翌十九年早々には師団になるものと期待していたが、一向に音沙汰はない。今にして思えば南方の戦局は全く攻守のころを変え、堂々たる空挺作

戦など望むべくもなく、それに見合う輸送機の生産が出来る筈もなかった。かくして木下師団長は日の目をみず、御当人は飛行師団長に転出された。

挺進師団は実現しなかったものの、十九年十一月には挺進練習部は解散して、師団より格下の挺進集団が編成されたが、従来からあった挺進練習部の隷下部隊が編合されたに過ぎなかった。

話の序でに集団の編成を述べれば、  
挺進集団司令部  
第一挺進団  
挺進第一聯隊  
挺進第二聯隊

第二挺進団

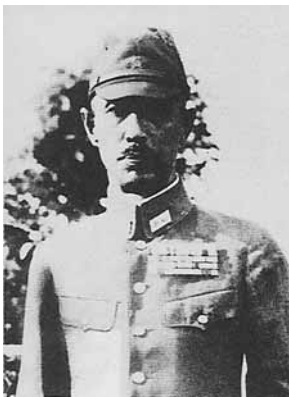
挺進第三聯隊  
挺進第四聯隊

滑空歩兵第一聯隊  
滑空歩兵第二聯隊  
第一挺進戰車隊  
第一挺進通信隊

第一挺進機関砲隊  
第一挺進工兵隊  
挺進飛行団

挺進飛行第一戰隊  
挺進飛行第二戰隊  
滑空飛行第一戰隊  
第一百〇三飛行場中隊  
挺進飛行団通信隊  
第一挺進整備隊

第二飛行師団長としてレイテ作戦に参加したが、第四航空軍の富永軍司令官の偏見に充ちた統率により罷免される  
木下中將は19年3月第四飛行師団長に補せられ、ルソン島にあったが、10月20日敵がレイテに上陸するや、飛行第二師団長に転じネグロス島に在って



レイテに対する航空作戦を指揮した。10月25日のレイテ方面航空総攻撃以来敵艦船攻撃や飛行場攻撃を続行し、また、レイテに向かう船団援護を行っていた。しかし、飛行機と搭乗員の損耗に対する補充は十分でなく、戦力は先細りの状態だった。

11月24日第四航空軍の計画による第

二次航空総攻撃に当たり、四航空軍司令官の頑な統率によって、木下師団長罷免問題が起きた。この間の事情を述べている公刊戦史の要点を抜粋すれば、本問題は第二飛行師団の爆撃戦力の不足が発端であった。レイテ地上決戦方針の具体化に伴う第四航空軍の戦闘指導方は、成文化こそしなかったが11月中旬末に概定して第二飛行師団が正式に受令したのは11月21日であった。当時の第二飛行師団実働戦力は30〜40機で、戦闘隊の用途を勘案すると、対地攻撃戦力は襲撃の数機に過ぎなかった。

第二飛行師団としては、隷下である双軽の第75戦隊を四航空軍が召し上げ、11月中旬以来オルモックに空中補給を続けていることに半ば批判的な感想を持ち、在バコロドの寺田第四航空軍参謀長に連絡して第75戦隊の総攻撃使用を要請した。しかし、富永第四航空軍司令官はこの空中補給を第35軍に対する協力の重要な手段と認めており、絶

対に不可の旨を寺田参謀長に指示した。しかし、第二次総攻撃に特攻隊が若干配属されるだけで爆撃戦力皆無の第二飛行師団としては、第75戦隊の一時的総攻撃参加はきわめて自然なことと考え、寺田参謀長に要求する一方、当然、軍の許可があるものと感じていたのである。

ところが、11月22日までに第75戦隊が第二飛行師団指揮下に復帰する気配はなく、木下師団長は寺田航空軍参謀長の了解を得て22日改めて正式に意見申をした。

意見具申電報に接した第四航空軍では、かねて寺田参謀長を通じて第75戦隊当面の空中補給任務の重要性を説明済みであって、認可の意向はないが命令伝達(義号作戦等)のためバコロドに行く佐藤参謀から特に右の旨を伝達することにして返電しなかった。

23日になっても返電を受けぬ第二飛行師団は、翌日の総攻撃を控え、23日午後、第75戦隊の使用を要請する電報を繰り返した。これに対する返電はすぐには起案されなかった。佐藤参謀の第二飛行師団に対する連絡がなされている以上、再度の具申は軍司令官が峻拒するだろうという第四航空軍参謀らの躊躇があった。

23日夜になって、富永軍司令官は第

75戦隊が直協任務を終了してからの使用を許可し、「第75戦隊は延10機分の物料投下後、第二飛行師団長の指揮下に入るべき」旨の第四航空軍命令を発した。

23日、第75戦隊使用に関する意見具申電を繰り返しても、何らの返事を受けなかった第二飛行師団では、木下中

將の第75戦隊独断使用の決意が次第に固まっていった。同中將は従来、単に双軽部隊ばかりでなく重爆の第5飛行団あるいは海軍航空部隊等のレイテ統一攻撃を具申ししていたが、その実現の望みなしと感じたためでもあった。木下中將は11月7日、富永航空軍司令官がバコロドを去るに当たり「総てを戦勝の一点に結集するためには、一切を超越して断行すべき」旨訓示したことからも返電がないのは「この程度のこととは師団長の独断で処理すべし」という軍司令官の考えかとも推測していた。

第二飛行師団幕僚は寺田航空軍参謀長にも度々了解を求めたが、これに対して、寺田参謀長は、軍命令のない限りこれを承認できぬ旨を婉曲に述べた。一方、第二飛行師団に対し、第75戦隊の使用不許可の件を23日夕までに連絡するはずの佐藤航空軍参謀は、リパ

で義号作戦の件を伝達できたが、搭乗機が故障となり、23日バコロドに前進

できなくなった。

第二飛行師団長は前記「10機分の補給後、第75戦隊を指揮下に入れる」旨の航空軍指令を夜半過ぎ承知したが、24日のタクロバン攻撃に双軽を使用しても物料投下に支障がないよう、双軽に損害が生じた場合には戦闘機の代用も考慮したのであった。

24日朝、命令はないが、タリサイ飛行場で待機する第75戦隊長は、総攻撃参加部隊の出動時刻間際になって飛行場に急行してきた第二飛行師団作戦主任参謀野々垣中佐から「第75戦隊は11月24日、一時第二飛行師団長の指揮下に入るべし」と記述された電報受信紙を見せられたのであった。

土井戦隊長はタクロバン飛行場攻撃に双軽四機の出動を命じた。木下師団長は24日午前中タリサイ飛行場において、第75戦隊長の帰還状況を見守っていたが、一機は遂に帰らなかった。

木下師団長は第75戦隊長使用の旨を、早速報告した。

この報告電に接した富永軍司令官は激怒した。直ちに第二飛行師団長の職務を停止し、寺田航空軍参謀長に指揮を引き継がせてマニラに出頭するよう電命した。この電報は一二時頃バコロドに到着したが、木下中將は同日午後の戦況の重大性等により夕刻まで指揮を継



続し、翌25日夕刻マニラに向かった。

このようにして木下師団長は富永軍司令官によって罷免されたのであるが、南方軍では木下師団長罷免の処置を、富永軍司令官から、事後承認を求めてきたのに対し、親補職の師団長の職権を軍司令官限りの意向で停止できぬとして、その命令を修正させた。軍隊指揮の状態からは富永中將の言い分が道理としても、第四航空軍司令部内の意志疎通にも機微な問題があり、軍法会議にまでかけようとする富永軍司令官の意向は不適當であるとした。しかし一度このような事になった以上、木下

中將をそのままでは済まされぬことあり、その補職換えを中央に具申した。木下中將は11月27日付けで南方軍総司令部附に補せられた。富永航空軍司令官が同中將に対し、口頭で軍法会議に付すと述べたこともあったが、実現の方向には動いていなかった。

木下中將は11月29日、富永第四航空軍司令官に申告し、第二飛行師団関係部隊に、聖徳太子憲法の「和をもって貴しとなす」を引用した離任の辞を送り、12月11日台湾經由サイゴンに出発した。

以上が公刊戦史に載っているその間

## 私の接した將軍達④

### 吉田惠中將

田中 賢一

かれた随筆であり、感心して読んだが、今は手元がない。

ついでに私が接したその後の集団長について、寸評を述べれば、次の小島

吉田中將は騎兵集団が蒙疆に移った十四年一月から同年九月まで集団長だった。私は僅かな期間、吉田集団長の部下だったが、直接御指導を受けた記憶はない。しかし、当時聞くところによれば極めて理知的な將軍だったと言つ。騎兵月報に「桑の葉」という随筆を連載しておられた。蚕が桑を食って生長するように、若い後継者がこれによって育て欲しいという思いを込めて書

集団長は初度巡視で各地を廻るとき、当時私は包頭にいた騎兵14聯隊の小隊長だったので護衛を命ぜられた。騎兵第四旅団長当時襄東会戦で勇名をはせた將軍と聞いていたが、將軍たる器ではないと思つた。一小隊長のやることに一々口を出し、任せる度量がない。包頭戦で大失態を演じたのも幕僚に任せることが出来ず、何でも自分でやらねば気が済まなかったのだと思う。次の馬場集団長については、その下

の事情の概要であるが、木下中將の任務に対する積極性が、持たる器に欠けた富永軍司令官に拒否されたのであって、後に命令違反どころか敵前逃亡の大罪を犯した富永軍司令官の対応に、我々はくみすることはできない。南方軍総司令部付となった木下中將は、第五航空師団長に任ぜられた。航空師団とは作戦部隊ではなく、教育飛行団を隷下を持つ教育訓練部隊である。その後20年6月に東部軍司令部付に発令され、内地に向かい、20年7月7日立川に着陸する筈だったが、天候不良の爲大菩薩峠で遭難殉職した。

木下將軍とのもう一つの御縁  
將軍の女婿の溝口昌弘さん(49期)  
は、私が士官候補生で騎兵16聯隊に隊付当時聯隊旗手だった。出身將校団を同じくした駅だが、私は本科卒業時14聯隊に転属したので、その後一緒に勤務したことはなかった。ところが自衛隊に入ってから、第七師団(東千歳)で溝口さんが師団長、私が副師団長という期間が1年半ばかりあった。退職後も近くに居住し親密な間柄だったが今は亡い。

と味方を射つおそれがある。砲兵が射程延伸した後は歩兵は自らの火力で敵を制圧しつつ匍匐前進し、やがて立ち上がって突撃するというのが基本的な形とされていた。砲兵の支援を欠く敵陣五〇米の間が危険である。不意に現れた敵火、就中側防機関銃が最も恐ろしい。そのとき助けになるのが戦車であるとした。歩兵学校では歩戦砲の協同と称して、このような演習を盛んにやって全軍に普及した。

国産戦車の最初のもものは89式で次は97式であり、搭載火器は57ミリ榴弾砲である。敵の機関銃を射つには手頃であるが、対戦車戦闘には能力はない。

戦車兵は歩兵の一分科として扱われ、将校は歩兵から転科となっていた。昭和十一年戦車学校が出来るまでは戦車の実施学校は歩兵学校が兼ねていた。

吉田中将が騎兵監になった時、即ち昭和十四年九月第二次欧州大戦の発端となるドイツ軍のポーランド進攻が始まるのだが、ドイツはかねてより機甲部隊の育成に努めており、ポーランド進攻には機甲師団6個と機械化師団4個を使い、旧態然たるポーランド軍(その中には昔ながらの騎兵旅団が11個もあった)を瞬く間に撃滅してしまっ

## 海軍落下傘部隊一代記(続)

田中 賢一

### 降下訓練に依る殉職

実戦に参加するまでに降下訓練に三名の殉職者を出している。

ますらをのかなしき命 つみかさね  
つみかさねまもるやまとしまね

三井 甲之

この歌は昭和二年海軍が夜間演習中、駆逐艦蔵と葦が衝突し、知人の福田機関少佐が殉職したのを悼んで詠まれた

部を新設することを献策した。これにまず歩兵界が反対した。歩兵が育ててきた戦車を人材の多い騎兵に取られることを嫌った。教育総監部関係者は今まで総監の下にあった騎兵監部がなくなり、独立した機甲本部になることは、権限の縮小とみて反対した。紆余曲折の末陸軍省の裁定により、昭和十六年四月になって機甲本部が新設され吉田中将が初代の本部長に就任した。次は戦車師団の創設であるが、支那事変の早期解決に兵力を注ぎ込んで余力がなく、やがて大東亜戦争開戦で遅れに遅れ、十七年八月に戦車第一、第二師団より成る機甲軍が関東軍に出るので紹介する。

●海軍落下傘部隊創設の先駆をなした  
研究員の一人山辺雅男中尉(当時)  
記「実録太平洋戦争」より

### 恐怖の吹き流し

十月八日

時雨あがりのこの日、飛行場の芝生はまだ湿っていたが、訓練を執行することにした。

午前降下訓練で使用した落下傘を

来、吉田中将は軍司令官に任ぜられた。なお、別に戦車第三師団が北支に新設された。満州の機甲軍は勿論対ソ戦目当てであるが、戦局の焦点は南方であって機甲軍を運用する機会はなかった。

戦車(装甲車)を主体とする部隊は師団搜索隊であって、小型師団というには余りにも小さいものだが、乗馬騎兵から見れば吉田將軍の画いた軍隊に近付いたものと思うが、進攻作戦で大活躍した。



マレー作戦の搜索第五聯隊(佐伯部隊)、ビ

折り畳み、午後の訓練を開始した。

一ツ、二ツ、三ツ……

九六式輸送機の編隊から、つぎつぎに連続降下する降下員の黒い塊りが、五十メートルほどの間隔を置いて、整然と空中を落下する。そして白片をなびかせるや、パツ、パツと開いていく。だが、その中にただ一つ他の落下傘を追い越して、ドンドン落下していくのがあった。主傘体は完全に収納袋から飛び出している。

「おや?おかしいぞ。しかし、もう開くだろう」

私はこれを凝視した。主傘が吹流し

ルマ作戦の搜索第五十六聯隊(平井部隊)、河南作戦の戦車師団搜索隊(福島部隊)等がある。これらについて吉田將軍が何と言われたか伝わっていない。

十七年六月機甲軍が創設せられるにともない、かねてから研究を進めてきたところにもとずき、九月には「機甲作戦要務書」が發布された。そこには「戦闘の要訣は偉大なる機動力と穿貫的攻撃力とをもって敵を急襲し一挙にこれを殲滅するに在り」と謳い上げている。これぞ吉田將軍の目指すところであるが、国軍の戦車の質と量は必ずしもこれに添うものではなかった。

のような棒状になったまま、落ちつづけていく。

「開け!」

地団駄を踏んで叫ぶ。地上の比較物近くなってみると、猛烈な降下スピード。降下員は手脚をバタバタ動かし、正気なのだ。自由のきくはずもない落下傘降下。悲痛といおうか、じっと見つめる胸は張り裂けそうだ。あと五十メートル、三十メートル、二十メートル……

「アツ、危い!」

瞬間、ドスンという音がきこえたよ

うな気がして目をつぶった。やられた

か？

幸いにも、全身打撲の重傷を負いはしたが、生命に別状はなかった。すでに上空にあって、次から次へ飛び出しつつある降下員を、地上の無線機で瞬時にして制止することは不可能だった。輸送機の編隊が、あとからあとから降下員をバラ撒いていく。フワリフワリと降りてくる数十個の落下傘。その中から、またまた吹き流しが落ちてくる。

あと六十メートル、五十メートル、四十メートル、三十メートル……

「あっ、危い！開けッ」

落下傘がパッと開くのと、降下員が大地に叩きつけられるのと、ほとんど同時だった。降下員は倒れたまま起き上らない。

地上の指導員と地面に着いたばかりの降下員が、すでに現場に群がっている。これをかき分けて私もそこに到着した。

全身打撲死。千葉一等水兵はすでにことされてた。新参の降下員が、早くも千葉一水の落下傘を片付けにかかっていた。

「おい、ちょっと待て。手をつけるな」と何回も注意しておいたじゃないか。折り畳み方が間違っているかどうか早く吊索を手繰ってみる。動かしたら不

開傘の原因が解らなくなってしまっぞ」

だが、後の祭りだった。折り畳み方に誤りなし。不開傘の原因不明。原因のわからない事故ほど後味の悪いものはない。対策の施しようがないからだ。降下員の心の動揺も目に見えるような気がする。だが、戦機の逼迫は、われわれ落下傘部隊に一刻の余裕もあたえなかった。

「あと、一息、尻を乗り越えて降下訓練をつづける」

降下訓練指揮官の重責を負う私は、これまでも一日に一回は降下してきたが、この事故があつてからは、ことさらに率先して降下するようにした。

翌九日、降下訓練視察のため高松宮殿下を降下場に迎えた。

いつものように次から次へと美しく華やかに落下傘が浮かび、数百人の降下が順調におこなわれていった。

「アッ、吹き流し！」

昨日とまったく同じ状態の、軽く絞った吹き流しの恰好をした落下傘が、他の落下傘をグングン追い越して落ちてくる。

「開けッ！」

だが、駄目だった。今日もまた殉職者を出してしまった。待機中の機銃車を全速で吹っ飛ばして、私は現場に駆けつけた。後に控えた千五百人の生命

を助けるために、無慈悲といわずに

ばらく許してくれ、いずれ俺もあとからいくからな……こんな気持ちで、土にまみれた吊索を入念に一本一本手繰りながら、不開傘の原因を調べた。その結果は、折り畳み整備には誤りなく、不開傘の原因は、落下傘自体にあることが明瞭となった。

私は、航空隊司令、堀内部隊長、角田少佐とはかって、「降下訓練中止」の命令を出してもらった。

この日早速、私は飛行機で羽田へ飛び、藤倉航空工業に駆けつけて、応急用落下傘の量産を急いでもらうことにした。そして、事故の日から十日後に、ようやく応急落下傘が完成して届けられた。

こうして十月二十一日に降下訓練を再開した。不開傘の場合は、この応急傘を使用することにし、大事をとって降下高度を三百五十メートルに上げた。

ある日、また例の吹き流しが落ちてきた。地上の一同が固唾をのんだ。シュ、シュ、シュと二百メートルほど落下したとき、パッと応急落下傘みごとに開いた。拍手喝采である。この降下員は新参の三等水兵だった。

だが、いかに細心周密に努めても、危険作業である以上、不可抗力やケアレス・ミステイクに基づく事故は避け

られない。

十月二十八日だった。輸送機が、飛行場と館山の町の中間の海上を飛んでいるとき、突然、輸送機から黒い人間の塊りが飛び出した。一ツ、二ツ、三ツ……合計六名。そしてそれは海上も海上、とんでもないところで見事に開いてしまった。

「あっ、海の上だ。救助艇急げ！」  
一体これはどうしたわけだ。のんびりといい気持ちで秋の陽をあびて降下

傘降下に見とれていた救助艇員、こういふときにかぎってエンジンも始動していないし、あわててもいるので、なかなかかからない。

「応急落下傘をおとせ。装帯(落下傘バンド)をはずして海に飛び込め！」  
「落下傘に体が巻かれるぞ！」

声をかからして叫ぶが、とどくはずもない。降下員はそのまま海に着いてしまった。救助艇が到着したときはすでに遅く、最後の一つの落下傘は、もう

十メートル以上も沈みかけていた。爪竿を突っ込んだが、とどかない。クラゲのように海中深くかすかに落下傘の白いものが見えるだけ、それも間もなく見えなくなってしまった。

偵察員が誤って降下ブザーのボタンに手を触れ、ブザーが「ブー」と鳴った瞬間、先頭の降下員が降下の信号と



カン違いして、いきなり飛び出してしまった。続く五名も、機外の様子を見ていなかったらしく、搭乗員が制止しようとしている間に、つぎつぎに機体を蹴って、アッという間にこれに続いて飛び出してしまったとのことだった。このようにして、またまた恵三等水兵が殉職していった。

●海軍落下傘会会長阿部善吉兵曹長(当時)記「落下傘奇襲部隊」より

昭和十六年三月二十七日、一〇〇一号実験研究員は、茨城県鹿島海軍射爆訓練場に軍令部総長以下、高官立会いのもとに降下訓練が行われた。

研究員は高度三〇〇米から。指揮官の山辺中尉は単身一〇〇〇米の高々度から降下するテストであった。

降下予定の前日の天候は悪く、風雨が強く一時は実験が危ぶまれたが、夜半から天候回復、当日の朝は降下支障なしと判断され、予定通りの決行となった。

研究員は横須賀航空隊から三機の九六式陸攻に搭乗した二十六名が、目的地に向かう。途中の気流状況は良くなかったが、目的地に着くと降下が開始される。一航過十名宛の集団降下である。

この日、不測の事故が発生した。降下員中、最後に飛び出した地丸三水が

異常な形の白い傘体をなびかせながら大地に吸い込まれて行った。

山辺中尉は機上からこの光景を目撃した。地丸三水の傘がなかなか開かない。悪い予感に襲われながら「危ない地丸、開け開け」と祈りを込めて叫んだが無駄であった。

山辺中尉のその日のテスト課題は「主傘が不調の時に胸に付けた応急傘を手動で開かねばならないが、主傘が開いた直後の降下速度の中で応急傘が完全に開くものかどうか」の実験であった。高度一〇〇〇米に上昇した時、搭乗員が「降りますか」と聞くと「当然」と答えた。地上ではその時中止の指令が出されていて、その連絡がうまく行かず、実験降下は決行された。

気流の状況が悪く、揉みに揉まれ、片方の靴は脱げ、疲労の極で地上に達した。地丸殉職の報を、泣きながら駆けつけた隊員から受けた山辺中尉は、ただちに現場に急行すると遺体確認と共に、事故傘の原因説明に当たる。

主傘体は完全に曳き出されているが、補助傘が背と落下傘収納袋との僅かな間隙間に喰い込み、そのために、主傘が二つに折れ曲がり、風を孕まず事故となった。

地丸三水の遺体は三月二十九日、横

須賀航空隊に戻り、研究員、航空隊員の参列のもとに海軍葬がしめやかに行われた。

日本海軍は、故地丸三水の功績に対し二階級特進、金一封を贈った。

地丸一水の事故の後、開傘試験は極力、ダミーを用い、慎重ながらも果敢に開発が進められた。そして「一式落下傘」と名づける曳出開傘方式が開発された。

昭和十六年九月二十六日、二十七日の両日にわたる指導員の降下に続き、基礎訓練を終えた隊員たちの初降下が行われた。

飛行機に乗って上空から館山航空隊を見下すと、飛行場が狭いことと、三方が海に囲まれた地形であることが、落下傘訓練の場としては致命的であった。しかも房総のカラッ風と呼ばれる強風の日が多い。

そんなある日、事故が発生する。降下員を乗せて離陸した飛行機が、海上に突込み救助艇の到着前に沈没して一名の殉職者を出した。その数日後、今度は、飛行中に搭乗員が間違っ降下のブザーを押し、隊員二名が飛び出すと、そこは海の上であった。隊員二名が傘と吊索に巻きつかれて海中に殉職した。海上降下は難事であり危険である。海の深いところに降下する時は、

海面十数米の上空で装束の止め金を外し、脇の下でぶら下がり、十米くらいの上空で傘からはなれ、海に入らなければ危険。傘を上から被らないことが必要で、傘や索が身体に巻きついては万事休すである。

猛特訓の続行の中、またも予想もなかった事態が発生する。館山上空、整然と降下する落下傘を追い越して、傘体は完全に伸びているのに棒状となって急速落下、全身打撲による即死が発生した。翌日もまた同一事故が発生して殉職者の一名が出た。

相つぐ事故により降下訓練は一時中止。陸戦演習に切り替えられた。原因は当日の悪い上空気流とプロペラの過流との関連で傘体と吊索がねじれ現象を起こしたものと見られ、ほとんど不可抗力と結論された。



## 比島戦最後の航空特攻

陸士57期 原 祐一

「本稿は、『偕行』誌の平成18年12月号に掲載された(30頁以下)ものであるが、誤字等を訂正し、若干の補正を加えたものである。」

## 1 全般状況

昭和19年10月20日、米軍はレイテ島東岸に上陸、比島戦が開始されたが、現地部隊の敢闘並びに一部の増援も空しく、物量の差は如何ともなし難い状況に陥った。

12月13日、米軍の大船団が、ミンダナオ海を西進しつつあるのを発見するに至り、12月14日、第14方面軍は遂にレイテ決戦を断念し、現地軍に自活自戦、永久抗戦を令するに至った。

12月15日、敵軍はルソン島西南方のミンドロ島に上陸、レイテ方面への連絡・補給路が絶たれ、ネグロス島基地の陸軍航空部隊も器材を殆ど消耗し、空中勤務者はルソン島に引き揚げ、地上勤務者は現地軍に編入されて地上戦闘に巻き込まれることになった。

ルソン島所在の第4飛行師団は直ちにミンドロ島の敵を特攻攻撃し、レイテより引き揚げていた第30戦闘飛行集

団司令部が第12飛行団(1戦隊・11戦隊)・第16飛行団(51戦隊・52戦隊)の残存機を以てこれを援護した。

1月1日、軍命令により、従来第4飛行師団の指揮下にあった内地編成特攻隊の残存機約10余機が第30戦闘飛行集団の指揮下に移され、飛行集団原所属の第12飛行団・第21飛行団(71戦隊・72戦隊・73戦隊及び新たに指揮下に入った200戦隊)は実働機それぞれ約20機であり、更に隼部隊の31戦隊ルソン残置隊及び3式戦の19戦隊が編入された。

ここで集団長は1月5日、大局的に地に立って、戦闘隊全機を特攻隊とすることに決した。この際、目標は空母若しくは大型艦船、攻撃時期は払暁及び薄暮時とし、特攻攻撃の要領は、なし得る限り低空で接敵し、突入高度は1千米以下とする。

特攻に当たっては2機編隊を組み、特攻攻撃は編隊長機が実施、僚機はその掩護と戦果確認を行い、次回に長機として出撃することに決め、2機編隊2組を原則とした。

1月3日、ミンダナオ海に進入した敵大船団は、やがて北進を続け6日にはリンガエン湾内に進入、9日、上陸を開始し、第30戦闘飛行集団では、8日に31戦隊の3機が、10日には31戦隊

の3機が、10日に31戦隊の4機が、12日には1戦隊・11戦隊・72戦隊・19戦隊の計21機がリンガエン湾の敵艦船群に突入した(後に精華隊と称した)。

1月7日、航空軍司令部より、集団は最後の1機まで特攻を行った後エチアゲへ集結せよ。軍司令部は1月マニラ発、1月10日エチアゲへ到着の予定と電命を受けた。

集団は軍の状況を及び敵情を勘案し、12日朝までに整備完了の特攻機をもって特攻を終了することにして、先発隊は12日、本隊は13日からトラック輸送などをもってエチアゲへ集結することにした。

なお12日に、軍司令部から、集団は台湾に後退、戦力回復を図るよう命ぜられた。

以上は主に『第30戦闘飛行集団・比島作戦史』作戦主任参謀・原田潔著に拠った。

## 2 1月13日最後の特攻

## ① 1戦隊・清岡少尉の特攻

11戦隊の草間勝茂少尉(当時)57期はミンドロ島サンホセ攻撃の際被弾負傷して、バタンガスに不時着し、左足左腕を骨折してケソン病院に入院した後、1月9日頃ボーラックの部隊に帰還したが、操縦不能のまま1戦隊と共に

同のピストに待機していた。以下同氏の手記によった。

1戦隊長・橋本重治大尉53期は12月22日戦死し、11戦隊の飛行隊長・四至本広之丞大尉54期が1戦隊長代理となつたが、当時は不時着して不在であり、両戦隊共に戦力消耗していたので、両戦隊同一のピストに入っていた。

11戦隊長・溝口雄二少佐52期の言によると、特攻命令は文書ではなく電話による口頭命令で、○○戦隊より何機というようなことで、人選は戦隊長がその場で行っていたとのことである。

飛行第1戦隊の清岡靖弘少尉57期は1月13日朝、250kg×2の爆装で、イバ西方敵船団攻撃に出撃、突入した。この際、掩護機は、11戦隊の杉尾成美少尉57期で、この2機のみ出撃であった。

杉尾少尉は任務終了後生還したが、草間少尉はこの発進後、負傷者等の輸送指揮官として北部ルソンへ出発したので、杉尾少尉の帰還時に現地には不在。台湾で同少尉と邂逅した際に聞いた話では、直掩機は敵機に追い回された戦果確認は殆ど困難であったが、4隻の敵艦船の内1隻の艦尾に特攻機が命中したのを見たとのことであった。

注 平成8年10月11日付け田部昇氏(航士58期)から筆者宛の書簡に

よると「清岡さんからのお便りは、一月下旬か二月の初旬(昭和20年)高萩飛行場で落手したと思います。卒業後明野へも、そして北満へも、更にチャムスから奉天への移動、終戦で帰国、広島(故郷)東京との移動の間も大切に持っていましたが、昭和46年当所への移転の節、書籍、家財道具等々かなり処分いたしました時に、処分したものが、現在は手許にございません。その要旨は左の通りでございます。

「敵航空戦力との数の差激しく苦戦苦戦の連続で、とうとう私の戦隊も次々の戦死で小生のみとなりました。」

この最後の手紙を、タバコの火の明りで書いている。明日は一機だけでもリンガエンに突入する。若し万一、チャンスがあったら、高知のオヤチの所をたずねてみてくれ。」

大筋は右のようなことで、かなり悲壮な決意、状況だなあ、というのを紙面から痛感するものだった。(とうとう高知へお伺い申し上げることもできず、今日に至るわけです。)」とある。

1戦隊の整備将校であった浦忠

久少尉57期の言によると「清岡少尉は1月13日、小生と共に北部ルソンへ転進することになっていたが、今にして思えば、当時錯綜していた命令系統のため出撃となつたのであろう」と。

なお、昭和46年、集団参謀の原田潔氏33期のご尽力により、清岡靖弘少尉は、二階級特進、陸軍大尉 正七位 勲六等 功四級を授けられた。(特攻戦死者は勲五等 功三級)

② 200戦隊 西中尉・岩淵少尉・梶田伍長の特攻

200戦隊の根本巖少尉57期は、ネグロス島からルソン島に転進後、1月10日、31戦隊の特攻機を掩護の際、エンジンに被弾し海岸の飛行場に不時着修理の後マバラカットに帰投したが、夜間照明もなく、接地の際爆弾痕に脚を取られ、顔面打撲裂傷で一時人事不省となり、視力も落ち、13日夕、部隊と共にエチアゲに向けて夜行軍で出発した。

以下は、根本巖氏の手記及び200戦隊誌によつた。

12月31日、ネグロス島よりルソン島マバラカットに移動した200戦隊長の高橋武中佐38期は、1月1日付けをもって第21飛行団長・71戦隊長を兼ね72戦隊・73戦隊・31戦隊の残置隊を指

揮下に置いた。また、200戦隊残存の操縦将校は72戦隊に、下士官は73戦隊に仮所属となり、1月6日、米軍の大船団がリンガエン湾に進出するに及び、1月8日、21飛行団は全力を挙げ、ルソン島西方海面をリンガエンに向かう米機動部隊を攻撃したが、米艦載機の待ち伏せに遭い、戦果確認は出来ない状況であった。

1月11日、戦隊残存者は北部ルソン・カワン地区への撤退命令を受け、夕暮れに本部の大部分は出発して行った。

1月12日、居残つた整備員が残存4機(内1機は故障で出撃不能)を徹夜で整備し、翌13日夜明け前、飛行服に日本刀と拳銃を携行し、日の丸鉢巻きをした特攻の3名が戦隊長から二言三言簡単な命令を受け、復唱して飛行機に乗り、滑走出撃して行く時、生きて再び帰らぬ勇士を見送る一同は、感慨無量であった。やがて特攻機の機影がリンガエン湾の方向に消える時は、一同頭を下げて見送つた。今でも日の丸鉢巻きを締めて特攻に出撃して行った時の様子が目に浮かぶ、と当時立ち会つた整備員の堀井光次氏は語っている。

この後、高橋飛行団長と72戦隊長・津崎英介少佐51期は双発高練で北部ルソンへ出発して行ったが、途中で飛行方不明となつてしまった。

この3勇士は、西哲雄中尉少飛2期・岩淵三千雄少尉57期・梶田七之助伍長少飛12期であった。

現在発表の資料では、特攻戦死となっているのは梶田伍長のみであるが、3名共特攻戦死ではなからうか。

③ 1月13日特攻戦没者の考察  
従来発表されている特攻戦没者のリストでは、1月13日の該当者は、73戦隊の吉田修少尉特操1期と200戦隊の梶田七之助伍長の2名のみである。

また、「30戦闘飛行集団の特別攻撃隊名簿」(昭和20年2月)によれば、1月13日の該当者は、1戦隊の鹿兒島澄行少尉特操1期、11戦隊の三浦廣四郎少尉特操1期、73戦隊の吉田修少尉、200戦隊の梶田七之助伍長が特攻となつており、1戦隊の清岡靖弘少尉は直掩・未帰還となっている。

更に、第12飛行団長・川原八郎大佐34期記の「精華隊第1特別攻撃隊員追想録」(昭和20年2月)によれば、1月13日の該当者は、1戦隊の鹿兒島少尉が突入、清岡少尉がこれを直掩となつている。

しかし、「73戦隊誌」によると、吉田修少尉は、1月11日に精華隊特攻機としてリンガエン湾に突入したとなつており、鹿兒島少尉・三浦少尉は、1月12日突入が正しい。



以上を総合すると、1月13日に特攻として突入したのは、1戦隊の清岡靖と弘少尉、200戦隊の西哲雄中尉・岩淵三千雄少尉・梶田七之助伍長の4名が正しいと言えよう。

④ 1月13日の戦果

米国側の記録では、以下のとおりである。(公刊戦史「比島捷号陸軍航空作戦」)

時 艦船名 損害 死者 負傷

08 10 LST 700 中破 2 2

08 21 上陸作戦用輸送艦

08 56 護衛空母

サラモウア 中破 15 88

3 米国側の反応

航空戦史研究者・押尾一彦氏のもとへ、米国の神風特攻研究者Henry Sakaida氏から以下の問い合わせがあった(1995年6月)。

彼は、比島のリンガエン湾の特攻について研究していた際、1月13日、特攻機が突入した護衛空母サラモウアに乗っていた水兵を見付け出した。

その水兵は、死んだ日本軍パイロットの襟章を保管しており、彼の調査でそれは陸軍少尉のものと判明した。その水兵は、好意の意思表示として、その襟章を返したいといっているの、

本人の遺族を探し出せないだろうか、また本人の写真はないだろうか、と。更に、突入機が、疾風か、海軍の紫電かで混乱しているとのことであった。

しかしながら、海軍は1月9日にルソン島の航空戦から手を引いているので、紫電ということは考えられない。

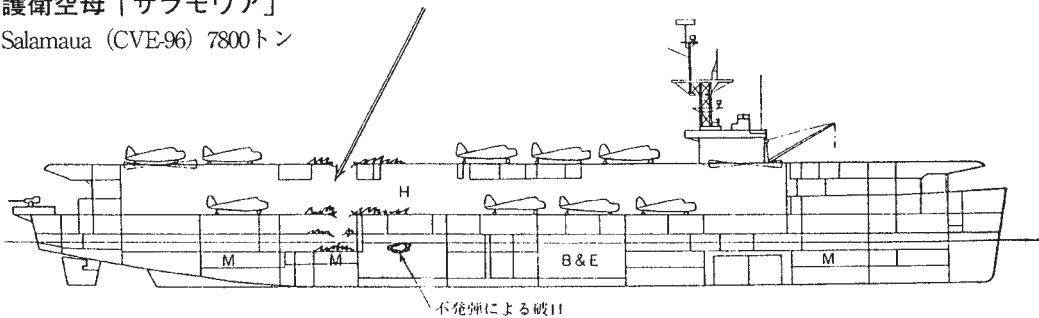
以上のことから、この襟章は、清岡少尉か岩淵少尉のものと考えられるが、今となつては、個人を判別することは困難である。

護衛空母「サラモウア」

1945年1月13日朝、ルソン島近海北緯17度9分、東経119度21分地点を航行中、特攻機1機が250キロ爆弾2個を抱いて現れ、飛行甲板に突入して、下部区画で爆発する。損傷は広範囲にわたり、飛行甲板、格納戸、各区画で火災発生、一部動力と操舵装置、通信装置が作動不能となる。爆弾の1個は不発に終わったが、右舷外板の水線部に穴を開け、後部機械室が浸水し、右舷の主機械は放棄される。艦は右舷側に大きく傾斜するが、復原力を保持して転覆を免れた。燃料移動と反対舷空所区画への注水による傾斜回復や火災消火等の応急対策を実施後、サンフランシスコに2月26日到着、直

ちに本格的修理を実施し、4月21日に工事を完了させた。

護衛空母「サラモウア」  
Salamaua (CVE-96) 7800トン



艦船に対する爆弾効力一覧表(抄)

軍事極秘

幕僚便覧(戦闘隊)昭和19.10.18 陸軍航空総監部

目標	爆弾弾種	命中部位	判定	効果その他摘要	撃沈所要弾数
航空母艦 (25000噸)	250kg	上面 舷側	小破 同上	甲板を破壊し離着艦困難となる 密接弾着では突破し良好なる場合は撃沈に至ることあり	7~10
甲 巡 (10000噸)	250kg	上面 舷側	小~中破 中~小破	司令塔に命中せば指揮航行困難ならしむ 密接弾着は舷側を突破す	5~6
大型駆逐艦 (3000噸)	250kg 100kg		中~大破 中~小破	1m以内至近弾にても舷側大破孔を生ぜしむ 密接弾着は突破、火災を生ぜしむ	2~3 3~4

## 地元住民によって建てられた 山添勇夫陸軍大尉の記念碑

理事長 菅原 道熙

本誌71号掲載の深山明敏氏寄稿「比島慰霊旅行の思い出」の中で、地元住民によって建てられた、山添勇夫陸軍

大尉の記念碑の存在が報告されている(42頁)。また、同号に掲載の宮地正美氏寄稿「神風特別攻撃隊初発進基地マバラカット慰霊旅行に参加して」の中でも、写真と共にイサオ・ヤマゾエ陸軍大尉の慰霊顕彰碑のことが紹介されている(46頁)。ただし、写真の説明文の山添功は、勇夫の誤りにつき訂正します)。

福知山聯隊史(靖國偕行文庫蔵)を調べたところ、歩兵第20聯隊(以下「歩20」と略称)の昭和13年8月末の編成表に、第2大隊第5中隊の小隊長の中に、山添勇夫少尉の名を見出した。因みに、歩20は、昭和12年9月6日に福知山を出発、漕沽に上陸、天津・無錫を経て南京攻略戦に参加、以後北支戡定作戦、徐州会戦、武漢攻略戦、襄東会戦と歴戦して、昭和14年8月20日凱旋している。

次いで、昭和16年11月23日未明、歩20は秘かに福知山を出発、大阪から船

出して12月24日、ルソン島南部東海岸に上陸、マニラ攻略戦に参加、その後バターン半島攻略に向かい、苦戦を重ねる間に、支那事変から凱旋して召集解除になって再召集された歴戦將校が、昭和17年3月にバターン半島作戦に従事中の歩20を追及合流した。

聯隊史は、この時の応召將校の筆頭に山添中尉の名を挙げている。更に秋になって、レイテ島転出に備えて先遣された中隊長要員でも、筆頭者として名を挙げられている。歩20で、山添中

尉がいかにも注目された人物であったかを物語っている。

昭和17年11月末に、歩20聯隊長吉岡頼勝大佐は、泉大隊を主力にレイテ島タクロバンに進出した。山添中尉は、ドラグ守備隊長を命じられた。その当時のレイテ島東海岸では、日本軍とゲリラの勢力が均衡、対峙状態にあった。昭和18年4月22日(碑文では18日)の夜、肝胆相照らす仲になっていた町長ホセ・カインの密偵が、ドラグ近郊に約30名のゲリラが侵出中との情報を齎したので、山添中尉は、部下50名を率

いて討伐に向かったところ、ゲリラは実勢約200名、完全な待ち伏せで、山添中尉は自ら軽機を猛射して応戦した

が、衆寡敵せず、壮烈な戦死を遂げた。聯隊史の筆致からは、面従腹背の町長の奸計に嵌められた可能性を思わせるものがある。

駐屯して数か月の間、山添中隊は軍紀厳正、中隊長は愛情をもって住民に接し、感謝、尊敬されるに至っていたのであろう。その死を悼んで住民が記念碑を建てた。

ブラウエンに向かう途中でこの碑を見付け、予定外に停車して慌ただしく参拝したが、何か心に残るものがあった。

帰国後暫くして、鈴木ガイドから数枚の写真が送られてきた。一枚は山添大尉の碑に嵌められている大尉の写真



山添勇夫(イサオ・ヤマゾエ)陸軍大尉の慰霊顕彰碑



山添大尉記念碑の碑文と写真

と碑文、もう一枚はその碑文のみを写したもので、更にもう一枚は、現在の碑文の前に作られていたと思われる碑文を写したものの、三枚である。

碑文は次のとおりである。

#### 「 記 念 碑

第2次大戦の傷跡が今なお残り住民の反日感情も根強いレイテ島ドラグ市を日本軍が占領中に公平で友好的な態度を貫き市民の信望を集めた

日本兵陸軍大尉山添勇夫並に勇士之遺徳を偲び地元市民の手で記念碑を建立された

1943年4月18日この地点で戦死されました

出身地 京都府与謝郡岩滝町石山

寄贈者 坂本喜計 河野アゼリア

とどこどころ翻訳調で、練れた文章とは思えない。最初に作られたものと思われる碑文の写真と比べると、例えば、「日本兵山添勇夫陸軍大尉並に勇士達の」とあったのが「日本兵陸軍大尉山添勇夫並に勇士之」となっていたり、寄贈者名の「坂本喜計」が「坂本喜計」となっており、寄贈者名も二列に刻まれていたのが一列になっている等の違いがあるが、伝えようとする内容に食い違いはない。

最初に何時どのような記念碑が、住民によって建てられたのかは全く分

らない。戦後先ず、この地を訪れたのは、戦友会や郷土関係者と思われるが、寄贈者は個人名である。少なくとも一度記念碑が作り替えられたことは間違いないが、それ以上に改修の手が加えられたのではないかと考えられる。終始二人の寄贈者によってなされたのか、表に出ないで戦友会等の協力があったのであろうか。

戦後この地を訪れたことのある、戦史研究者やジャーナリストはどのくらいいたのであろうか、この碑の存在が世に報じられたことはあったのであろうか。

今回予期せざる本碑の存在を知って、レイテ地上戦にも思いを馳せることになり、感慨一入なるものがあった。

バスが本碑前に差し掛かる少し前、ホリタの庁舎前を通過する時に、鈴木ガイドから、ここには銚田大佐の慰霊碑があると説明を受けたが、銚田慶次郎大佐は、昭和19年3月に満洲から赴任された最後の歩20の聯隊長で、同年10月23日に、ホリタの戦闘指揮所で、直撃弾を受けて壮烈なる戦死を遂げられている。

本報告を終わるに当たって、銚田聯隊長以下福知山歩兵第20聯隊の戦死将兵の御霊に対して、衷心から追悼の誠を捧げます。

### 遊就館特別展

#### 「英霊たちの言葉」

#### —書画に甦る若者決死の声—

当会会報「特攻」71号（7～9頁）

に掲載した元海軍少尉鈴木利男氏（海軍飛行整備予備学生出身）作・言葉の書画展が、新作を加え、遺書や遺品も添えて再構成され、表題の特別展として靖國神社遊就館1階企画展示室で開催されている（期間・9月21日～12月10日、拝観料・大人200円大学生100円高校生以下無料、常設展拝観者は無料）。

展示されている約50点の書は、いずれも靖國神社編「英霊の言乃葉」より選択し、その心情や情景を独特の書と絵に描き出したものであるが、作者の鎮魂・慰霊の深い思いが込められており、英霊の祖国愛や家族愛に満ち溢れた作品に仕上がっていて、強く胸に迫るものがあり思わず目頭が熱くなるのを覚える。

開催初日の会で、拓殖大学日本文化研究所の井尻千男所長は「若き英霊の遺された言葉の中に日本語の素晴らしさ、日本文化の奥深い美しさを感じ取ることができ、特攻兵士達の言葉は、万葉集がそうであるように、千年二千年後の日本人の魂を揺さぶることになるだろう」と述べられ、靖國神社の南

部利昭宮司も「この書画展が靖國神社で開催されることは、大変に意義深いものがある。多くの参詣者が英霊の言葉、日本人の真の心に触れることができるからである」と述べられた。鈴木氏御本人は「この書画展は、私個人の展覧会ではない、正しく英霊の言葉展であり、私の拙い筆を通して、その真情を吐露されているように思う。英霊は、自らの死を通して未来永劫の生を見通しておられるのではないか」と挨拶された。

（飯田正能記）





# 高野山「空」の墓前祭

田中 賢一

この墓の管理と毎年行われる祭典は全日本空挺同志会が担当しており、空挺同志会の構成員である旧軍空挺隊員は年々減少してゆくが、現職空挺隊員及びその除隊者は減少することはない。

墓の対象者は建墓当初は戦没空挺隊員であったが、その後自衛隊空挺の殉職者及び会員の死没者の分骨も遺族の申し出で納骨するようになった。このことも祭典が毎年盛大に行われることの要因になっている。

さて、今年の墓前祭は九月十六日に行われた。祭主は木家空挺同志会会長。この人は嘗て自衛隊空挺団長で、軍歴はない。会場の準備及び式典の運営一切は現職自衛隊員とその除隊者で、老兵どもの手出しする必要はない。

参列者は約三百人、老兵は散見する程度で大半は戦後の人達である。分骨・納骨は十三柱で、その中にはここ一年間の空挺団の殉職者二柱があった。一柱は落下傘降下の事故で、もう一柱は演習中装甲車の横転事故によるものだった。

この墓は、挺身第三聯隊比島生き残りの中村軍医中尉が主導して建てた。

ので、宮崎県の川南村にある川南護国神社から御魂を分祀した。

墓は高野山境内の一之橋を入った所の一等地にある。建墓に当たり我々も浄財を献じたが、それは微々たるもので、大半は中村の義父(婿入先の父)が支弁したものである。初めは大阪に本拠をおく挺身戦友会が管理しており、毎年墓前祭をやっていたが、昭和三十八年建墓第一の功労者中村軍医が死没したので、世話人一同衆議一決し、中

村の分骨を納骨した。そもそもこれが分骨を納める発端となり、今日に及んでいる。その後、墓地の管理と祭典を習志野に本部を置く空挺同志会に移した。戦後の死没者を合祀することは、

戦没者の慰霊顕彰施設としては純粹さに欠ける気もするが、それによって行事の永続に役立っているし、伝統の継承にも裨益している。

今回、私は老兵を代表して戦死英靈に対する一文を奏上したが、伝統精神の涵養に役立つことを期した。



主碑の「空」は弘法大師の親蹟として名高い、灌頂記の中にある文字を拡大して彫ったものである。空挺の空であり、己を空しうして国に殉じた空挺将兵のこよなく愛した空である。



# 「陸軍挺進部隊外史」の自衛隊空挺隊員の読後感③

田中 賢一 編

前号に続いて、私のもとに寄せられた読後感を掲載してもらったことにした。

紙面割り付けの都合上、このような版組みにせざるを得ないが、我々の後継者の意のあるところを汲んで読んでいただきたい。

田中 賢一

## 第三普通科大隊

大隊長・二等陸佐 廣幡 賢一

今回、田中先生編「陸軍挺進部隊外史」を熟読する機会をもち、一般戦史、空挺参考資料等における空挺作戦及びその経過の概要を認識していたとはいえず、当時の現場における生の声を聞く機会を得たことは、今後の大隊長としての統率において、また、今後の幕僚勤務において参考になる事項が多々あった。改めて、短期間ではあったが陸軍挺進部隊の成立、運用とその成果を今後に生かすよう隊務に取り組みたいと思う。以下若干の所見を述べる。

### 一 統率について

空挺部隊は非常に大事にされた部隊であったが、部隊自体への理解が不足していたため、実際に適時適切に運用されることが少なかった。当初のパレンバン作戦は、奇襲、地上部隊との連携と、本来の運用に沿った作戦が実施されたが、その後は特攻的な運用がなされた。航空作戦、機材の挺進等の制約事項が大きき、次第に本来の部隊運用に基づく作戦が実施できなくなったことは残念である。指揮官としては、訓練十分であるが、作戦が度々延期され隊員の士気を維持するのは難しかったのではないかと史料される。また、本資料以外にレイテ作戦において一部士気が低下した

部隊が見られたが、イラクでの警備任務を見ると、やや苦手とする長期間の忍耐強い作戦は十分実施できると考えられる。資料に見られるとおり、空挺部隊の統率は、長期間の準備と適時に長候に恵まれないと作戦は実施できず、非常に長い期間待機する。そのため、訓練練度の維持と作戦までの士気の維持は特に留意する必要がある。IQの例、今回の警備中隊の人選にも、選ばれた者、残留を命じられた者への配慮をより適切に実施し、しっかりとフォロアアップを実施する必要がある。また、指揮官が率先降下していることは、他の陸軍部隊では見られず、現空挺部隊においても、伝統は受け継がれていることを再確認した。

### 二 挺進部隊について

#### 1 訓練

大きく触れられていないが、破壊活動の記載が多く、効率的な施設等破壊要領が本来必要であり、今後練成すべき事項であると理解した。

#### 2 運用

ア 上級部隊の部隊並び運用の理解不足  
空挺部隊は創設から日が浅く、特に上級司令部参謀の部隊運用上の理解不足が目立つ。部隊側も運用を上級部隊に説明することなく、単に、提案に対して白黒を付けるだけでは、活躍の場を与えられないこともまた事実である。毎年YSで空挺団の運用を強要し、方面隊以上の要員に対し空挺部隊の運用を理解させ、また、宣伝することが重要であると思料する。

イ 統合運用の困難性  
ビルマ戦線では、上空まで到達して引き返す等、統合運用が作戦の成否を握るのは現在でも同じ。単に天候だけでなく、作戦の時期を含めて、適時に発進できるように部隊全般の態勢の調整を実施することの必要性が理解できた。

ウ 研究開発等  
短機関銃の装備、戦車部隊等作戦を経るごとに装備を改善していた臨機応変の才には頭が下がっている。すべて必要性から出ており、我々も教訓を如何に素早く訓練に取り入れるかが課題である。諸制約事項の克服も、戦時であり、やや緩やかであったことは、羨ましい限りである。

### 三 死生観

軍人には、死を特に強く意識させる必要がある。これが、他の職業との明確な違いである。これからはなお一層「死」に対する意識が必要である。これは避けて通れない。義烈が空挺隊員の死生観は、当時の異常な状況下の一つの考え方ではあるが、その心意気、国に対する思いは、今の我々も同じものでなければならぬ。隊員の精神教育の究極の目的は、死生観の確立であり、隊員にはより分かってやすく教える必要がある。それにしても、やはり旧軍空挺隊員は、しっかりと死生観を持っていくことが理解できた。

四 今後隊務への教訓等  
大隊長としては、これからの各種任務において、空挺部隊の伝統を如何に継承していくか、あらゆる機会をもってしっかりと部隊・

隊員に徹底していきたい。

### 3 その他

#### ア 兵 站

兵站について余り触れられていないのは、作戦運用が極めて短期間に限定されていたも思料するが、後半期には、実施したくてもできない環境にあった。現在においても補給品の追送等の訓練の実施の必要性が理解できた。

#### イ 人 事

部隊が改編される度に目まぐるしく人事が変更されているが、各指揮官とも隊員をよく掌握し、作戦に臨む士気の高さを感じることができた。やはり、落下傘部隊に所属している絆であろうと思料する。

#### ウ 研究開発等

短機関銃の装備、戦車部隊等作戦を経るごとに装備を改善していた臨機応変の才には頭が下がっている。すべて必要性から出ており、我々も教訓を如何に素早く訓練に取り入れるかが課題である。諸制約事項の克服も、戦時であり、やや緩やかであったことは、羨ましい限りである。

### 第三普通科大隊本部 第二係主任・一等陸尉 窪田 裕亮

#### 一 前 言

1 所見に当たり目的から題意を分析する  
・ 「団内幹部に対し、「陸軍挺進部隊外史」を購読させ、空挺戦史に関する識能を向上させるとともに、空挺幹部としての意識の高揚を図る。」とある。

・ 「団内幹部に対し」：対象者は多岐に指定されているため、自らの今の職務・地位・役割に応じた考察が必要である。  
・ 「購読させ」：内容を把握するだけでなく、内容を理解する必要があるため、大東亜戦争全般の时期的背景等をも明確に理解する必要がある。

・ 「：識能を向上させるとともに」：意識の高揚を図る。：特に空挺戦史に関する知識・戦術教養の取得による識能の向上、及び幹部（指揮官・幕僚）としての心得や統率論に帰結する精神的涵養という二つの面から所見を作成する必要がある。

2 本外史は、大東亜戦争間に実施された代表的な空挺作戦に關し、その目的、紆余曲折を伴った経験、作戦間における人間模様、作戦実施における推移とその兵士たちの様相が、我々の先輩方の私見と回顧を中心に記載されている。

各種作戦は、実施時期により、その戦況や作戦目的が大きく異なっており、一概には言えないが、大隊幕僚又は小部隊の指揮官として勤務する自分の立場から一番印象に残ったことは、

ア 空挺作戦が如何に浮動状況下で必要とされ、計画どおりいかないものか、計画及び行動に柔軟性の必要であるかということ。  
イ 空挺幹部として、部下の前では剛胆・明朗・率先陣頭、人間性として死生観・挺身



意識の確立による心の在り方、の2点である。

本外史を購読することにより、昨今の「実戦を意識する時代」に向かう我々の意識改革を促す非常に良い機会になったと思う。爾後は代表的先例を自分なりに区分し、その特性に応じた所見を考察するとともに、戦時中における精神の要素から学ぶ意識の在り方を考察したいと思う。

### 二 日本の攻勢期に実施された空挺作戦に思うこと

日本軍の南方進出に代表される、昭和17年(18年初頭)における日本の攻勢期に代表される空挺作戦に、パレンバン空挺作戦がある。攻勢期という特性からも、日本が主導的にカードを切ることができた唯一の作戦であったと思う。また、当時はまだ戦略的に妥当な作戦の発動、必要な戦力の指向、陸海の共同、兵站支援等が可能な時期であった。

このような時期に発動された作戦においてさえ、十分な戦果を得るため熟考を必要とし、発動に長期を要したことから、空挺作戦の実施に多大な苦労と、成功のため必要要因が多いことが窺えた。

このような状況においても、「油田施設の無傷確保」という求め得る最大の成果を獲得し、爾後の南方進出の基盤を築いたことから、空挺作戦が如何に有益な選択肢であるかを、史実から理解することができると思う。また、当時の日本軍の実力と、広大な作戦地域での戦況の看破を可能にした当時の大本営の戦略思考は、自分の想像の範疇を超える偉大なものだと感じた。

しかしながら、爾後日本は、自らの過大評価・極端な攻勢思考に傾き、加えて連合軍の過小評価により、戦争指導の方向性を見誤り、南洋諸島において攻勢の終末を迎えるとともに、一気に勢力が瓦解し、敗戦に向かったこと、それに伴い、各種空挺作戦が無謀で悲惨な挺身作戦になってしまったことを、本外史

から十分に認識しなければならぬと感じた。

### 三 防勢期に戦況打開を目的とした空挺作戦に思うこと

レイテ空挺作戦は、昭和19年末、台湾沖航空戦の戦果誤り、捷号作戦発動における決戦地域変更(ルソン島からレイテ島)で発動された受動的な作戦であり、沖繩本島における義号作戦は、義烈空挺隊に見られるように、言うまでもなく、わずかな戦況打開を見出すための特攻作戦である。戦争指導の変換による絶対国防圏の設定にもかかわらず、連合軍の反抗を食い止める術が無く、決戦作戦にも失敗し、遂には特攻思想に傾いた悲惨な戦争経験の中で、その代表例とも言える挺進部隊(空挺部隊)から学ぶべきものは何であるかを、我々は深く認識すべきであると思う。

これらの戦例から、空挺作戦の特性として学ぶべきことは、空挺作戦は決して受動的に発動しても期待できる戦果は得られないという点と、大規模な作戦に連携することなく、単独の作戦としてはその意義を成立させることが困難であること、絶対的な協同による制空権確保や後方支援といった基盤が不可欠であることであろうと考える。これらは既に教範事項からも明らかな事項であるの言うまでもなく、如何に戦史を学ぶことが有意義なことかが直接的に分かると思う。空挺作戦の実相を知り、戦術能力の向上、訓練への反映を意識することが我々に必要であることを痛感した。

しかしながら、このような悲惨な史実であるにもかかわらず、この外史の中に悲惨さを感じさせる回廊や人間模様がとても印象的である。特に、作戦に臨む直前に感じる覚悟・胆の据わり様は尋常でないことがとても印象的であり、自分なりに考えるに、特に空挺部隊という特殊な環境・任務にいた者は、特殊な精神状態にあった、又はあらねばならなかったからではなからうか。特にそのような精神状態にあった将校・下士官を回顧したが故、あ

る意味で境地に行き着いた姿であり、悲惨さを感じさせないのであるからうか。精神的な部分の所見は次項にするが、こういった部下に対する将校の姿勢は、我々空挺幹部が学ぶべき最も大切な部分ではないだろうかと思える。

### 四 挺進部隊外史から学ぶ必要のある空挺幹部としての意識とは

空挺作戦は、その史実からも分かるとおり、一般部隊に比して作戦環境が厳しく、また、高い自己・小部隊能力が必要であり、不測状況下に陥る可能性が大きい特性があり、このような特性においては、指揮する者は極めて高い能力が求められる。

高い能力とは、崇高な精神により裏付けされた日々の努力や、人間を直接的に率いる統率なるものに帰結すると考えられる。特にこの空挺団に連発から来た時、幹部としての自分の在り方を今一度よく考えさせられた自分の経験からも、伝統的に空挺部隊の幹部は、崇高な精神が不可欠であるのではなからうか。外史の後半にある死生観に関する記述や書文の遺作から読み取れるものは、その精神を成立させる要素としてとらえられるであろう。それは将校としての責任であり、軍人としての闘志であり、祖国を思う愛国心であり、故郷の美しさや家族といったものまで多岐にわたる。これらの要素を見て感じることは、昨今世間一般でよく目にする「武士道」という言葉や「先の大戦・昭和初期をテーマにした映画・書物」に見られる一般的な昔の日本人への回帰といったものに極めて近いことである。

ではなぜ、今このようなテーマが注目され、また、世間に受け入れられるのか?それは、今の日本の在り方や日本人として有るべき姿に何か欠落している風潮を何かしら感じ取り、それを危惧するからこそではないか。このことから、いつの時代においても持ち続け、普遍でなければならぬ日本人として

の在り方と、これから更に多様な役割に対応していかなければならない自衛隊・空挺部隊の幹部としての心・精神は、究極的には同じなのではないかと考える。

今回の外史の勉強によって、自分は空挺幹部として、日本人として有るべき姿を追求しつつ、自らの精神を確立し、その姿により部下を感化できるような幹部像を目指し、日々精進していかなければならないと感じた。

### 第三普通科大隊本部・運用訓練幹部 一等陸尉 藤井 良二

#### 一 全般

「陸軍挺進部隊外史」を読んで、今までの歴史書、また戦史書類にない我々空挺隊員の歴史的内容が散見され、非常に興味を持って読むことができた。

特に、大東亜戦争における空挺作戦及び空挺部隊の運用というもの、また、空挺部隊を實際に戦場へ差し向けるという行為が印象的であった人達の統率の姿勢及び葛藤が印象的であった。先の大東亜戦争において、空挺作戦が計画され、幾度か実行されていたのだということを確認することができた。

ここに特に印象に残った「パレンバン空挺作戦」「レイテ空挺作戦」に見る忘れられない人々「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」について所見を述べる。

#### 二 パレンバン空挺作戦

この作戦を実施した第1挺進団に部員としておられた筆者の解説で「この作戦の目的と目標がパレンバン精油所奪取に使われるのだと理解した。」そして、南方軍から受領した命令では「攻撃目標は飛行場、精油所については為し得れば破壊に先立ち奪取せよとつけられてあった。」とあったが、第1挺進団を失う恐れと南方軍が挺進団長に任をさせる、という逃げの考えが窺える一説であった。しかし、挺進団長・久米精一大佐の決断及び先陣を切った戦況指揮により、パレンバン市



の精油工場を占拠するという戦果を為し得たと思う。

三 レイテ空挺作戦に見る忘れられない人々

部下から慕われ、また、部下と共に戦闘に先んじた、挺進第3聯隊長・白井恒春中佐、戦闘ではなくて、亡くしてしまつた部下達の位牌を持って戦場へ赴く、タクロバン特攻隊長・榊原達哉大尉、自らレイテに乗り込み、挺進部隊の運用について意見具申すると言つた、第2挺進団司令部部員・稲本宏少佐、どの人々も戦争に翻弄され、また、それぞれの思いによって挺進部隊のために戦争を継続した様子が見て取れる内容であつた。我々も先の人々のように、それぞれの思いを持ちながら空挺部隊としての在り方、また、戦争になつた時の様子などを先人に学びながら考える必要があると感じた。

四 義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観

昭和19年10月レイテ決戦の時に、「特攻という世界戦史上類のない部隊が登場した」のくだりから始まり、特攻隊員の状況心情が手近に取れるような内容であつた。

特に、隊員達の詩・書など死を目前にした者達の悲痛さ、また、任務を成し遂げようとする意志の強さが感じられた。特に、今村曹長の「奥山に名もなき花と咲けれども散りて此の世に香りとどめん」という句が印象的であつた。

五 結語

最後に、文節に「星移り歳変わり、死生観などということが、全く無縁のような時代になつたが、まだ歴史というには余りも近い、我々と本当に同時代に生きて来た人が、今日と掛り離れた歴史上の人物になつてしまつていること、今更ながら愕然とするところがある。」とあつたが、我々自衛官、特に空挺隊員は、死生観をもっと身近なものにしなければならぬと思つた。文節にもあつたように、歴史上の人物と言うには、まだまだ時が流れていないという気持ちの方が湧いてきた。

第三普通科大隊本部

中隊長・一等陸尉 渡邊 真介

一 前言

「陸軍挺進部隊外史」(以下「外史」と略称)を読み、大きく二つの点で印象を受けた。一つは空挺幹部の識能について、もう一つは死生観についてである。いずれも一朝一夕に身に付くものではなく、不断の修養によってしか得られないものである。以下、この2点に焦点を当てて所見を記する。

二 空挺幹部の識能について

1 部隊の能力・特性を知悉していること  
パレンバン空挺作戦において、挺進第2聯隊が赫々たる戦果を挙げ得たのは、久米大佐及びその幕僚が、任務及び部隊の能力を的確に掌握、作戦に対して絶対の自信を持っていたことに起因すると考える。

現代においても、任務の的確な理解(状況の特質の把握、任務分析)、部隊の能力、空挺作戦の特性を理解することは、空挺幹部にとつて必須であると考ええる。

2 戦略眼を備えること

ラシオ空挺作戦は中止となつたが、その計画段階で特筆されるのは、木下中佐の戦略眼である。南方軍参謀の運用案に対する的確な指摘は痛快でさえある。

空挺幹部、特に各級の幕僚は、一般部隊より2段階は高いレベルに立つて発想する必要を感じた。

3 発想の柔軟性・創意工夫

鹵獲兵器を速やかに入手、装備化したり、世界に類を見ない戦車の空輸等、当時には、挺進団としても、陸軍としてもまだ発想の柔軟性があつたのではないかと感じた。

時代背景や環境は異なるが、常に発想の柔軟性を持ち、平素の隊務においても創意を尽くすことが重要であると考える。

三 死生観について

「外史」においても、死生観については相当地の頁にわたって記述されている。これは将校

としての責任感と、下士官・兵の職に殉ずる姿勢、すなわち「中隊の任務として当然」に大別される。

空挺幹部としては、責任感・使命感に抱く死生観を涵養するのは当然のことであるが、それのみならず、平素の訓練や隊務を通じて、部下隊員の資質を死生観に昇華していく必要性を感じた。

四 結語

「外史」を配布されてから、時間のある度を目を通していたが、今回「空挺作戦」に関する識能の向上」及び「意識の高揚」という観点で改めて読むことで、新たな視点で空挺部隊、空挺作戦について考えることができた。空挺幹部として、今後更に高い意識を持つて勤務し、部隊の精強化に貢献する所存である。

第三普通科大隊本部中隊

通信小隊長・二等陸尉 南園 博之

「陸軍挺進部隊外史」を読んで、パレンバン空挺作戦、レイテ空挺作戦、沖繩空挺作戦について感じた所見を列挙します。

一 部隊練度

パレンバン空挺作戦において、当初第1聯隊を戦実施部隊としていたが、輸送艦撃沈のため、第2聯隊を戦実施部隊とすることに変更となつた。この時の第2聯隊の練度については、部隊としての訓練を実施していない、編成完了したての部隊であつた。しかしながら、第2聯隊は任務を遂行し、少ない被害のみで作戦を成功に導いた。なぜ部隊訓練を実施していない第2聯隊ができたのかというところを考えると、一つには、参加した兵士は皆、落下傘兵になる前は、各原隊において実戦を経験している点、また、必成目標は飛行場の攻撃であり、望成目標として精油所の奪取だった点がある。

まず初めの点であるが、各個としての戦闘レベルが高いと、必然的に、部隊訓練が十分

でなくても作戦を遂行することができると思う。また、過去において実戦を経験している兵が多数いたため、挺進部隊としては初陣であつたが、各兵士は、精神的に余裕があつたのではないかと推測できる。また、小隊長が降下後すぐに戦死しても、引き続き戦闘行動ができたのは、日頃から次級者が誰なのかを徹底していたためと思う。

各攻撃目標の点であるが、日本において精油所の研修に参加した人員は、第2聯隊の隊員であり、文中にも書いてあつたが、精油所を攻撃するものと各隊員は考えていた。そのため、攻撃目標に精油所が入つても動転することなく、整齊と作戦を立案できたと思う。

二 死生観

義烈空挺部隊が特攻部隊に指定されたから、出撃するまでの6か月もの間、各将兵が、如何にして気持ちのモチベーションを維持できたのかについて考えてみた。当初の計画ではサイパン、爾後は硫黄島、最後は沖繩と、各将兵は最後の戦場を(死に場所)を探していたと思う。その間の作戦の変更や、中傷等があつたにもかかわらず、なぜ訓練に励むことができたのか、それは義烈空挺部隊が、この戦況の要となる作戦に投入されることを認識していたのではないかとと思う。また、6か月という期間により、硫黄島の栗林中将のように死生観を確立することができたのではないかとと思う。

もう一つの考えは、我々空挺隊員はよく考へなくて行動すると言われるが、それと同じで、深く考へなくて「どうせ死ぬのだから」という考えもあつたのではないかとと思う。しかしながら、義烈空挺作戦出陣式で、宮越准尉の笑顔の写真をみると、もし自分があの立場になつたとして、あの笑顔を出すことができるだろうかと思つた。

また、幹部として奥山、諏訪部両隊長のよ

死を伴う作戦に参加する時に、一致団結して戦闘をすることはできないのではないかと思

第三普通科大隊本部中隊 対戦車小隊長・二等陸尉 藤澤 隆

一 全般

今回「陸軍挺進部隊外史」を読み、陸軍挺進部隊の始末記、各空挺作戦の概説、空挺戦史に見る特攻精神、死生観等、現空挺隊員として参考となるものが多く、勉強になった。陸軍、自衛隊の違いはあるが、空挺隊員として当然知っておくべき事項であり、そして、様々な作戦があつて今の我々があるのだという

二 それぞれの空挺作戦について

大東亜戦争の4年間で、降下直前に引き返した作戦も含め、毎年空挺作戦が存在した。パレンバンから沖繩空挺作戦までの統率の在り方、それぞれの作戦の概要とその中で

三 特攻精神について

空挺作戦は当然のことながら、そのすべてが厳しい任務となる。どんなに厳しい任務であらうとも、それに自ら進んで立ち向かう

ではないかと感じた。 四 死生観について

義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観において、最後に「民族の永遠に続く生命が区々たる個人の死生観を確立させた」とあるが、死

生観については、最後はすべてそこに行き着くのではないかと感じた。自分の死がいか

第三普通科大隊

第七中隊長・三等陸佐 赤羽 敏夫

一 前言

今回、大東亜戦争時における陸軍挺進部隊の史実に触れて感じたことは、我々の先人たる空挺隊員の生き様、特に、日本を思う

ただ、愛する日本のため、その思いだけで

喜び勇んで航空機に乗り込む写真の姿を見る

と、今の自分が持っている死生観では到底先

人達には追い付けない、そんな気持ちになる

ほど、先人達空挺隊員の強さと凄さに自己を

戒め、より一層の精進が必要であることを痛

感して。今後における自己の自衛隊勤務の手

本として行きたい。

二 一途な清い心

慎重に空挺作戦を進めて行くうちに、戦況の悪化と共にその空挺作戦に変化が生じたに

う存分暴れて死ぬことにより、必ず後に続く者がいて、その者達が日本を勝利に導いてく

三 空挺の強さ

1 宇都宮における天覧演習は、まず爆撃により目標地域を制圧し、これに膚接してま

2 タクロバン攻撃隊長の榊原大尉が殉職

した8名の位牌を抱いて戦地に赴いたとある

が、自分の計画した訓練の事故による責任を

感じ、慰霊碑まで建立しただけでなく、「一

緒に行きたかったらもう、一緒に連れて行って

感に男としての強さを感じた。

四 義烈空挺隊の教え

再三にわたる計画の取り止めに對しても、当初の選ばれた要員から誰一人として欠けるこ

となく、半年間も待機して戦地に赴いた義烈

空挺隊勇士の精神力には感銘を受ける。

作者は、最後に到達した心境を「後に続く

者を信じ、後に続く者を奮起させることに、

自分の死の価値を見出したのであろう。」と

記しているが、やはり半年間、心の糸が切れ

ず、「死ぬ」と命ぜられてからその気持ちの強

持続するのには、隊員一人一人がそれぞれの強

い拠り所があつてのことであり、降下しても

直ちに使える武器と言えは拳銃と手榴弾しか

ない状況で敵陣に突っ込む自分の姿もイメー

ジしたと思うと、家族や彼女のことも頭を過

た中で、誰一人として怖気づき弱気な発言

をすることもなく、同じ境遇の同僚と共に訓

練に打ち込み、その時を待った先人達は正し

く軍人の鑑である。

また、指揮官の観点から、奥山隊長を例に

取り「中隊長と共に往くことが隊員の心の拠

り所にしてはいる。」とあり、或いは義烈空挺

隊の場合、「当時の日本人に共通した国家観、

それに加えて、軍人として鍛え抜かれた責任

感が根底にあり、その上に中隊長に對する信

頼感が乗り、自然のうちに死に對決する姿勢

が自分の中ではなからうか。」と記述してい

る。自分の力量を考えれば、到底奥山隊長の

足下にも及ばないが、軍人である以上、目指

すところをそこに置いて日々精進しなければ

ならないと感じた。

五 抛り所

抛り所を「家族をして同じ志を持つ仲間

存在と男としての役目」と思っている自分

は、長期間耐え得る精神力が備わっているの

か分からぬが、いざ事が起されれば危険を承

知で笑いながら任務に赴く自分の姿を、こ

のような事を考える度にイメー

六 航空機部隊の保有及び他職種との一体化

陸軍挺進部隊には、挺進団内に挺進飛行団

を保有し、航空機部隊と一体となつて訓練及

び作戦を遂行している。挺進戦車隊では、歩

兵はその都度軍隊区分で組んだ歩兵では駄目、

同じ部隊内に歩兵を持ち、真に一体となつて

戦えるものでなければならぬということか

ら、挺進集団を編成する際、挺進戦車隊に歩

兵中隊を編成している。正しくそのとおりで

あると思う。航空機部隊及び他職種(戦車・

FV等)との一体化は我が空挺においても必

要であり、編成化は別としても他職種との訓

練は、機会を多く設けて実施することが重要

であると感じた。

七 部隊の在り方

未だに終わった滑空機による特攻作戦(烈

作戦)において、その要員選出に「熱烈希望」

「熱望」「希望」の三つに分けて志願者を募

たことが記述されており、日本陸軍と言えど

も「死に往く戦法」には、牽制を保持した部

隊別ではなく、志願制を採っていたこと、烈



作戦についての記述中盤に「あのとき特攻作戦が行われていたら一生精神的負担を免れなかった。」との記述に、日本陸軍の人的な面を垣間見ることができ、部隊内では隊員を思い遣る気持ちかなり高かったことに、部隊の在り方の一端を感じることができた。

八 結 語

本外史を読む前まで自分が空挺隊員でありながら、陸軍空挺作戦について、作戦の一部しか知らなかったことは、空挺隊員の端くれとして先人達に誠に申し訳なく恥ずかしい限りであった。

本外史に接し、陸軍空挺部隊の歴史とその作戦の概要を知ることができたことにより、やっと空挺隊員になれた気持ちがある。

また、川南護国神社建立の生い立ち等の話から、我々現役空挺隊員が参列する意義・役割について、以前にも増してその重要性と必要性を認識することができた。

第三普通科大隊第七中隊

副中隊長・一等陸尉 中谷 真一

一 全 般

大東亜戦争を挺進団員として経験された田中賢一氏の文章には、当時のことが今、目の前で起こっているが如き迫力があり、強く引き付けられるとともに、空挺団所属幹部としての必要な知識を得ることができ、非常に有意義であった。

私のような初学者が、戦史を読む意義は大きく3点あると考える。1点目は、戦史の詳細を掌握し、戦争を知らない私達が戦争の実相を知り、これを想像させることよって、平時における状況判断の資とすること。本外史においては、挺進団の行動(いつどのように行動したか)が詳細に記されており、挺進団の戦闘の実相が掌握でき、爾後の状況判断の資としたい。

2点目は、実際の戦争においてどう戦略・戦術が適応されているかを知り、戦略・戦術

等を学習する際の自らの小さい(中隊レベル)思考を広げ、大きく物事を捉えること。

本外史には挺進団の行動の詳細、戦時における空挺作戦の詳細(大東亜戦争当時どのようにして空挺作戦が立案され実施されたか、指揮系統、命令、準備、作戦行動)等、及び挺進団を通じて大東亜戦争の概要を見ることができ、当時の戦略、挺進団の運用の企図及び背景から戦争の様相がどのようになるかを大きな視点(団レベル)で捉えることができ、今後の戦術を学習する際、及び空挺作戦計画立案の際の資としたい。

3点目は、各級指揮官等の統率から自ら執るべき戦場における統率を考察すること。特に本外史では、戦況が及ぼす運用の推移、また、そこから考察できる、旧陸軍の統率の姿勢等(どこまでが正常で、どこからが異常か)及び登場される方々の死生観、精神的主柱にあるもの(何が特攻作戦を可能にしたか)がよく理解でき、自らの空挺隊員としての戦場統率を考察する上で、非常に良い資料となった。

しかし、このような知識は、空挺団所属幹部として当然知っておかなくてはならない知識である。今更ながらに知ったのは、非常に不勉強であり、爾後、このような戦史に関する勉強をすることにより、思考の幅を広げなければならぬと強く感じるものであった。空挺戦史の詳細を知ることができたこと、及び戦史の重要性を再認識させる良い機会であった。

二 特に印象に残った事項

1 木下中佐の思考から考察する大東亜戦争時における空挺作戦の立案

作戦目的と目標及びその空挺作戦の特性を最大限生かすことの重要性、及び挺進団の頭脳と呼ばれた人の思考過程

2 大東亜戦争当時の挺進団の運用に見る旧陸軍の統率姿勢

当初バレンバン及びラシオにおいては、挺

進団を如何に有効に運用するかという戦術・戦法があったが、レイテ作戦以降においては、精神論に大きく依存しており、戦術・戦法のかけらもなく、こうなるとう戦争は負けるのだなと強く感じた。立案時における論理性の重要性を再認識した。

3 登場される方々に見る戦場統率及び当時の死生観

死地に赴く際の心の拠り所が、中隊長や小隊長であったと答えた方や、中隊がもたらした任務がそうであったからなどと答えた方がいたように、単独で操縦桿を握り死地に赴く特攻隊員との大きな違いがあり、部隊が拠り所であったこと、部隊(仲間意識)が特攻作戦を可能にするともに、その重要性を確認した。

三 要望事項等

このような機会を設けていただくことで、挺進団の戦闘の実相を知ることができ、非常に有意義でした。

第三普通科大隊第七中隊

小銃小隊長・二等陸尉 小宮山 茂樹

一 全 般

「日々完全燃焼」、これが私の人生のテーマである。日々情熱を燃やし、悔いのない人生を送りたい。仕事でも遊びでも、命懸けでないと何も生まれぬと思うし、手を抜くとか、中途半端には物事に取り組みたくないと思う。

しかし、こんな私もまだまだ自分に甘い人間でもある。全く中身の無い無駄な時間を過ごしてしまうことも多いのが現実である。

今回この特攻隊員の方々の文献に触れ、正直私は落胆した。私自身が明らかに小さい人間に思ってしまったからである。根本的な人間力というものが彼らと私とは、雲泥の差があると痛いほど認識させられた。

特攻隊員の方々は、本当の意味で人生を完全燃焼させ、立派に散華されている。命の炎

を燃やし、責任を果たされている。ある人は言った。「人間が生きているか、死んでいるかを区別するのは、魂であり、精神である」。

連日のように起こる凶悪犯罪や家庭内での殺人事件、国に敬意を払わない人々、家族や他人、そして国を思う気持ちが薄れている現代で、本当に生き続けているのは、特攻隊員の方々なのではないだろうか。

私は、この方々の存在に少しで近付きたいと思う。そのためには、現代社会の中で、自分の置かれている立場を深く考え、それに伴う責任を果たすために、日々無駄にせず、自分を精進させていくことが一番の近道ではないかと思う。

二 特に印象に残った事項

私は、出撃直前の方々の、温かく優しい笑顔や真剣な凛々しい表情の数々が印象に残った。決して、彼らがこれから死に行く任務に旅立つ者とは思えない者ばかりである。

よく「心は行動・表情に表れる」と言われる。人の表情や感情は決してごまかせない。どんなに笑顔を作っても、また、真剣な表情をしていても、心に偽りがある時は、ごまかせないものである。

しかし、ここに掲載されている彼らの表情をとらえた写真の全てが、決して裏のない笑顔や凛々しい表情のものばかりである。

この中には、特攻隊に指定されてから突入までの間に「死の任務」を与えられて、皆一人一人苦しんだに違いない。その間の精神的重圧はただならぬものがあつたはずである。実際に特攻隊の出撃を見送った人々は如何に彼らが立派で、「まるで神様のように見える」と語るそうだ。

私はこの数々の写真を拝見させてもらい、彼らの達観した心境から現れる余りにも美しい表情に、刹那さと、そして驚愕の念を覚える。

三 これからの職務遂行上心掛けるべき事項



大東亜戦争は、作戦指導・戦闘指導の面からすれば、アメリカに軍配が上がるのである。また、特攻を代表とする人の生命に重きを置かない日本軍の作戦・戦闘指導を批判的に考える人も数多くいる。

しかし、何が正しかったかの判断は、私は軽々しくしてできないと思う。その時代、その時点で環境や国民的世論によって作戦行動は大きく影響を受けるものであろう。

私は特攻隊員の方々の、限りある人生を完全燃焼させた、勇氣ある自己犠牲を体現した生き様に、日本人として誇りと感動を覚える。

後に続く者を奮起させることに、自分の死の価値を見出した彼らのためにも、私は彼らの後輩であることを深く自覚し、誇りを持って、これからの職務に励んでいこうと思う。

### 第三普通科大隊

#### 第七中隊長・三等陸佐 島村 進

#### 指揮官としての死生観と信頼

「(イラク) 派遣前に死生観の教育をどのように実施したのか?」「陸軍挺進部隊外史」を読み進めつつ、元団長に対するイラク派遣成果報告の場において、衣笠元団長よりご下問のあったこの一言が思い出された。

死生観・・・「義烈空挺隊は特攻隊に指定されてから突入までに半歳もかかった」という。即ち死ぬと命ぜられ(自ら決めて?)から、それを成し遂げるまでに6か月、我々のイラク派遣準備に費やした月日とほぼ同じである。彼らら一体どのような思いで日々を過ごしたのだろうか。どうやって自分の死が如何なる価値を持つかということを見出したのであろうか。

奥山隊長は「責任感」や「KD」、「訓練を実施する」ことに、渡部大尉は「敵愾心」に、ある小隊長は「小隊長であること」、また「中隊(長) が行くものだから・・・」等々。それぞれに心の拠り所を持って、自らの死生観

を確立したように思える。

イラク派遣という「実任務」前における訓練は徹底して実施した。やるべき訓練、やれる訓練はほぼ全て実施し、満足できる成果(練度と自信)を得ることができたと自負している。

反面、任務を遂行する上での精神的要素、すなわち、現在よりもより死生観は、イラク派遣間においても、自らの死生観は、確立することはできなかった。

そもそも「死生観を確立する」という言葉の使い方が正しいかどうかにも自信がない。死生観とは確立できるものなのだろうか、という疑問が、未だに拭い切れないでいる。

しかし、奥山隊長を始め、この書に登場する指揮官、兵士は皆、死生観が確立されているように思う。確かに、時代が違うこともあるだろう。任務が違うことも十分に承知している。

#### 「信頼される兵士たれ」

これは、中隊長として上番以来、隊員に求め続けたことである。更に言うならば、自分に対する戒めの言葉である。

「何時如何なる時、戦場において例え自らが死に直面した時にでも、隊員から信頼される中隊長でありたい、決して隊員を見捨てない。」

果たして、死生観はおろか、自らが「死生観は確立できるものか」などと考える指揮官を誰が信頼するだろうか。仮に隊員が中隊長は信頼できる指揮官であると考えてくれたとしても、それは「平時」のことだからであり、自らの生命や身体が危険に曝される戦場における「信頼」、自らが隊員に求めた真の意味における「信頼」ではないだろうと思う。

「信頼される兵士たれ」、言うは易しである。隊員に求める以前に、まずは自らが「自分の死が如何なる価値を持つか」ということ

を見出し、隊員の信頼に堪え得る「兵士」となることが必要ではなかったかと考える。

レーダー、ミサイル等の技術が発達した現代戦、まして降下適地に制限を受ける日本国内において、いわゆる落下傘による「空挺作戦」が行われることはまず有り得ないであろうと思う。しかし、時代が変わっても、我々が持つべき心の拠り所は、この書に記されている人々の姿と心ではないだろうか。それが即ち我々空挺隊員の目標、有るべき姿ではなからうか。

近い将来の「実任務」においては、間違はなく誰かが死傷する任務となるであろう。それまでに自らの死生観を見出さなければ、その任に就くことは難しいであろうと考える。

最後に、終戦60年、今も田中先生がこうして空挺部隊のことを綿々と語り継いでいたことに感謝するとともに、心から敬意を表したいと思う。氏の見返りを求めないこのような執筆活動そのものが、日本に対する愛国心であり、我々後輩に対する愛情、平和の祈りであると考える。

### 第三普通科大隊第八中隊

#### 小銃小隊長・二等陸尉 奥村 勇樹

#### 「日本人としての使命」

「我々は日本人としてこの土地で生まれ育った。この国の歴史や伝統、文化等を引き継ぎ、後世へと継承することは、我々の使命であり、そのために学ばねばならない。」

上述の文が、本冊子に対する私の読後の実感であり、また、筆者田中氏の期待するところではないだろうか。特に、「未だに終わらな特攻作戦、海軍の剣作戦」に登場する山岡特別陸戦隊司令著書の引用のうち、玉音放送に関連する二点の回想文については、そのことを彷彿とさせる。

第一剣部隊に関しての記述によると、第二次世界大戦末期、特攻隊として意を決した第一剣部隊の隊員達が作戦準備をしていた中、

予定していた作戦が延期になったため、結果として8月15日の玉音放送を聴くことになった。この際敗戦という経験のない現実を経験し、中には「先祖の西郷どんに会わず顔が無い」という理由で、一時集団自決の空気も生まれたという。

この当時の隊員達の身体の中には、間違なく明治維新以来の日本国建国の系譜が脈々と流れている。歴史の継承者として第二次大戦を戦い、そして敗戦を味わい、自分達の代でそれを絶つという重責の念に駆られる彼らに対して、私は羨望の眼差しすら向けてしまった。なぜなら、現在のところ、私の脳裏において歴史は過去のもの、大戦は過去のものという固定観念があり、現在の社会とは全く別物と切り離して分断されており、また、歴史に対して好奇心やロマンといった類の感情は働くものの、誇りを持つまでには至らず、それ故、残念なこと、それに対して私は彼らほど背負っていないからである。

しかしながら、我々は時代の歯車の一部として世の中に存在していることは厳然たる事実であり、そうであるならば、錆びた歯車のように動きを止めることなく、その勢いを次に伝えることが我々の使命となる。日本という国家に生まれた我々にとって、勢いを次に伝えることは、日本の歴史や伝統等をよく学び、その継承の一翼を担うことにほかならない。私は、その行動に対して責任を持ち続ける必要があることを、この記述により感じたのである。

また、第二剣部隊に関する記述では、玉音放送を聴き、その後正式に停戦が命ぜられ、騒然とした第二剣部隊の中において、血気に逸る将校の間に議論された案のうち、北海道と本州は遮断され、北海道が別の国になってしまった場合、彼らは北海道に残り、広大な天地で民族自決のため一働きしようという考えが生じていたという。また、終戦の勅語を拝し、全ての忠誠心が行き場を失い、茫然自

失となっていた際に、阿南陸相の遺書にあった「神州の不滅を信じ」という文言等により、彼らは神州不滅のためにこそ、国家再建に挺進しなければいけない、という決意が湧いたという。

これらの記述の中から、前者は、当時の軍人達が先の大戦において、日本民族の自決を懸けて戦い、破れてもなお、胸に抱いて貰っていく覚悟を持っていた、その思いとしての、また、後者は、義烈空挺隊奥山大尉の弟に対する遺言にある「・・・大東亜戦争を解決するものは、若さの力にあり。若人は須く光明正大、快活無邪気たるべし・・・」の文言に代表されるように、後に続く者に期待し、奮起させることに価値を見出して、戦没して仲間に対する弔いの矛先としての「民族の継承」を垣間見ることが出来る。先人達のこの強い意思があったからこそ、我が国は戦後の荒野から復興し、現在の我が国の平和と繁栄があるはずである。また、日本国憲法前文にもあるような、恒久的の平和を念願し、我らの安全と生存を保持するためには、この意思を次世代以降に繋いでいく必要があると私は確信する。ただし、その継承は民族主義的思考からではなく、平和の維持に努める国際社会における一国家としての必要性に基づいたものであることは忘れてはならない。

このように、我々日本人としての使命は、「歴史・伝統・文化等を留めることなく次世代に継承すること」であり、このために我々は日々これらを絶やすことなく学び続ける必要がある。このような観点からすれば、今回の読後所見作成の機会も、私にとって大変意義のあるものだとと言える。

第三普通科大隊第八中隊

小銃小隊長・准尉 吉田 明次

この冊子を読むに当たり、先生が平成14年7月25日発行の「戦友連」402号に掲載されている論文集を読ませて頂きました。

そのテーマは、「我が祖国この儘でよいのかー沖繩の戦跡を巡拝して思うー」でした。その冒頭で、先生は「毎朝、新聞を広げれば贈賄の記事が載っていないことはない。正に政界は黄金に塗られ、金色夜叉は永田町界隈を右往左往している。議会制民主主義というが、党利党略、私利私欲に右顧左眈、天下国家の重大事は一向に進捗しない。かくして外からの侮りを受けている。」「何故このような体たらくになったのか。国の要路に立つ者悉く戦後の誤った教育を受け、その多くが洗脳されてしまったからである。国民の多くもこれと同断、己あって国家あるを知らず、権利あって義務を辨えず、現世代あって先祖あるを覚らず、価値観の転倒驚くべきものがある。」「これを矯正する方策は多々あると思う。大は憲法改正から東京裁判史観の払拭もあるが、戦友達の一人として身近なことで為し得るのは、国に殉じた戦友と、我々が嘗て抱いてきた精神を世に確かに伝えることである」と。そこに、私としては、先生の使命を肌で感じる事ができました。そして、先生は最後に「日本人の心を失った日本国籍を持つ人々よ、此等の場所を巡礼し、汝等が血の中にある日本人の心を取り戻せ」と、メッセージされています。

「陸軍挺進部隊外史」を読み進んで行くにつれ、無知な自分に気付かされました。特に「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」は、今の自分を重ねてみたとき、そして、これからの自分はどうかあるべきかを考えるとき、大変参考になりました。昭和19年6月、サイパンが敵手に落ち、B-29の本土空襲が必至となったとき、大本営は、これを封殺するため、サイパン島アスリート飛行場に強行着陸、殴り込みの特攻作戦を計画、当時宮崎県唐瀬原基地に待機していた第1挺進団に属する挺進第1聯隊の1個中隊（奥山隊）と、サイパン爆撃を目指して錬成中であつた第3独立飛行隊（諏訪部隊）に、

白羽の矢が立った。それは19年11月27日のことであつた。本土南方2400キロの洋上に浮かぶ島に、夜間強行着陸し、飛行場に並ぶ200機のB-29を破壊し、なお命の続く限り暴れまわるといふ計画であつた。

必死の訓練を積み、いよいよ決行というときになって、硫黄島中継ができなくなって中止となった。暫くたって2月19日、敵が硫黄島に上陸し、その飛行場が敵手に落ちると、進出してきた敵飛行機を破壊するため、義烈空挺隊を使うという計画が台頭した。3月17日、硫黄島玉砕とともにこの計画も取り止めとなった。次いで4月1日、沖繩に敵が上陸し、戦火はいよいよ身近に迫るに及び、「特攻隊」という看板は以前負い続けたままであつた。そして、5月24日夕刻、熊本県健軍飛行場を発進して、読谷飛行場に強行着陸し、阿修羅の如き活躍をして全員玉砕した。

ここで、私が考えたことは、「死生観」であります。当時の記録を見ると、特攻隊は長いものでも2箇月ぐらゐで消滅している。当時の雰囲気としては、勇奮死に赴くは易く、多くの特攻隊員は勢いに乗って突入して往つたのである。

ところが、この隊は、半年の間再三目標が変わり、しかも、その都度決行の日取りが延期されている。浜松では1週間も毎日毎日出撃準備をしているし、最後に健軍を立つときも、搭乗直前に新たな気象情報が入り、1日延期している。その間の精神的重圧は只ならぬものがあつたに違いない。

隊長の奥山大尉にしても、副隊長格の渡部大尉にしても、心の抛り所は、これまで培ってきた人生の中で見出しているし、後に続く我々に期待することで死を乗り越えられたと思います。

田中先生の特攻隊の死生観については、大変分かり易く勉強になりました。最後に私の思うところの「死生観」について、田中先生は、こう考えられていたのでは

ないでしょうか。吉田松陰が高杉晋作に与えた死生観は「死は好むものでもなく、また、憎むべきものでもない。世の中には、生きながら心の死んでいる者がいるかと思えば、その身は滅んでも魂の存する者もいる。死して不朽の見込みあるは、いつ死んでもよいし、生きて大業をなす見込みあらば、いつまでも生きて大業のである」と。つまり、小生の見るところでは、人間というものは、生死を度外視して、何かを成し遂げる心構えこそ大切なのだ。

多くの特攻隊員は、戦争は負けるだろうということを現地で感じている。それでも敵陣に突っ込んでいく。何のためか。そのことによって、日本というものはこうだったんだよ、ということが後世に確認される。それは戦争に負けようとも、やがて引き継がれていくだろう。つまり、彼らは自分の家族のためだけでなく、見たこともない我々、残された子孫のために、つまり「見ない愛」のために死んでいったのです。今も我々は、彼らの愛の中に生きているのでしょうか。

今後我々には、どういう任務が与えられるか分かりません。「陸軍挺進部隊外史」を読み、体感したことで、現役の空挺隊員として、あなた方が辿ってこられた運命を無駄にすることなく、次の者達に引き継ぐことを一灯照隅の気概をもって実践することを決意します。どうもありがとうございます。

第三普通科大隊

第九中隊長・三陸佐 曲田 雄一郎

著者田中隊長一氏目の通じた「陸軍挺進部隊外史」を讀んで、通常の書籍では決して語られることのない、著者ならではの視点を通じての真実の外史であり、著書の各記述は、空挺団所属中隊長として大変参考になった。特に、我々自衛官は、一朝有事の際、戦地に赴かなければならない。その際に重要となる



のが、死生観の確立であると思う。死生観とは、如何にあるべきで、どのように確立、堅持すべきなのか、この本は先人の足跡を顧みさせてくれて、参考とすることができた。

義烈空挺隊の作戦準備から沖繩特攻に至るまでの間において、特筆すべきものが2点ある。一つは、戦局の変化により、作戦目標が再三変更され、しかもその度に決行の日取りが延期され、延べ半年もそのような状態が続いたということである。このような状況において、士気を維持することはもとより、死生観を維持するのは、並大抵の心境ではなかったのではないかと推察する。一度死を覚悟し準備をして作戦を待つ。しかもそれが延期になり、毎日出撃準備をして、更に最後は作戦自体が中止になる。その心境はいかばかりか、我々の平時における空挺錬成降下でさえ、降下前には緊張し、降下中止になると、一挙に緊張感が抜けて、基礎的事項が疎かになり、注意力散漫になる等の状況が生起する。半年間も準備を続け、その都度中止とすれば、心にも迷いも生じたのではないか。親兄弟、妻子のことが思い出されたのではないか。その迷い、一切を振り切り、ひたすら任務に没頭して、訓練に集中した精神的強さを我々は真似なければならぬ。一度決まったことを間髪を入れず、すぐやる方が余程楽である。この義烈空挺隊員の精神的な強さを我々現役空挺隊員は、参考にしなければならぬ。二つ目は、奥山隊の136名の特攻隊に指定された者に、作戦決行まで1名の脱落者も出なかったことである。このことは、義烈空挺隊の各隊員の崇高なる使命感はもとより、奥山隊長の統率によるものが大きかったのではないかと思う。部下をもってして、目標に向かわせ、しかも過酷な訓練を強いて、遂には生きて帰れない作戦に参加し、戦地に連れていかなければならない、その心労はいかばかりであったろう。彼は、「自分は独身だが、どうして所帯持ちの部下まで連れていかん

ばならないのか？」と深刻に考え込んだ時期があったそうである。統率する上において、部下に骨肉の愛情を注ぐのは当たり前である。しかし、その部下を死地に赴かせるその苦悩は並大抵のことではなかったであろう。よく集団においては、長期間一緒に団体行動をする、必ずと言っていいほど派閥がでたり、我が出て好き嫌いが出るものもある。しかし、そのような我欲を超え、部下をもって一つの目標に向かわせるのは、指揮官の統率が重要になってくると思う。どのような統率であったかは、具体的には記述されていないが、やはりそこには、愛国心から出る我欲を排した純粹な使命感ではなかったろうか。

作戦から、20年に実施された沖繩空挺作戦までの間で、統率の姿勢が大きく変化することにより、とてもではないが、同じ空挺作戦を実施しているとは思えないほど作戦に対する考え方が変わっている。この間における上級部隊の心境に、戦況が大きく影響していることは話の内容から分かるが、やはり戦況が不利になればなるほど、その影響力も大きくなくなり、冷静な思考・判断、そして、それらに基づく行動をするというのは困難を極めるものなのであると思う。よく、実戦を意識して訓練を実施するよう指導されるが、これは非常に重要なことであると再認識した。その意味では、先般のイラク復興支援に参加した方々は、ある種の実戦を経験しており、実戦を意識することの重要性を身に沁みて感じ、今後の糧になったのではないかと思う。

### 第三普通科大隊第九中隊 小銃小隊長・二等陸尉 中村 哲朗

『陸軍挺進部隊外史』を読んで、空挺団の幹部としての重責を強く感じた。特に、空挺作戦の重要性、難易度及び危険性の高さについて再認識させられた。これらに基づき、本所見においては、「統率」及び「死生観」の2点に的を絞って私の感じたこと、考えを述べていきたいと思う。

まず、統率についてであるが、これに関しては、陸・海・空の如何に関わらず、また、空挺作戦のみならず、全ての作戦において、非常に重要なものであることは周知のとおりである。しかしながら、空挺作戦においては、他の作戦に比して危険度が高く、また、難易度が高いという特性上、特に重要視しなければならない事項の一つである。その方針によって、作戦内容も大きく変化してしまう。旧陸軍も、昭和17年に実施されたパレンバン空挺

らを含め、空挺団の幹部として、今後作戦に関する知識と理解を深めていくことの必要性を強く感じるとともに、作戦を遂行することになるが、自ら指揮官を選ぶことのできない隊員一人一人のために、幹部としての自覚を持ち、識能の向上に努めたいと思う。

ここまででは、統率に関してこの考え、感じたことを述べてきたが、ここからは、死生観について述べていきたいと思う。我々軍人にとって、死生観は切っても切り離せないものであると同時に、究極のテーマであると思う。なぜなら、我々は死を経験したことがないからである。死生観については、自衛官であれば誰もが一度は精神教育等を受け、各人で考えたことはあると思う。私もそのうちの一人であり、自分なりに考えて行き着いた結論としては、「自衛官である以上は、その特性上命を落とすのは仕方がない。ただ、無駄に命を落とすのは嫌だから、そうならないように努力しよう。」という程度である。一応、死の覚悟はできている積りである。しかしながら、本当に死を意識するような場面に直面したことがなく、そのような場面に直面した場合に、自分は本当に死を受け入れられるのであろうか、という疑問が常に頭を過る。

作戦を立案しなければならぬし、そのための準備を周到に実施する必要がある。当然のことと言え、当然のことであるが、私がここで言いたいのは、空挺作戦は危険性が高く、その上失敗した時の撤収が困難であるため、DZ地域及び敵情見積もり、地上部隊との提携要領、その他各種の不測事態対処等を細部にわたるまで万全を期する必要があるということである。空挺作戦は、一度実行に移すと、その特性上後へは退けず、諸処の準備・見積もりが周到でないと、レイテ空挺作戦時に、ブラウエン地区に降下した部隊のように、最終的に二十数名しか残らない、という事態を招くことになるのである。そして、その際に犠牲になるのは多くの隊員なのである。これ

本所見において、死生観について述べることにしたわけであるが、空挺作戦は危険性が高く、死生観の確立は、作戦遂行に当たり、非常に重要であると感じ、また、それを確立からである、非常に困難であると感じている。『陸軍挺進部隊外史』の中に、健康から沖繩に向かい出撃する際の、奥山、諏訪部両隊長に関する次のような一節に深い感銘を受けた。「それ(二人)を取り囲む数人の隊員の晴れやかな笑顔、(中略)その軽快な足取りなど、とても死地に赴く人の姿とは思えない」という一節である。この時の心境は、一体どのようなものだったのであろうか。また、どのよ



うにすれば、そのような境地に辿り着けるのであろうか。死生観の理想的な形であるように思う。

我々幹部自衛官も、隊員の命を預かることになる。小隊長に上番して、酒の席ではあるが、小隊の隊員に「俺の命小隊長に預けるわ」と言われ、正直嬉しかったが、非常に重い言葉であった。言葉で言うのは簡単であるが、隊員の命を預かるということは、本当に責任重大である。私は、隊員のために自分が犠牲になることは、一向に構わないと思っ

て、戦場に行ってもその気持ちは変わらないのか、と考えると不安になってしまふ。自分の中では、大丈夫だと思っ

ていても、実戦経験がなく、いわゆる戦場心理を体感したことがないので、「絶対」という確信がもてない

ができた。やはり空挺部隊の歴史、先人達の死生観等の精神的要素は学ばなければならぬものであり、また、これらを部下隊員、後輩等を通じて、後世に脈々と受け継いで行かなければならないことを強く感じた。

二 特に印象に残った事項

義烈空挺隊の死生観に関する記述を読んで、改めて深く死生観というものについて考えさせられた。義烈空挺隊員が如何なる死生観を堅持して任務に邁進したのかは、死生観というものを見詰め直す上で非常に参考になった。自分の死に価値観を見出した死生観、自分自身の死を美しいものとする死生観を確立・堅持し得たが故に、過酷な訓練にも耐え、凜として死地に赴けたのであろう。こうした達観した境地が出撃直前の奥山隊長・諏訪部飛行隊長の機上での笑顔の写真に見て取れた。

終戦後の学校教育では、命とは何物にも替え難い尊いものであると教えられてきた。しかし、その尊い命を国家・国民あるいは家族・愛する者を守るために捧げることの崇高さは、余り教育されてこなかった。教育されたとしても、決して軍人というものは、引き合いに出されなかった。むしろ軍人とか特攻隊員は命を軽んじるという悪いことの代表例にされていた。(これは、私の学校教育での記憶・経験ではあるが)しかし、公のために命を捧げるといふ考え・行為は美しいものである。私も死地に赴くときは、達観した境地で、凛とした笑顔で赴きたいものである。

自分自身はもとより、部下隊員に如何にしたら、どのような死生観を確立すべきか、とさせるべきかということは、我々幹部自衛官として、一空挺隊員としての終生を通じた命題であろう。

神風特攻隊のような単独で操縦桿を握り、敵艦船に体当たりする特攻隊員と違い、義烈空挺隊は組織で敵中に強行着陸して任務を遂行した。「外史」にも記述されている通り、義烈空挺隊員の死生観は、個々の隊員の価値

観・資質の上に、指揮官に対する信頼感が乗り、相乗効果により醸成されて行ったのであろう。これらから、部下隊員の死生観を確立させる上で、指揮官の果たす役割が大きいということをも改めて認識させられた。部下隊員をして、この指揮官に付いて行けば任務を達成できる、この指揮官のためなら死ねると思わしめるように、自分の資質・識能を向上させるべく継続的に修練を積み重ねるはず、また、日頃から部下隊員には愛情を持って接するとともに、教育訓練を通じて部下隊員の任務遂行への自信・気概を養って行きたい。

三 最後に

今回「外史」を読むことにより、様々なことを学び得、いろいろと考えさせられた。こうしたことを自己の修練・隊務に活かして行くと共に、引き続き空挺同志会、高野山・川南慰霊祭を通じて、日本陸軍の挺進(空挺)部隊との絆を大切にして行きたいと思う。

第三普通科大隊迫撃砲中隊

射撃幹部・二等陸尉 大濱 竜也

一 はじめに

「何故自分は空挺団を希望したのか。」改めて考えさせられた気がする。「精鋭無比」を掲げ、列国の軍隊にも決して劣ることのない輝かしい伝統と精神の継承に、未熟ながらも私は感化されていた。また、日本騎兵の父と言われた秋山好古が、私の出身高校の校長を歴任されていたことも、少なからず影響したのかも知れない。(現在の愛媛県立松山北高校の前身である北予中時代)いざれにせよ、陸軍挺進部隊の戦士と精神に、尊敬の念を持たずにはいられない。そして同時に、幹部候補を卒業して以来、空挺勤務を続ける私自身の現状を見直す最良の機会である。

今回、所見を述べるに当たり、「統率の姿勢」及び「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」に焦点を当てるとともに、現在の自分の立場と指揮官の立場という大きく二つの観点

から考察することにする。

二 「統率の姿勢」

当たり前のことではあるが、空挺作戦は、常に危険(死)と隣り合わせである。そして、戦況・気象等の様々な要因により、その確率は高くなる。戦うからには、勝利を得るためには、多かれ少なかれ犠牲を払うのは当然という考えが、軍人である以上必要なかもしれない。しかしながら、作戦発動を前にも、航空機並びに部隊の多大な損耗が予想される中、空挺作戦実施を決断する指揮官の立場において、同様の心境に至ることができ

るだろうか。到底、今の私には想像することさえできないのだが。文中には、陸軍に関する昭和17年から20年までの4年間における空挺作戦について、統率の態度という点で観察されていた。空挺作戦を世界に先駆けて実施したドイツ軍は、優勢な航空兵力もあり、大胆な空挺運用ができたのだが、日本は対照的だったとされる。

結果、計画の段階で空挺作戦の発動を中止した作戦(気象等の影響を含む)、一転、特攻作戦となったもの、両極端な結果となったが、どちらかを評価するということはできない。それは、「努めて隊員(部下)を死なせない」という、また、「深く最後を飾らせた」という、それぞれの統率の表れだからである。任務のために、身を投げ打つ覚悟のある部下をして、空挺作戦実施の決断を下すということの複雑さを改めて感じる。真の統率とは何か。一つの任務(目標)に向かって、指揮官の企図のもと、強い団結力と、如何なる状況においても揺らぐことのない精神力を備えた部隊の育成を、私なりに常に追求し続けてきた。

三 「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」

1 心の抛り所

(一) 奥山大尉の場合

ア 隊長としての責任感に加え、幼年学校出身の真正正銘の将校であると

いう強烈な意識

イ 「俺は幼年学校出身で、そのため存在している人間だから当然のことだが、何で所持持の部下まで連れて死なねばならぬのか」

(二) 渡部大尉の場合

ア 「長期にわたる持ち続けられる敵愾心  
イ 「サイパンの土になっても米鬼を咬み殺してくれる」

2 達観の境地

出撃前、搭乗機に向かう彼らは、とても死地に赴く人とは思えない笑顔と軽快な足取りであった。そして、そこには悲壮感はない。彼らこそ、その境地に達した男達なのだろう。死生観は、人により様々である。ただ、自分の死を美しいものであると感じられるということは、軍人である以上、この上ない喜びなのかもしれない。

私には、一層の努力と精進、そして、数々の経験が必要である。

四 おわりに

空挺部隊の存在意義すら疑問視される現代において、二等陸尉の立場からの考えを最後に述べたい。航空技術等の著しい発達から、戦闘の様相は大きく変化し、空挺部隊の運用も多様化している。当然我々は、現代の様相に応じた戦い方をしなければならぬ。しかしながら、陸軍挺進部隊から受け継がれている伝統と精神は不滅である。そして、我々も微力ながらも後世にそれを受け継がなければならぬ。私は、幹候校卒業以来の、言わば、生え抜きと言われる空挺幹部である。現在の自分の地位を謙虚に受け止め、今私ができることは何かを冷静に分析し、かつ、大胆に実行する必要がある。不立会における活動もその一つかもしれない。

今後、自分なりの統率と死生観を再度確立し直すとともに、広い視野と柔軟な発想を身に付け、空挺青年将校らしさを忘れず、日々の訓練・業務に臨んでいきたい。

特科大隊長・二等陸佐 山中 哲実

一 はじめに

一 本誌については、昨年も配布頂いて読ませて頂いた。また、このほかにも現職に上番以来、部屋の書棚に並ぶ書籍中、「空挺隊員園田直」、「空挺部隊写真集の記事」については、折に触れ拝読させてもらっている。理由は二つある。一つは、挺進団の将校、得に指揮官職にあった方の立ち居振る舞いから死生観までを少しでも学ぶことは、現職務を全うするために必要と考えたからである。

もう一つは、自衛隊において唯一、「挺」の字を部隊名に頂く空挺団に長く勤務した一人として、このことをどう捉え、そして何を後輩に継承して行くべきかを考えたいと思っただからである。承知の通り、空挺の「挺」の一字は挺進の「挺」であり、その意は「多くものの中から抜きんで進むこと」である。今日、空挺イコール落下傘と単純に思われているように感じるのがしばしばで、これであるのか？と不安になることがある。

二 挺進部隊の将校に思うこと

まず第一に思うことは、やはり将校(空挺の幹部)は「率先陣頭」であるべき、ということである。これは空挺団においてもよく言われていたことである。私は部内出身で、昭和61年3月に三等陸尉に任官したが、この頃、団内の先輩幹部(現空教長もその一人)からよく言われました。

パレンバン、ラシオにおける久米団長を始め、レイテにおける白井少佐、奥山隊の奥山大尉などから、学ぶところは少なくない。

第二に思うことは、研鑽・修養・修練を欠かしてはいけない、ということである。史実に登場する将校達は、それぞれ部下からよく信頼されていたと思う。義写作戦の項、特攻隊員の死生観についての記述によれば、単なる信頼などというものではないとも思えるが、不断の研鑽・修養・修練なくして、部下をして自然に「ついて行く」という境地に感化さ

せることはできないと確信する。

第3は、前項の研鑽・修養・修練とも関係があるが、いかにして自らの死生観を確立したか、更には達観の境地というまでに、如何にして到達したか、ということに感銘を受ける。

戦争中という時代背景や、それまでに受けた教育、環境など全てが現在と大きく異なる(変わってしまった?)当時と比べるとは無理があるかもしれないが、「有事にあって死を覚悟して国のために任務を遂行する」という役割に違いはない。

天皇陛下に対する忠誠心や、靖國を最後の拠り所とした彼らと違う我々は、彼らと同じ境地まで自らの死生観を確立することができらるだろうか？個人的にどうかと問われれば、「行く」と言うが、正直自信は無い。

義烈空挺隊の出撃前の写真、「笑顔で握手する奥山、諏訪両隊長」、「搭乗位置への前進」、「出撃直前の笑顔・宮越准尉」などは、これまで何度も見せて頂いたが、改めて筆者である田中顧問の説明を得ながら見直して強烈な感銘を受けた。

三 終わりに

最近、「国家の品格」という本を読んで影響を受け、新渡戸稲造の「武士道」を読んだ。挺進団の将校達は、武士道の支柱である「義」、「勇」、「仁」、「礼」、「誠」、「名誉」、「忠義」を個々の精神の基盤として持っていたと確信する。

今、正に我々に必要なもの、「何を学ぶべきか、如何にして己を磨くか」、時代が変わって、国家の指導者の考え方も大きく変わった。今でも、日本人として、そして自衛官として、武士道に学ぶべきことがあると考える。

幹部自衛官となつて20年が経過した今、子供の頃から父親に、そして若い頃から上司・先輩にうるさく言われたことの意味がようやく分かりかけてきた気がする。浅学かつ凡人ゆえ、時間が掛かったことをお許し願うとともに、残りの勤務において、少しでも後輩

育成に役立つよう努力することを誓って所見とします。

特科大隊本部

二等陸尉 松下 卓也

一 全般

平成15年10月に第1空挺団に配属となり、同年12月に基本降下過程を終了し、空挺隊員となった。空挺隊員となって、現在までの3年2か月を過ごしてきた。それまでの間に「空挺」、「挺進」などの言葉の意味を考えたり、感じたりしたことはほとんどなかったに等しい。自分の部隊の伝統、歴史を知ることが、これからの自分にとって非常に重要だと考えていたが、結局は、これらの歴史について勉強することはなかった。本年度は、幹部教育の一環として、初級幹部の話し合い等の場に關連して、先輩方から「空挺」、「挺進」の意味等を聞く場面が何度もあり、その度に少しずつ挺進部隊に関することを学んだ。

今回は、田中賢一氏の「陸軍挺進部隊外史」を読ませていただく機会をいただいたので、この本を読みながら、日本陸軍の挺進部隊というものが、どういうものであったのかを学ぶことができたと思える。創立当初は、慎重に運用された挺進部隊が、レイテ戦を一つの大きな転換点として、初めから生還を予定しない特攻的性格を強く持つようになったと指摘しているように読み取れ、その統率の姿勢を問題視しているように感じた。

特に、初めて知ったこと、統率の姿勢及び死生観について印象に残った事項について所見を述べる。

二 特に印象に残っている事項

1 陸軍挺進部隊始末について

陸軍に落下傘部隊の前身である挺進部隊が出来たのは、今から約70年前の昭和15年であるとのことであった。パレンバン空挺作戦が行われたのが、昭和17年であるので、部隊が出来てから作戦に使用されるまでの期間の短



さに驚いた。パレンバン空挺作戦は、「空の神兵」と呼ばれるようになった作戦であり、その成功は輝かしいものであるの言うまでもないが、この作戦を行った部隊が、わずか2年前に編成された部隊であるという事実は、本当に驚きである。当時の空挺部隊の隊員は、精強な隊員ばかりであったのではと想像する。

陸軍において実行された空挺作戦は、三つしかなかったということ、今まで空挺部隊に所属していたにもかかわらず知らなかった。私の印象では、前述したように「空の神兵」と呼ばれ、歌にもなるくらいであるので、過去には多くの戦歴、成果があるのではないかと思い込んでいた。しかし、計画された空挺作戦は五つ、実行は三つ、そのうち一つの沖繩空挺作戦は強行着陸であるので、落下傘降下による空挺作戦は二つしかない。その作戦のうちの一つで、素晴らしい成果を収め、国民に「空の神兵」として歌われるようになったのであるから、当時の空挺隊員は、与えられた任務を確実に実行できる隊員であったのだろうと想像できる。

空挺作戦を実行するには、実行までの計画、天候等多くのハードルがあり、非常に難しい。よって、大東亜戦争でも三つの作戦しか実行されなかった。現在、空挺隊員としての私としては、今後も空挺部隊が、空挺作戦として使用される場面は少ないのではないかと考える。しかし、「空の神兵」と呼ばれた大先輩方のように、与えられた数少ない任務を確実に実行できるよう、日々精進していきたいと感じた。

2 統率の姿勢について

レイテ作戦を転機として、空挺作戦が帯びてきた特攻性を指摘し、また、その統率の姿勢について問題としているように感じた。特に、サイパン戦に備えて指定された特攻部隊「義烈空挺隊」に関して、当初は本土決戦に備えて温存する計画であったところを、「特攻隊に指定して長く待機させるのは忍びない」と

いう感情も作用して、遂に沖繩で運用したという事例を紹介している。このことについて田中賢一氏は、「超形而上のことだが、元来形而下であるべき部隊運用に介入していることは、正常ではない」と問題視しているように感じた。

統率の上で、人間関係、感情移入等を除去することは不可能だとは考えるが、「手柄を立てさせてやりたい」というような気持ちで、「義烈空挺隊」のように、戦術的妥当性がないうままに部隊を運用する方向に作用してはならないと感じた。

3 死生観について

陸軍幼年学校出身の奥山道郎大尉の死生観に関する記述が特に印象に残った。初めから生還を予定しない特攻要員に指定されてから半年もの間、具体的な目標が明らかにならないうまま黙々と訓練を重ね、そして、沖繩に特攻隊員として出撃し、戦死した。田中氏は、奥山大尉の強靱な精神力の根源として、陸軍幼年学校出身ということに対する強烈な意識を挙げている。我が国の武士道や西欧の騎士道に見られるように、自らの誇りを命より重んずる態度は、洋の東西を問わず、普遍的に見られるが、そこに共通するのは、自らは一般とは別格の誇り高い身分であるという差別意識であろう。現代では、過去に見られたような特権階級もなく、エリート意識が排除される傾向にある。自衛隊全体はもとより、防衛大学校、幹部候補生学校ですら、組織としてそこまでの差別化意識はない。自衛隊としては、どのような死生観を持つか、あるいは、死生観を確立するかしないかの点から、既に自衛官個人に委ねられているのが現状である。

空挺隊員は、降下という危険を伴った戦術行動をする特性上、死生観の確立は、必須とも言える。戦争当時の先輩方が持っていたような、強烈なものとはまではないが、死に対する姿勢を持っておく必要があるのではな

いかと感じた。また、48頁には、ある小隊長の話として、「小隊長であることが心の支えであった」という記述がある。私も、幹部であること、その自らの責任を、死生観へと発展させていきたいと感じた。

三 まとめ

「空の神兵」とまで言われる成果を残したパレンバン空挺作戦から、特攻としての意味合いは、大きな犠牲を強い義烈空挺隊までを通じて、帝国陸軍の統率の特色、問題点を見ようとすると、非常に示唆に富んでいる。そして、そこで浮き彫りになる体質的な問題は、現代の自衛隊も、潜在的にそのまま旧軍から受け継いでいる可能性があることを、決して忘れてはならないと感じた。

また、陸軍挺進部隊外史にあるような内容については、語り伝える人もいなければ、教えてくべき人も少ない。自ら学ぼうとしないならば、過去に挺進部隊に見られた姿勢、死生観などに触れる機会もない。私は陸軍挺進部隊外史を読んで、昭和15年から現在まで共通してあるであろう、「傘」の絆に誇りを感じるとともに、この「挺」という文字の付いた部隊に所属していることを、誇りに思った。今後、私は、先輩方の築いてこられた良き伝統の継承と、後輩の育成に邁進しなければならぬと感じた。

特科大隊本部

二等陸尉 守田 英彦

一 全般

この度、挺進練習部、第1挺進団司令部部員、そして挺進車隊長などの要職を歴任された田中賢一氏の著書「陸軍挺進部隊外史」を読むことによって、日本陸軍の4年間にわたる空挺戦史について学ぶことができた。

「陸軍挺進部隊外史」では、日本陸軍が実施した空挺作戦の概要だけでなく、空挺作戦に従事した方々の精神面についても記述されており、非常に感銘を受けるものであった。そ

の中でも特に、各空挺作戦実施に至る挺進団の決心について、そして、空挺作戦における特攻精神について述べたいと思う。

二 特に印象に残った事項

1 各空挺作戦実施に至る挺進団の決心について

実際に三つの空挺作戦が行われたわけであるが、それらの空挺作戦が実施されるまでには、方面軍、飛行集団、航空軍、挺進団の間で様々な意見が交わされている。パレンバン空挺作戦においては、南方軍から受領した命令では、攻撃目標は飛行場で、精油所については、なし得れば破壊に先立ち奪取せよ、というものであったが、挺進団側では、精油所にも最初から1個中隊を降下させるという案を主張し、実施するに至った。結果として、飛行場、精油所共に占領するという成果を収め、戦死者もわずか38名に止まった。一方、レイテ空挺作戦においては、第14方面軍が第4航空軍に対して示した作戦に対して、挺進団は、地上部隊の攻撃目標に含まれていない二つの飛行場について、収容の見込がないのを承知の上で、制圧するよう意見具申し了承されている。結果として20数名が生き残っただけで、輸送機36機のうち19機を失った。沖繩空挺作戦に至っては、勝機を掴めると判断した第6航空軍が、自主的に大本営に要請して義烈空挺隊の使用が認可されたのである。パレンバン空挺作戦では、挺進団の具申が功を奏し、レイテ空挺作戦では大きな損害を被った。

我々空挺団は、幸いにYSに毎年参加できる状況にあるので、方面隊の作戦において空挺作戦を発動する場合に、どのような目的で実施するのか、地上部隊との連携はどうか、どの正面に実施すれば戦況を打開できるか等、考察する良い機会であると思う。

2 空挺作戦における特攻精神について 空挺作戦が、どのような位置付けで行われたのかを見ていくと、戦勢の悪化に伴って、



空挺作戦が次第に特攻隊の要素を含んでいったということが良く分かり、衝撃を受けた。特攻隊の要素が出てきたのは、レイテ空挺作戦からであるように思う。レイテ空挺作戦における空挺部隊の任務は、地上から進出する第26師団の先遣隊となり、東部平野における第26師団の決戦を宥ぎするというものであった。攻撃目標は、上陸しようとする第26師団の船舶に対する敵航空攻撃の発進基地となっていた五つの飛行場であった。その目標のうち、ドラグ及びタクロバンへの攻撃方法は、全員が落下傘を着けずに小銃と手榴弾だけを手に取って乗り込み、強行着陸により敵飛行機を爆破するというものであった。正に、特攻としか言いようのないものであったことが分かる。一方、沖繩空挺作戦における義烈空挺部隊の任務は、沖繩の読谷飛行場及び嘉手納飛行場に強行着陸し、陸海軍の特攻機の進攻を容易にすることであった。そして、命の続く限り遊撃戦をやれと命じられていたのである。6か月もの間、特別攻撃隊として指定された上、攻撃目標もサイパン、硫黄島と2度も変更され、遂に、読谷、嘉手納両飛行場に突入して全員玉砕した。その6か月間における心境は、想像を絶するものであったと思われる。上級司令部の作戦立案時の心境としては、戦勢の悪化に対し、国を守る最終手段として玉砕戦法をやむなく決心したと察するほかない。我が方が、劣勢に立たされている状況下、死を予期した上で、身を挺して任務達成のため邁進した空挺部隊の特攻精神は、同じ軍人として、そしてまた、空挺隊員として尊敬すべきものであると思う。

三 最後に

今回、日本陸軍が実施した空挺作戦について学ぶことができたが、今回だけに止まらず、自学研鑽により更に詳細に学び、空挺戦史から様々な教訓を得る必要がある。また、諸外国が実施した空挺作戦についても見聞を広めることにより、諸外国の戦法についても研究

していくことが重要である。

特科大隊本部

中隊長・一等陸尉 米田 徳久

一 本書を読むに当たり、表紙裏面を見て、心を新たに読む「逝く者は斯くの如きか 晝夜を捨てず(論語子罕篇) 共に皇軍の一員であった者の大半は鬼籍に入ってしまった。有史以来稀にみる激動の数年間に得た体験の一端を取纏め、我々の後継者である自衛隊空挺隊員に遺そうと思う。時あたかも終戦六十年、この小冊子一万にも及ぶ戦没空挺隊員の追悼にもならんか。

いくさやみふたたびめぐるきのととり わかき日散りしともをおもほゆ」と。

上記を最初に拝見し、田中賢一氏の我々空挺隊員に対する思いの重さを感じるとともに、後に続く者としての責任の重大さを感じて拝読することにした。

二 本「陸軍空挺部隊外史」を読むに当たり、二つの簡単に読んでいこうと思った。

1点目は「中隊長として部隊の統率・指揮にどのよう活かせるか」、2点目は「大東亜戦争当時の日本人、とりわけ軍人・空挺隊員が、どのような死生観を有していたか」について、留意して読んだ。

三 「中隊長として部隊の統率・指揮にどのよう活かせるか」

やはり、指揮官としては率先陣頭に尽きるのではないかと、本書の各作戦等において、中隊長等が司令部に自分の中隊を使ってくれと懇願したり、談判するという表現があるが、練に指揮官と共に、今までの厳しく苦しい訓練を隊員と共に、その成果を実戦で発揮することこそが、部隊を統率する上で必要不可欠なのではないか。それが部隊の士気・団結を強固にさせ、任務に邁進できることにならぬのではないか。また、「レイテ空挺作戦に見る忘れられない人々」の項の挺進第3聯隊長白井恒春中佐、タクロバン特攻隊長榊原

達哉大尉なども独特の人柄をもって部隊を統率したように感じられる。

また、義号作戦における義烈空挺隊の奥山大尉においても、サイパン、硫黄島と二度の出撃を取止めになり、精神的重圧や目標を失い訓練だけを黙々と続けた期間が2か月ずつ計約半年間にも及び、その間特攻という名を背負い続け、なおかつ、最後には沖繩に出撃し、その任務を全うしたことは、指揮官として恐らく部下一人一人にわたる管理をした結果であると思う。その点においても、部隊の統率・指揮の観点で重要であると思う。

四 「大東亜戦争当時の日本人、とりわけ軍人・空挺隊員がどのような死生観を持っていたか」について、特に義烈空挺隊に着目してみた。

・ サイパン、硫黄島と二度の出撃を取り止めた約半年間も特攻という名を背負い続けた全隊員(136名)が脱落者なしに沖繩に出撃し、任務を完遂した

・ 義烈空挺隊は、数々の過酷な状況下に置かれ、各人が個々及び共通の死生観を持っているからこそ、約半年間1名の脱落者を出さずとなく任務を完遂できたものと思われる。奥山大尉の死生観

・ 幼年学校出身で真正正銘の将校KD

・ 名誉心は、「求める名誉でなく、傷付けまいとする名誉」

・ 目標が消滅し、具体的任務がない期間でも、即刻この種任務に就けるよう訓練を怠らなかつた。

渡部大尉

・ 敵愾心「サイパンの土になっても米鬼を咬み殺してくれ」

・ 約半年の間持ち続けた敵愾心

・ 「九重の清きさやけき御空をば 乱せし米鬼にいかで生かさん」

小隊長

・ 「俺が行く、俺がやる、俺について来い」と書き残してあるが、これは偽りのない気

持ち 少数の生き残り

・ 異口同音に「中隊長が引き連れて行くのだから、それについて行くのは当然」と余り深刻には考えなかった。

・ 「中隊長がそのような任務をもらったのだから、当然のことだと思った」

死に対決する姿勢

→ 中隊長に対する信頼感

当時の日本人に共通した国家観

+

軍人として鍛え抜かれた責任感

このような死生観は、誰もが国家や自分自身に誇りを持っているからこそ、持ち得るものではないかと思われる。また、文中の写真を見ると、奥山、諏訪部両隊長を始め、搭乗位置への前進や出撃前の宮越准尉の写真など本当に笑顔であり、死生観がはっきりしていると思われる。

これもひとえに、神武天王即位以来二千六百有余年の歴史において、他国の侵略を受けることなく、一つの民族であったこと、江戸時代の会津藩日新館など各種藩校における武士道の教え、明治維新後も欧米の文化を取り入れつつ日本人としての誇りを堅持する教育、滅私奉公の精神など多くの日本人としての心の賜物ではないかと推察する。

五 「全国ノ学童ニ寄ス 俺ガ行ク 俺ガヤル 俺ニ続ケ コノ意気ヲ進メ コノ意気ヲ勝テ」

と義烈空挺隊の棟方少尉が出撃直前に書いている。

大東亜戦争において多くの先人の尊い犠牲があったが、そのほとんどが自分の後に続く者に期待をしていたからこそ、戦い、そして散っていったと思う。

六 本書を読んで、自分自身が中隊の統率・

指揮をする上で大切なこと、そして死生観について多くのことを感じ得るものがあった。しかしながら、それをそのまま実践できるわけでもなく、今後日々の修養が必要であると思う。日々是勉強であり、完成はないので、任務達成に向け無駄な血を流すことのないような努力が必要であると思われる。

ナベナ・ハーゲン空挺作戦についても氣象の克服及び適切な兵站支援において重大な影響を受け、「機動」を発揮することができず、この外史のおかげで自分自身が普段如何に野外出令を読み返していないかを痛感してしまっただ。

良く「死生観」という言葉を耳に思う。幹部に限らず、陸士に至るまでよく聞いていようと思う。やはり日頃の降下訓練等に細心の注意を要するためであると思うが、しかし、我々の持っている死生観というものは、「死」という未だ経験しない恐怖心とかが何処か根底にあり、その恐怖心を自分の愛国心とかさういった言葉を被せて己を奮起させているように感じる。しかし、この当時の人達の「死生観」は、現代の人達と何かが違うと感じる。根底にあるものは同じだと信じているが、この人達の持っている死生観は、もともと持っていた死生観から戦場で更に、それぞれの境地に到達している。有事等、いざ防衛出動がかかった場合、万が一空挺作戦が発動されるような事態に陥った場合に同じような心境になるのかもしれないが、今現在、小隊長として持つておかなければならない気構えとして、日頃の訓練等において実際の状況を考えて、小隊隊員達に考えさせ、状況に入り込み、有事員が立って空挺隊員達を指さなくてはと考えさせられた。

四 その他  
今回の田中氏の「陸軍挺進部隊外史」を読む機会をいただき、自分なりに繰り返し読みましたが、未だ勉強不足であり、空挺戦史については、ほんのさわり程度の読み物を読んだ所見となっていました。爾後、自宇研鑽し、空挺隊員としての知識と経験を更向上させたく、努力しなくてはいいと感じました。最後に、外史を読む機会を与えていただき誠にありがとうございました。

七 最後に  
昨今の世の中の乱れ、新聞やニュースを賑わせるのは親殺し・子殺し、いじめによる自殺等正に、先人達が後に続く者に期待をして戦い、そして散って逝ったことを忘れ去っているかのような毎日、我々は武装集団である自衛隊の幹部自衛官として、日本人としてのDNAを取り戻すべく、正しいことは正しく、やるべきことはやるなど、一つ一つ確実にこなし、「任務を完遂」していきたいと想う。

二 特に印象に残った事項  
1 統率の姿勢―日本陸軍4年間の変わり方―  
空挺作戦における年代順に、田中氏が觀察の対象を統率の態度として捉えて、その変わり方について極めて急傾斜であると述べていることに對して、作戦名この記述を読むと、イメージとしては、「空挺作戦」特攻作戦のような印象を受ける。その転換期は、レイテ空挺作戦であり、ドラグ・タクロバンといったような地上部隊と提携できない地域の降下についても、収容の見込みのないことを承知で意見具申している。最初のパレンバン空挺作戦においては、失敗した場合の収容の難しさから、降下部隊に多くの損害を出しては、将来の発展に悪影響を及ぼすと寺内総司令官が表明している。私は、この変化について、当時の戦況の推移がそうさせたのか、想像することしかできないが、このような状況の中で、指揮官として部隊を統率する難しさ、また、決心の難しさは、後半の作戦になればなるほど大変な苦労があったのだなと感じた。

三 今後の資とすべき事項  
陸軍の空挺戦史に見る特攻精神  
あえて特攻精神にこだわってみたいと思つた。なぜならば、この特攻精神の中に、野外出にある「指揮官の責任」の要素を私なりに感じたからである。

一 はじめに  
「散る桜 残る桜も 散る桜」後に「義烈空挺隊」と呼ばれた、隊長の奥山大尉が弟にあてた遺書の文面の一部です。  
「陸軍挺進部隊外史」を購読し、一番印象に残った文面(言葉)であり、その意味を自分なりに説き明かすと、自分の命を桜の花に例え、「俺が日本の未来のために先に逝くから」弟に対して「後は頼むぞ」と、後に続く者に期待を託した文面であると感じるとともに、桜吹雪のように、見事に散って(命を懸けて)任務を遂行する)みせる、という意気込みの表れであると感じました。

一 全般  
陸軍挺進部隊外史を読んで、最初に考えたことは、空挺作戦の難しさとその空挺(挺進)部隊における指揮官の統率及び部隊の士気であり、その根底にあるそれぞれの兵士の死生観についてである。また、この外史から感じ取れることは、指揮官から全兵士に至るまで同じ目標をしっかりと見据え、誰一人としてその目標の達成を信じて疑わない姿勢と努力であり、その目標の達成のために綿密かつ周到な計画が存在したことである。目標の達成を追求する指揮官の姿勢をわずかながらも感ずることができた。

「状況の不明等の理由により決心をためらってはならない。」と野外出令にある「決心」の中の一節そのものように感じました。指揮官が動揺すれば、指揮は自ら乱れ、部隊は混乱するに至る。日頃、訓練等で状況急なる時、ただか小隊長の長にあっても後々振り返るとためらっている自分に気付く。そんな時はやはり、小隊の隊員達の不安そうな顔を思い出す。

二 義烈空挺隊員に見る特攻隊員の死生観  
この項目の中でも更に印象を強く受けたのが「達観の境地」である。我々空挺隊員は、

正直なところ「空挺戦史」については、平成8年12月(基本入校1か月前) 倶知安の上曹に入校中、旧挺の岩崎節男氏の講話「パレンバン作戦」の印象が強く、大東亜戦争中の4年間に陸軍で計画された、その他の空挺作戦については、ほとんど知識がなく、今回「陸軍挺進部隊外史」を購読し、作戦の一部を知り、自分自身の考えが変わったように思えます。

正直に私は、この外史を読むまで、野外出令の「戦いの原則」に結び付けて挺進部隊の作戦を考えたことがなかったが、戦いの原則の9項目の一つでも欠けてはならないと改めて認識することができた。ラシコ空挺作戦、ベ

「達観の境地」である。我々空挺隊員は、

私にも上下一体となって、その責任を忠実に果たすべく、訓練が求められる今、一番の実戦を知るには、実際に命を懸けて戦った戦史を勉強し、その先例や諸先輩方々の生き様を知り、それを自分の知識として、また、今の自分の立場に

その中であって、特に「実戦的、実際の」訓練が求められる今、一番の実戦を知るには、実際に命を懸けて戦った戦史を勉強し、その先例や諸先輩方々の生き様を知り、それを自分の知識として、また、今の自分の立場に

じて今後の訓練に活かし、実践することが重要であると思いました。

以下、「陸軍挺進部隊外史」を購読し、自分なりに感じたこと、「空挺団の幹部としてあるべき姿」、現職務である「測量班長として」及び精神的要素である「死生観」について考えてみたいと思います。

### 二 空挺団の幹部としてあるべき姿(目指すもの)

- ・ 精鋭無比を標榜してのあくなき挑戦
- ・ 誠実・献身に任務を遂行(率先垂範、公平、無私等)
- ・ 唯一の落下傘部隊としての誇りを堅持
- ・ 空挺隊員の心得の実践
- ・ 細心(緻密な準備力)にして大胆(怯まぬ実行力、精神力)
- ・ 俺に続け(体力・気力・識能)
- ・ 現場主義・切実琢磨

以上空挺団の幹部としてあるべき姿を列挙してみました。が、「陸軍挺進部隊外史」の中で記されている空挺幹部として見習うべき一人の言動を例に取ってみると、

- 第1 レイテ空挺作戦において
  - ・ 47日もかけて 木の芽や草の根を食み、言語を絶する苦難に耐え、疲労困憊物を言う元気もない時、白井聯隊長は、鼻唄を口ずさんで、部下を励ました、と記載されています。

これは、空挺隊員の心得である、不撓不屈の精神に加え、誠実・献身に幹部(指揮官)が部下を思い遣る気持ちの表れであると思います。

- 第2 奥山隊の小隊長は
  - ・ 「俺が行く、俺がやる、俺について来い」と書き残しています。正に「俺に続け」「率先垂範」の鑑ではないかと思えます。

空挺幹部の模範として、印象に残った二人の言動について、あるべき姿との共通点を見

出しました。以上を踏まえ、  
三 測量班長として(任務を達成するために)

測量班長として、今までの訓練を是正し、今後着意することは、「実戦的訓練を本気でやる」ことです。自分自身「実戦的」と部下に対して要求しているが、確実に実施させているか? また、自身は行っているか? 「これは訓練であり、敵はいないし、弾も飛んでこない」、「上司も見ていないから多少手を抜いても大丈夫」と考えたことがなかったか? 序論でも記述した、実際に戦った戦史の中でも、「物的戦闘力の弱体な我々は、敵の直上に降下して、奇襲の利を最大に享受しなければならぬ」(パレンバンにおける木下中佐の持論)

航空機等輸送能力や携行できる武器、弾薬に制限を受ける空挺作戦において、敵に勝利するためには、ある程度の犠牲を覚悟に敵の中に降下して戦うことのできる体力と精神力が必要であること言うまでもありません。

しかし、現在重要なのは、測量班長として、部下の犠牲を最小限、いや、生き残って任務を達成することであり、そのためには、「実戦的訓練を本気でやる」ことが重要であると思えます。

平時、幹部が部下を訓練させないのは、怠慢ではなく、「犯罪」である、と教えられたことがあります。が、部下を死なせず敵に勝つこと=任務達成である、と思えます。

### 四 死生観について

義烈空挺隊に見る特攻隊の死生観  
再三目標が変わり、毎日毎日出撃準備をするときもあり、最後に健軍を出撃する時も、登場直前に1日延期となりました。その間の精神的重圧は想像すらできません。しかも、奥山隊は、その半年の間、136人中1人の脱落者もなく訓練していたという、彼らの心の

抛り所、死生観とはどんなものだったのか? 記述によると、

- ・ 名譽心や敵愾心
- ・ 当時の日本人に共通した国家観
- ・ 軍人として鍛え抜かれた責任感
- ・ 中隊長に対する信頼感

等々様々であり、自分の死を美しいと見る、情緒的な死生観と、自分の死が、如何なる価値観を持つかという理論的、哲学的な死生観に大別されるようです。

自分自身「死生観」について普段思っていることは、「いざ」という時に迷いが生じないよう、本気で家族を愛し、仲間を愛することだと思えます。

それは、他人に強要されるものでもなく、個人個人に生まれる、死を恐れず任務に邁進する気持ちであると思えます。

### 五 さいに

「全国ノ学童ニ寄ス 俺が行ク 俺ガヤル 俺ニ続ケ コノ意気デ進メ コノ意気デ勝テ」(棟方小尉の手記)  
その時代を含め、将来を担う未来の若者に、日本の勝利を託したのではないのでしょうか。今の自分が存在し、日本の平和と繁栄の礎は、約60年前、自己の命を犠牲に散っていった諸先輩方々の偉業があったからこそと思えます。それは、未来永劫忘れてはいけないことであり、父親としては、子供達に、空挺幹部としては、部下達に、語り継ぐ責任があると感じました。

犠牲となった英霊達に感謝の気持ちを込めて。  
特科大隊  
第一中隊長・一等陸尉 齊藤 洋二

### 一 全般

今回、「陸軍挺進部隊外史」を購読する機会をいただき、空挺戦史の知識を得ることができ、空挺隊員として、また、中隊長として身の引き締まる思いがすると共に、今後の勤務に参考になることばかりでした。これまでにも課程教育、勉強会等で戦史に

ついては学んできた積もりでしたが、挺進部隊について、ここまで深く掘り下げたことはなく、一般論的な内容しか認識していない自分が恥ずかしくもありましたが、新鮮な気持ちで購読することができました。

特に、昭和17年の栄光に輝いていた「空の神兵」こと、パレンバン空挺作戦から昭和20年終戦間近の特攻作戦、沖繩空挺作戦まで、時代の背景、作戦に至るまでの経緯、また、戦史にない空挺作戦やその時々の指揮官等の心情・エピソードが詳細に記されており、非常に感銘を受ける内容でした。

所見を書くに当たり、「空挺隊員として」「中隊長・指揮官として」の二つの視点から所見を記述したいと思えます。

### 二 空挺隊員として

まず、この冊子の表紙の裏に書かれている「共に皇軍の一員だった者の大半は鬼籍に入ってしまった。有史以来稀にみる激動の数年間にて得た体験を取り纏め、我々の後継者である自衛隊員に遺そうと思う、この「後継者」という1節に込められた思いを考えると、私のような未熟者にも空挺隊員として先人達の血が脈々と受け継がれていることに感慨深いものがありました。また、「生還の見込みのものがない」と感じました。

また、「生還の見込みのものがない」と感じました。また、「生還の見込みのものがない」と感じました。また、「生還の見込みのものがない」と感じました。

特に、冊子の中に紹介されている遺書は、  
「後に続く者に期待する」と「後に続く者を奮起させる」、これら二つに自分の死の価値を見出している」と書かれています。当時を知る術は、生存している方々の講話、書籍等に頼るしかないが、空挺戦史についての認識を深め、後輩達に語り継ぎ、いつまでも空挺の血、先人達の偉業を後世に残すことは、後に

続くことを信じて亡くなられた先輩達に対し、



今を生きる我々の使命と感じました。

三 指揮官・中隊長として  
指揮官・中隊長として、死生観について深く考えさせられました。

「民族の永遠に続く命が、区々たる個人の死生観を確立させた」、「当時の日本人に共通した国家観、それに加えて、軍人として鍛え抜かれた責任感があり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうちに死に決する姿勢が取れた」と書かれていましたが、その根底は愛国心、家族を愛する気持ち、仲間を愛する気持ちだと感じました。特に、沖縄特攻作戦の義烈空挺隊奥山大尉以下の死生観については、読んでいて熱いものが込み上げてきました。

義烈空挺隊は、特攻隊に指定されてから突入までに半年も掛かり、このような部隊は、他に類は無いと書かれています。そんな気持ちでその半年間を過ごしたのか、その間の心の拠り所は何だったのか、奥山大尉の、幼年学校出身の正真正正の将校としてのプライド、副隊長渡部大尉の敵愾心、また、不時着した生き残りの人達が異口同音に申した「中隊がそのような任務をもらったのだから、当然のことだと思っただけで、死生観と言われれば、それが死生観だったのだろう」と。また、「中隊長と共に往くのだから・・・」という、中隊長に対する絶大な信頼感は、どこから生まれたのか、それを考えると、今の私に奥山大尉のようなプライドや、人間的な魅力が備わっているか、また、隊員を奮い立たせて任務に邁進させることができるか、非常に考えさせられました。

四 最後に

「星移り、歳変わり、死生観など」ということが、全く無縁のような時代になったが、まだ歴史というには余りに近い、我々と本当に

同時代に生きた人が、今日とかけ離れた歴史上の人物になってしまっていることに、今更ながら愕然とすることがある。確かに戦後60余年は、戦争を経験している方々がたくさん生きているし、歴史として片付けるにはまだまだ早い。

戦争を非難する人はたくさんいますが、戦争で亡くなられた方々は本当に国を愛し、後に続く者を信じ、今日の礎になっていることも確かだと思えます。

今回、「陸軍挺進部隊外史」を購読して、空挺作戦で亡くなられた多くの方々、今の日本・自衛隊・空挺団を見て何と思うか、それを考えた時、私も日本人として、自衛官として、空挺隊員として、襟を正していかなければならない、と深く感じるとともに、国を愛し、家族を愛し、仲間を愛することが、如何に大事であるかを、家族や隊員に教えていくことが、今を生きる我々がまず、しなければいけないことだと思えます。

特科大隊第一中隊

三等陸尉 齊藤 智久

一 全般

この度「陸軍挺進部隊外史」を拝読させていただき、これまで自分が空挺隊員として、幹部として知っておかなければならない、空挺戦史に関する知識の一部を得ることができました。

空挺団で14年間、陸士、陸曹、幹部と勤務してきましたが、空挺戦史に関する知識は、一般的な戦史の知識程度しかなく、表面的なことしか知りませんでした。今回この冊子を読ませていただき、「陸軍挺進部隊外史」に登場する様々な先人達の偉業に触れることができましたのは、空挺隊員として、また、空挺団における初級幹部として、今後の部隊(空挺団)勤務に臨む心構え・軍人としての精神を涵養することができたと思えます。

二 空挺隊員として

「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」にあつた、死地に赴く際の達観の心境に関する一編に接し、当時においては、筆者が考えたとおり、死に対する「美意識」的なものもあつたかも知れません。しかし、現代に生きる空挺隊員としては、後世に継ぐ我が国を、親兄弟を、部下等愛する者を思い、同志と共に死地に赴くのだという、形而上の「死生観」が特に大切であると思うとともに、自分自身、深く感銘を受けました。

もし、現代に生きる自分が、当時に生きる隊員であつたら、形而上における死生観、筆者が言う己の死に対する「価値観」を見出そうと、自分自身に暗示をかけるように、まずそこから始まったのかも知れません。その達観の心境こそ、自己の使命感、部隊における責任感が当然に湧き上がり、戦場に向かうことと勇氣となつて、任務達成へ邁進することのできるものと感じました。また、奥山隊の小隊長、棟方少尉が、後に続く者達のために言い残した「俺ガ行ク、俺ガヤル、俺ニ続ケ

コノ意気デ進ム、コノ意気デ勝テ」という言葉は、これこそが空挺精神の真髄であり、また、挺進部隊の小隊長として隊員を牽引し、指揮下部隊をして任務を達成させるといふ強い意志を感じるとともに、自分もそのような、熱い空挺隊員でありたいと思えました。

三 初級幹部として

奥山大尉の弟に当たった遺書で「大東亜戦争を解決するものは、若さの力にあり、若人は、須く公明正大、快活無邪気たるべし、散る桜は、残る桜も、散る桜、兄に後統望む」との文にある、「公明正大」「快活無邪気」という言葉が、今の空挺団に照らし、精鋭無比の源泉となり、受け継がれている一つだと感じました。空挺団の精強性の一つは「若さ」にあり、初級幹部としての自分が思うことは、常に「若さ」の心を忘れず、隊員の指導に当たっては、公平で偏らず、慈愛心をもって接し、訓練に当たっては、情熱をもって実施することが大

切。そして、いつも元気で積極、活刺、どんな苦境に置かれても最後まで敢闘し、真っ直ぐで、純粹な心を持った人間を目指し、育てていくことが任務遂行の基盤となり、また、それが自分の、初級幹部の使命だと感じました。

現代人における死生観とは、「星移り、歳変わり、死生観など」ということが、全く無縁の時代」と書かれたように、そう感じさせる考えを持った人も確かにいると思えます。筆者から見れば、自分もその一人として見られるかも知れません。しかし、自分が親から学んだ18年間に続いて、自衛隊に入隊して約14年間、諸先輩方・同僚・後輩から学んだものは、「思い遣りの心」であると思えます。

奥山隊の特攻隊員が「中隊長と共に往くのだから・・・」と言うところにも、心の拠り所としていたように、自分も今ある地位・役割の上で「上官のために、同僚・部下のため」という心を教え込まれてきたと思えます。将来、自分が指揮官を拝命した時、真に信頼されるためにはどうあるべきかを、初級幹部時代に掴み、自分自身の思うところの「信念」を堅持し、戦に当たれば、飽く無き執念で勝利する強い精神力と、人間的魅力を備えた人間でありたい、と痛感しました。

特科大隊第一中隊

三等陸尉 村田 智宣

一 全般

私は、「陸軍挺進部隊外史」につきましたは、正直に申しまして、幹部候補生学校での戦史の授業と、沖縄現地研修で学んだ義烈空挺隊の行動程度しか認識がなく、今回このような購読の機会をいただきまして、空挺隊員として、「死生観」、また、初級幹部として、「指揮及び統率」という観点から購読いたしました。また、空挺団の初級幹部として、今後の部隊勤務における心構えや、軍人としての精

神を涵養することができたと思います。  
今回の所見を書くに当たりまして、「空挺隊員としての死生観」「初級幹部としての指揮及び統率」について、二つの視点から所見を述べたいと思います。

### 二 空挺隊員としての死生観

私には、妻や子供、そして親族等、養い守るべき者がおります。もちろん、当時の先輩の方々にも同様のことが言えることは、言うまでもありませんが、正にそのような状況において、勇猛果敢に、果たして同じ行動が取れるかと思うと、正直のところ、胸が苦しくなります。

義烈空挺隊の場合は、当時の日本人の共通した国家観と、それに加えての、軍人としての鍛え抜かれた強い責任感が根底にあり、その上に、上官(中隊長)に対する信頼感が乗った、自然のうちに死に対する姿勢が現れていると思います。そして、6箇月の間、現在の我々には想像もできないほどの過酷を極める訓練や、出撃準備に明け暮れる中で、国を愛する思い、仲間や家族を愛する思い、そして自分の死を思う中で、死生観が確立されたと思います。そして、当時においては、筆者が考えるように、死に対する「美意識」的なものが強くあったと感じられました。

仮に、これからの時代に、生きて帰れぬ任務があるとしたならば、私は戦地で亡くなられた先輩方のように、毅然としていられるかは分かりませんが、少なくとも、目前に迫る死や恐怖に対して、それらに負けない強い意志と、そして、死に押し潰されない気概を持ち、空挺隊員として、任務を遂行していくかなければならないと思いました。そうすればきっと、自分に任された任務については、完遂できるのではないかと思います。

### 三 初級幹部としての指揮及び統率

沖繩特攻作戦の義烈空挺隊の中に、副中隊長格の渡部大尉と奥山隊の棟方少尉という闘

志の塊のような人がおりました。渡部大尉の方は、初級幹部ではないのですが、私は初級幹部(小隊長)としまして、正に渡部大尉・棟方少尉の指揮及び統率そのものが、初級幹部(小隊長)に必要ではないかと強く感じました。渡部大尉は、大変気が強い上に、敵愾心が強く、それを心の支えとして戦い、「サイパンの土になっても、米鬼を咬み殺してくれる」と書き残したように、勇猛果敢に戦ったのではと、激しい言葉の表現から伺えました。一方、もう一人の棟方少尉の方については、「俺が行く、俺がやる、俺について来い」という男気溢れる言葉は、初級幹部(小隊長)としまして、小隊の部下隊員に対して、多くの言葉をかけるよりも、何よりの信頼と安心感を与え得るのではないかと思います。それだけではなく、「中隊長と共に往くのだから」と書いてあるように、上官にも忠実であり、上官を信じる心と、この人のためなら何が何でもという、一途な心は、非常に感銘を受け、私も見習うべき点が多々ありました。もちろん、奥山大尉の偉大さもあるでしょうが、やはり、初級幹部(小隊長)になる者として、時代は変わったとは言

いまして、渡部大尉や棟方少尉のような、大胆でありながらも繊細で卓越した指揮及び統率が取れるということが必要であると思えました。

### 四 最後に

戦後60余年が経ち、「星移り歳変り、死生観など」ということが、全く無縁のような時代になったが、日本が平和であることが当たり前になりつつある現代、このような戦いで、命を落とした方々がいるという現実を再認識して、日本の平和を祈ることが、大切であり、また、我々軍人としては、戦地で亡くなられた先輩の方々の死を無駄にすることなく、このような貴重な外史や、戦争の歴史を再認識し、追体験することにより、愛国心の高揚と

戦史の識能の向上を図り、我々がより高い意識をもって、日々の訓練に邁進しなければいけないと深く感じました。

### 特科大隊

#### 第二中隊長・一等陸尉 長船 好敏

##### 一 はじめに

防衛大学校に入校以来、挺進部隊(空挺)については、関係する書物を読み、様々な教育等を通じて学んできた。私は、平成10年10月に第1空挺団所属以来、前進観測班長、大隊本部運用訓練幹部等として勤務し、平成18年8月から第2中隊長として勤務している。私は、空挺団でしか勤務したことがないという特性がある。今回空挺隊員という立場と中隊長(指揮官)という立場で「陸軍挺進部隊外史」を購読した。それぞれの立場で私が感じたところを述べたいと思う。

### 二 空挺隊員として

空挺作戦は、航空機等を使用して降下又は降着して戦闘加入するという華やかさはあるが、それと同時に、死の危険性が高く、与えられる任務は困難なものが多く、部隊及び隊員に求められる要素も多い。また、失敗した場合に撤収が難しい。正に身を挺するという言葉そのものである。このような危険な部隊で空挺隊員として勤務している隊員の心の支えとなっているものは何だろうか。

私が一番に考えるのは、部隊に対するプライドだと思ふ。他の部隊とは違うんだという誇りが支えになっていると思う。任務が困難ならば、それに見合うだけの訓練をすればいい。体力練成をすればいい。このくらい泣き言を言っているようでは、先輩方に笑われと思う。空挺団の名が廢る。そのような気概だと思ふ。空挺隊員はよく「傘の絆」で結ばれていると言われるが、正にそれが部隊に対する誇りであろう。「傘」という一つの共通の媒体を通じて、年代を超えて顔も知らない、部隊も異なる者同士が団結できるのは、傘に空

挺団に対する誇りがあるからだと思ふ。当時の隊員も「傘」に対する誇りで固く繋がっていたのであろう。

### 三 中隊長(指揮官)として

指揮官としての、与えられた任務達成のため最前を尽くすのは当然であるが、そのために犠牲を払うことがあれば当然躊躇するであろう。部下の命を預かっているのであるから、そう簡単には、命令することは困難である。私が指揮官と隊員との関係で最も重要であると考えるのは、信頼関係である。文中にも「中隊長が引き連れてゆく」のだから、それについて行くのは当然だと思ふ、「死について」それほど深刻には考えなかった。「中隊長がそのような任務をもらったのだから、(出撃は)当然のこと」とあるように、指揮官を核とした強い信頼関係が重要であると考える。

この人のためなら何でもやる。また、この部下達なら何を命じてもやってくれる。そういった関係を築き上げることが必要であると思ふ。では、そのためにはどうしたらよいか。まず、部下を指揮する立場にある指揮官自身の充実が大切である。部下はよく上司を見ている。指揮官の言動は、良くも悪くも部隊及び隊員に及ぼす影響が大きい。指揮官は、自らの立場をよく自覚し、与えられた任務、役割等をよく理解し、史実等を学び、自学習により、識能を向上させなければならない。指揮官の無知等により部下を死亡させたり、危険な状態に陥れることがあってはならない。また、首から上だけ鍛えても駄目である。作戦間どんな困難な状況になっても、継続して指揮できる強靱な体力と気力が必要である。日頃から継続して体力練成をしておくことが大切である。体力について言えば、指揮官としてだけでなく、兵隊として当然保有すべき要素であるが。

次は、部下と苦楽を共にし、同じ釜の飯を食べて一緒に行動することである。ただ「や



れ」と命令するだけでなく、自らが陣頭指揮を執って訓練等を行うことが重要だと考える。訓練内容も常に実戦を意識したものであり、段階的に部隊を練成して、隊員に充実感及び達成感を与えなければならない。また、妥協することなく、やるときは休ませる。そのかわり、休ませるときは休ませる。指揮官の任務は、精強な部隊及び隊員を育成し、指揮下部隊をもって任務を達成することである。指揮官は、部隊の精強化と部下を絶対に死なせてはならないという責任があると思う。堅固な信頼関係なくして部隊の精強化は図れない。「命令」と「服従」の関係が確立できており、また、団結強固で規律が守られており、士気が高い部隊が精強な部隊であると私は思う。空挺隊員はよく「傘の絆」で結ばれていると言いが、これはある意味で、上下左右の信頼関係だと私は思う。人は誰しも疲労困憊の状況下で行動するのは困難であるし、また、死ぬのは怖い。その疲労感や死という恐怖心を少しでも取り除いて上げることができるのも指揮官の言動であると思う。

#### 四 最後に

今回、この「陸軍挺進部隊外史」を購読して、傘の絆を大切にして、中隊長として自らの識能を磨き、隊員指揮能力を向上させ、厳しい訓練を隊員と共に実施し、堅固な信頼関係を確立して、精強な部隊を育成するために、今後ますます精進しなければならぬと、改めて思った。

### 特科大隊第二中隊

#### 三等陸尉 藤原 拓也

#### 一 全般

私は、平成6年4月に陸上自衛隊に入隊し、同年7月から空挺特科後期で教育を受け、同年11月基本降下課程を修了し、空挺隊員となりました。以来13年多くの上司、先輩方から空挺隊員のあるべき姿についてご指導いただき、私なりに空挺隊員としての誇りを持って

勤務してまいりました。この度、「陸軍挺進部隊外史」を読む機会をいただき、数々の空挺隊史を目の当たりにすることとなりましたが、恥ずかしいことに、耳にしたことのない作戦も書かれておりました。所見を書くに当たり、特に印象に残った事項及び初級幹部としてあるべき姿について述べたいと思います。

#### 二 特に印象に残っている事項

特攻隊という部隊が、世界戦史の上で用兵上に登場したのは、昭和19年10月、レイテ決戦のときに編成された海軍の神風特攻隊、そして陸軍では、我々の先輩である義烈空挺隊が、陸海軍の特攻機の進行を容易にするため、沖繩の北（読谷）飛行場に強行着陸し、阿修羅の如き活躍をして全員玉砕しました。また、昭和19年11月から20年5月までの6か月間にわたり、訓練と出撃準備を繰り返して、明確な目標を失い、訓練だけを続けていた期間が約1か月ずつ2回もあったと書かれています。そして、奥山隊は特攻隊に指定されたときの136人に1人の脱落者もなかったそうです。精神的な重圧を受けながら、半年間脱落者を出すことなく任務に臨んだことに深く感銘を受けました。当時の軍人は、国のために命を捧げるという死生観が確立されていたと考えます。幹部候補生学校の教育の中でも、死生観ということを考える機会は何度かあり、幹部に任官した現在も時折、死生観ということに耳にはします。しかし、現在私が明確な死生観を持っているかと言えば、そうではありません。降下という危険を伴う戦術行動を行う空挺団に所属している以上は、死生観とまではいかなくとも、常に死が付き纏うことを心の片隅にでも置いておきたいと考えます。

私は国民の負託に応える自衛官として、自衛官の幹部として、国を守り、また、夫として、父として家族を守らなければなりません。現代において、有事の際、先輩方のように使命感・責任感を持って任務に邁進できるのか、戦争経験のない私には、正直なところ想像が

つきません。しかし、今後多様な任務に対処しなければならぬ自衛隊の一員として、死生観を確立し、自分に与えられた任務を完遂していきたいと考えます。

#### 三 初級幹部としてあるべき姿

私は、昨年3月に幹部に任官しました。「陸軍挺進部隊外史」では、初級幹部について余り触れられていませんが、ある小隊長は「俺が行く、俺がやる、俺について来い」と書き残しています。昨年12月に幹部初級課程を修了し、部隊勤務も2か月が過ぎようとしています。まだまだ経験不足であり、日々上司に指導を受けていますが、この小隊長のようには、やはりリーダーシップを発揮することが重要であり、口先だけではなく、率先して部隊の先頭に立つ、行動・態度で示す、これが初級幹部のあるべき姿であると思います。私は部内選抜幹部であり、曹士を経験してきました。その経験上、不安や疑問を解決して初れたのは、やはり当時の初級幹部でした。初級幹部は、現場進出が多く、隊員に模範を見せようと思えば、その機会は非常に多くあります。裏を返せば、隊員から常に見られているということを意識しながらも、失敗を恐れず、毅然とした態度で部下を率いて行く、このような初級幹部になりたいと思います。

#### 四 結論

ひと度任務を付与されれば、我々はあらゆる困難を克服して、任務を完遂しなければなりません。今後任務を遂行中に、今回読ませてもらった田中氏の「陸軍挺進部隊外史」の内容から、初級幹部の在り方、今回考えた事項を、少しでも思い出し、任務に邁進したいと考えます。今回初めて「陸軍挺進部隊外史」に触れたことは、爾後の幹部自衛官としての勤務の上で大きな資となるものと確信しています。

先輩方が築き上げてきた伝統を守り、空挺隊員としての誇りを持ち、初級幹部として臆することなく、大胆に任務に邁進して行きたいと思いをします。

### 施設中隊

#### 中隊長・一等陸尉 島 寛伸

「陸軍挺進部隊外史」を読み、幹部として「死生観」、「挺進部隊の指揮官」という二つの言葉に着意した。

外史には、大東亜戦争4年間における空挺作戦（パレンバン空挺作戦、ラシオ空挺作戦、ベナベナ・ハーゲン空挺作戦、レイテ空挺作戦、沖繩空挺作戦）が記述されていた。それぞれの作戦開始には、今と変わらぬ気象条件が前提にあり、運用部隊の大小、作戦の相違（それが単独作戦であるか空地協同作戦であるか）はあるが、全般作戦の戦果に及ぼす影響（特に成否は人的物的損害・士気に直接現れる）は言わずと大きかった。影響力に關して言うと、レイテ及び沖繩における空挺作戦は、従来の空挺作戦とは異質な体当たり特攻・玉砕戦法が採用・実施されており、後世の我々に大きな影響を及ぼした。

印象に残った作戦としては、パレンバン空挺作戦及びラシオ空挺作戦がある。両作戦とも当時においては、降下技術と降下者の装備品が開発の最中であり、手探りの中、パレンバンにおいて、聯隊長甲村少佐率いる挺進第2聯隊が飛行機急襲隊及び精油所急襲隊の二正面から降下し、苦しい状況であったが、爾後の戦闘の足掛かりとなる精油所施設の確保という成果を挙げたこと、ラシオにおける（実際の戦闘はなかったが）作戦決行までの憤懣たる一聯隊の戦場降下に懸ける執念、木下中佐という傑物が繰り広げる幕僚会議がとて悪い戦訓となった。

外史を読んで、当時の挺進部隊は精鋭たる所以に、最終カード的な存在であったと推測される。そう思うのは、それぞれの空挺作戦を比較しても、常に決勝点に挺進部隊は投入されていたし、戦訓からも挺進部隊は、士気



ここでまず、そういった挺進部隊の「死生観」は、どこで養われたか考えたい。

単独で操縦桿を握り体当たりする特攻隊員と集団で敵中に強行着陸する義烈空挺隊は、感覚的に似ているかもしれない。共に往くという心の拠り所は持っている。初めは栄達を夢見て付き添った従者でも、人間の魅力に惹かれて、生死を度外視してしまうのだろう。又は、当時の日本人に共通した国家観や軍人として鍛えられた責任感が根底にあったのかもしれない。いずれにせよ、死生観は生まれながらに持っているものではなく、死を意識するところで育んでいくものであると思う。

死生観が確立された集まりは精鋭であると思う。この本において「達観の境地」という表現があったが、そういった境地を持つ集まりは、死ぬことが何か清々しいという錯覚すら受けてしまうのではないか。

次に、「挺進部隊の指揮官」は如何にその部隊を精鋭にするのであろうか。

外史に登場する指揮官に共通しているのは、溢れる気概、強い責任感、正しい識能・情愛であった。中には知識と感覚が一体化した知性が備わっており、短い思考回路で瞬時の判断ができた者もいた。挺進部隊の指揮官は、挺進部隊たる本質を理解し、隊員を直接現場で律していかねばならない。指揮官の先陣を切った降下などが良い例であろう。指揮官は資質と言われるが、私は何より日々修練を重ねて素養を向上させる努力をしなければならぬと感じた。

さて、陸軍挺進部隊と呼び名を異にする、陸上自衛隊空挺部隊は如何にあるべきであろう。あらゆる任務に対応すべき決死の部隊であることは変わらない。しかしながら、我々は常に「特別」であり、「特別」の地位でなければならぬ。その「特別」の地位は、周囲も気を引く不屈の精神と実績で築かれるものであり、実績の積み重ねで「特別」の役割を与えられるのだと思う。言うは易しだが、

そういった気概を秘めた隊員を一人でも多く育てるのが幹部という地位にいる者の役割だと感じる。昔と時代は違って、死ぬために生きる観念は低いが、方法は如何、精神教育をうまく活用したいと考えている。

最後に、戦史を学ぶことは、「歴史の追体験」と言われるが、戦争を知らない世代が戦闘員たるこの時世、先人の貴重な戦訓により追体験し、指揮官としても、道標を正しく判断し、方向付けていくことはとても大切である、と改めて感じた次第です。

## 施設中隊

### 三等陸尉 慈地 孝志

「陸軍挺進部隊外史」の所見について、死生観という観点から、様々な作戦の任務を遂行する上で、陸軍挺進部隊の死生観は如何であったのか、ということについて感じたことを述べたいと思います。

まず、本書に記載されている空挺作戦の一つである、「ラシオ作戦」について感じたことは、天候不良により密雲に閉ざされ、進入できなかったため引き返して、作戦は打切りになったということでありましたが、そのうちの1機が帰還する際故障により失速、墜落したとありました。搭乗者の中の一人、副島中尉が作戦に当たり「予備傘の袋を地雷入れに改造してもよいか」と数個の地雷を胸に装着し、また、工兵出身者は、全員が多量の爆薬を身に付けていたので、輸送機の爆発は何回も続いたという内容を考察するに、当時の装備と、現在の装備の相違はあるが、我々施設科にとっても、各演習の作戦において、状況によっては敵と戦う手段の一つとして、背囊の中に各地雷1個、また、爆薬(TNT)等を携行して降下を実施しているが、そこで自分なりに思うことは、空中機動中に墜落、又は降下時敵の射撃を受けて負傷した場合等、任務遂行前に、遂行できない可能性もあるということ、また、降下直後、敵の反撃がある

場合、携行している地雷だけで閉塞し、当初の任務を達成しなければならぬという気概を再認識させ、そして自覚させなければならぬと思います。

次に、「心の拠り所・死生観」について、自分なりの意見を述べたいと思います。まず本書の中に死生観を伴うところの、心の拠り所の一つに、責任感、敵愾心とありました。特に「中隊長が引き連れてゆく」のだから、それについて行くのは当然、また、「中隊長がそのような任務をもらったのだから当然のことだ」と。中隊長と共に往くのと、そこに心の拠り所があり、人の死生観にはそのような一面もあると、更に義烈空挺隊の場合は、当時の日本人に共通した国家観、それに加え、軍人として鍛え抜かれた責任感が根底にあったとあり、その上に中隊長に対する信頼感が乗り、自然のうちに死に対する姿勢が取れたとありました。時代は異なりますが、自分自身に置き換えてみると、現在小隊長であるが、常日頃から、俺が行く、俺がやる、俺について来い、の精神で、小隊長が引き連れてゆく」のだから、それについて往くのは当然だと思わせるような、また、中隊長、小隊長がそのような任務をもらったのだから当然だと、更に小隊長と共に往くのと、そこに心の拠り所を持たせる、そして、小隊長に対する絶対的信頼感を持たせることを自分自身の心の拠り所とし、日々の訓練等に邁進していかねばならないと思いました。

最後に、この書を読み終えた所見として、現在我々が行っている各種訓練は、訓練のための訓練ではないということ、更に空挺施設の没我精神ということと、隊員個々に認識、自覚させて行かなければならないと痛感しました。それには、まず我々空挺隊員の空挺精神である、強靱な意志、追従を許さない創意及び挺身赴難の気概とを堅持し、剛胆にして沈着、機に応じ自主積極的に行動し、たとえ最後の一人になっても任務達成に邁進しな

## 通信中隊

### 中隊長・三等陸佐 姫野 精至

#### 一 はじめに

私は、この「陸軍挺進部隊外史」を読み、挺進部隊の誕生から始まり、それぞれの空挺作戦等、終戦までの概要を理解することができ、指揮官道とはどうあるべきか、そして、我々はどうのようにしていかなければいけないのかを、先達の体験を追体験することができました。特に、挺身赴難の気概を持ち、部隊を率先指揮する指揮官としての心構えについて、強く胸を打たれ考えさせられました。

二 指揮官として思うこと(今後の着意すべき事項)

1 「状況判断能力及び決心の練磨と習性化」

部隊はこれにより指揮官の考え、方向性が決まり、これを基に命令等を通じて動くこととなります。しかし、常に自学研鑽に努め、あらゆる場を活用して状況判断能力の向上、及び決心を練磨し、習性化することにより、偉大な先達に劣らぬ指揮官となるのではと思います。

2 「部下に対し信頼感を発信し続けること」

指揮官となると、様々な業務等を任せることが多くなりますが、自分の企画・意図が徹底され、その業務が確実に遂行されているのか、信頼感の程度がバロメーターとなるのではと考えます。相互の信頼感の醸成は、まず指揮官から部下に発信することが重要と考え、部下は信頼されていると思うから指揮官を信頼し、積極的に任務を遂行するのではと思います。この際、部下に対する疑心暗鬼や猜疑心は戒めるべきことだと思います。

3 「指揮の要訣の実践による強制力の発

「揮」

人間の魅力や感化力というような雲を掴むようなものを練磨し、發揮して部隊を統率するというのは、なかなか難しいことですが、指揮の要訣の正しい理解とその実践こそが、部隊に対し強い強制力を發揮して部隊を統率し、任務遂行に邁進させることができるのはと強く感じました。部隊を直接指揮する立場として、今後また常に強制力を持ち、指揮の要訣の実践に努めたいと考えます。

三 最後に

本外史を読み、先達の思いに報いるためにも、今後指揮官として自学研鑽に努め、胸を張って碑に対し我が指揮振り報告できるように、日々精進することを誓い、結びの言葉とさせていただきます。

通信中隊

一等陸尉

田中 哲郎

本書を読んだの大きな印象は、陸軍挺進部隊の運用の変遷と次第に極致に至る死生観の形成である。

戦前においての陸軍の挺進部隊は、当初の運用の模索状態から、華々しい戦果を挙げる部隊への発展と、戦局悪化に伴い、特攻的な運用へと変化を遂げる劇的なものであったと言える。挺進部隊の運用は、現在と同様に航空機、制空権、降着地域の確保、気象状況、敵情、降着後の部隊行動等、作戦を行う上での各種条件が揃い、細部その他の調整が整った上で初めて行うことができるもので、隊員の高い訓練練度と士気も必要である。このため、開戦時から非常に緻密な作戦が練られ、最終的に特攻攻撃へと至る義烈空挺隊の運用においても、投げ遣りの運用ではなく、何としても戦果を挙げたいという当時の軍人の執念が感じ取れる。

また、挺進部隊は、部隊運用の特性上、軽装備にて敵陣深くにおいての戦闘行動を行うことから、必然的に大きな危険性を伴ったため、

他の陸軍部隊とはまた違った特別な死生観が養われることは疑われないが、作戦構想に非常に時間が掛かること、作戦の中止が急遽生じることも度々あること、また、特攻攻撃的な任務の色合いが濃くなるにつれて、通常の特攻攻撃よりも、更に特別な心の抛り所が必要であったと思う。我々はこうした複雑な状況下で、当時の軍人が如何に苦しみ、考え抜き、打開に努めたか、良く学び取る必要である。陸軍挺進部隊は戦局の悪化に伴い、最終的に特攻攻撃という手段に出たが、特攻という生還を顧みない作戦を行うにおいて、指揮官及び隊員の心情・人柄は如何にあつたのか、これは我々が自衛官として勤務する上で、今に通ずる重要なテーマの一つでもある。確かなことは、こうした特攻攻撃を生み出した、隊員が本能的に死生観を極致にまで発展させた環境が、今と違って存在したにせよ、苦難に当たった際の部下を統率する指揮官と部下隊員の真に強い信頼感があつたことは確かである。沖繩に出撃直前に撮影された義烈空挺隊の写真が本書に掲載されているが、死ぬことを決意しての隊員の表情は明るく、迷いや戸惑いは一切感じられない。この表情は一体どこから来るのか、本当のところは、本書を読んでもはつきりとは分らないが、反対にこの表情が彼らの心の全てであろう。陸軍挺進部隊の流れを汲む空挺団の幹部の一人として、自分は深く先輩方の志を受け継ぎ、良き伝統の継承と部隊の発展に寄与したい。

通信中隊

二等陸尉

大日向 健介

「陸軍挺進部隊外史」を購読し、空挺戦史を改めて勉強すると、万感胸に迫る想いがするのは、故高橋二曹の影響もあるのであろうと感じる。空挺作戦が、パレンバン降下作戦に始まり、数次にわたる空挺作戦が計画されていたことは、以前から認識していたが、筆者の経験を変えた詳細にわたる記述から、よ

り深く知ることができたことは非常に有意義であった。

以前の挺進部隊であれ、第1空挺団であれ、身を挺して任務を遂行するその手段として落下傘に命を預ける者は、厳しい訓練と誇りを持つことが必須であることは不変である。しかし、兵士と、特に将校の精神レベルを考えたとき、自己と比較して如何に劣っているか猛省する。例えば、義烈空挺隊奥山隊長の想い、死生観を含めた世界観の高尚さに感服することはもちろん、部下兵士の覚悟を知ったとき、責任の重さは小隊長として変わらないはずが、全く精神面で敵わない自己をどう練磨するか、途方に暮れる想いである。

私は、この史実書を読み、改めて故高橋二曹の死を経験して考えたことを整理できたと感じる。世界の環境は、大東亜戦争期とは大きく異なっており、人間の特性も変わっているが、この現状ででき得る限りの隊員指導をしていこうと思う。隊員のことを想い、その家族を想い、重責を自覚して隊員に接し、隊員と共に行動していこうと思う。一日一日を大切にしていこうと思う。そして、来たべき行動の時には、挺進隊の先輩方を習い、任務完遂に努力したい。

後方支援隊

後方支援隊長・二等陸佐

平石 雅洋

一 緒言

所謂外史と言われるものは、裏話的な事実・本音が多々あり、正史に載らない、歴史に埋もれた生々しい人間像が映し出され、時として物事の本質を突いており、読者を思わずにならせるものである。

本外史においても、田中賢一氏の陸軍挺進部隊の生の姿を後世に伝承されようとする執念と使命感が伝わってくる。本外史は、先人の生き様を窺い知る貴重な資料であり、落下傘部隊の伝統を継承する空挺団幹部の自学研鑽の資料として、本外史から空挺精神及び空

挺作戦・戦闘について学ぶことは、大いに有益なことである。

以下、本外史の内容についての所見を述べる。

二 挺進練習部隊創設から開戦

昭和15年12月 挺進練習部隊創設

練習部長・河島慶吾中佐

浜松飛行学校内

白城子(満洲) 移転

昭和16年5月 要員訓練開始

新田原(宮崎) 移転

昭和16年9月 練習部長・久米清一大佐

要員訓練継続

昭和16年12月8日 開戦

第1挺進団(挺進第1聯隊、挺進第2聯隊、挺進飛行戦隊)に動員下令される。

上記のように、挺進練習部隊発足から僅か1年足らずで開戦となるのであるが、当時の状況が戦時体制下とは言え、この短期間で空挺作戦を遂行できる指揮幕僚組織と実行部隊(戦闘隊)を作り上げたことに驚嘆する。

第一の要因 練習部長河島中佐以下の教官・助教要員の貢献があると思う。

落下傘の選定・研究、輸送機の適合性、降下要領の研究、訓練要領の確立等、外国の資料等ほとんど入手できない状況下で、独自に研究開発したと聞く。米軍の教育訓練・装備を受け継いだ空挺団創設より遥かに厳しい状況であったと推測できる。

第二の要因 将兵の質の高さであろう。基幹要員始末将校、下士官、兵卒であったのではないかとと思われる。そのため、空挺戦技に係る必要最小限の訓練課目を修得すれば、即戦力化できたと思われる。このことが、パレンバン空挺作戦において、新編草々の第2

聯隊が活躍できた要因であろう。

第三の要因 輸送航空部隊の編成により、空地一体化した訓練環境となった。



挺進練習隊は、その隷下に挺進飛行隊を持っており、航空部隊(輸送機)と降下部隊が同じ釜の飯を食うような仲間意識が強く、常に一体となって研究開発・教育訓練ができ、お互いの信頼関係・団結力が強かったのではないかと推測できる。これが、パレンバン空挺作戦においても発揮されたと思われる。

### 三 パレンバン空挺作戦

昭和16年12月13日 挺進第1聯隊 明光丸にて門司港を出港。

昭和17年1月13日 明光丸南支那海航行中

火災発生、沈没。第1聯隊、人員は全員救助されるが装備一切を失う。

第2聯隊を内地から招致。

昭和17年1月31日 第2聯隊カムラン湾到着予定(1日：2月10日では準備不能)

昭和17年2月10日 1日延期

2月12日 1日決定

この経過を並べただけでも、作戦発動までに紆余曲折があったことが窺える。

そして、本外史からパレンバン空挺作戦の意義と成功要因が読み取れる。

本空挺作戦の意義について、パレンバン空挺作戦は、空挺、地上提携部隊及び海軍が一体となり、作戦目的を達成した日本陸軍唯一の作戦である。そして、その空挺運用は、作戦・戦闘の原理・原則に適ったものであり、現在の空挺運用の手法とすべき点が多くある。

作戦成功の要因について

第一の要因 挺進団長久米大佐の空挺作戦発動に対する執念ではなからうか。

不幸にも第1聯隊を海上輸送中の事故により使用できなくなるが、新編早々の第2聯隊を急遽迫及させ、自ら指揮してパレンバンに乗り込むというその執念が時宜を得たのではなからうか。

第二の要因 戦況有利な情勢であり、空挺作戦発動の条件が整っていた。

制海権及び制空権をほぼ確保できていたであろうし、また、百戦錬磨の優秀な航空部隊が健在であり、空中機動能力が十分確保されていた。

第三の要因 準備が周到にされていたのではなからうか。

開戦前後からパレンバンの精油所は重要目標であり、作戦計画が色々検討され、陸海軍の連携した作戦が立案され、情報収集等も計画的、組織的にされていたのではなからうか。

第四の要因 作戦目的及び作戦目標と第1挺進団の作戦運用能力が一致した。

あたかも、パレンバン空挺作戦のために第1挺進団を創設したかのように、作戦規模及び作戦目標等がピタリと嵌まってしまったのではなからうか。この状況を想定して、挺進団を立ち上げたのであれば、陸軍には千里眼の持ち主が存在していたのである。

第五の要因 訓練精到な降下部隊と飛行戦隊・創設期で記述

不幸にも初陣を逃した挺進第1聯隊について、挺進練習部内では教導隊の存在であったと聞く、自他共に認める最も練度の高い頭号聯隊でありながら、第2聯隊に油揚げをさらわれた観のある第1聯隊の悔しさは、ただならぬものがあつたであろう。天覧演習に対する意気込みの程が分かる。

### 四 ランコ空挺作戦

昭和17年4月29日 第一次隊出撃するが、天候不良により中止となる。

パレンバン空挺作戦の陰に隠れて、これまではほとんど興味がなかった空挺作戦であるが、この作戦が予定通り実施されていたれば、世界の空挺戦史に大きく取り上げられていたかも知れない。追撃する師団と連携した挺進団主力(千名規模)による退路遮断という作戦である。

挺進団司令部高級部員木下秀明中佐が立案計画したという、このランコ空挺作戦が、天

候不良により第一次隊が降下することなく引き返して、作戦中止となったのは誠に残念である。

結果的には、これが勝算のある空挺作戦を発動する最後のチャンスとなったのである。

爾後の、挺進団の運用は、空挺特別攻撃隊的なものにならざるを得なかったのである。それは、制空権及び制海権の喪失、空挺作戦を実施するための輸送機の不足等、二度と戦力を回復することはなかった。

降下することなく引き返した一次隊は、第1聯隊主力であったのは、何かの因果か、武運つたなかったとしか言いようがない。

### 五 その後の挺進部隊の作戦

昭和18年7月 ベナベナ・ハーゲン空挺作戦 第1挺進団・団長河島大佐 ベリ

戦 リュー島進出、計画中止となる。

昭和19年12月 レイテ空挺作戦

第2挺進団(高千穂部隊) ルソン島進出、第3聯隊、第4聯隊による空挺作戦

昭和20年5月24日 沖縄空挺作戦

義烈空挺隊が沖縄突入

昭和20年8月15日 終戦

この頃になると、制海権及び制空権は米軍にあり、提携する地上部隊もない、出撃したら帰還する見込みのない作戦であった。

レイテ空挺作戦の第2挺進団は、ほぼ全滅状態であり、生存者は僅かである。

義烈空挺隊も全滅である。

英霊の安らかな冥福をお祈りする。

練習隊発足から5年経たずして、終戦をもって陸軍挺進部隊はその歴史を閉じた。

空挺同志会を通して、旧挺の方々から陸軍挺進部隊の話や機会があり、断片的な知識はあるが、挺進集団の編成、各部隊の作戦・戦闘状況等を創設から終戦まで整理された知識として持ち合わせていなかったようである。本外史を読んで、聯隊以下の関係が良く解

たような気がする。これまで、方々を10把一からげにしていたが、出身聯隊等によって思いも複雑であると考えさせられた次第である。

### 後方支援隊本部 一等陸尉 原田 健治

恐らく皆、無難な内容でこの所見を提出してくると思うので、箸休めに、本音を書こうと思う。私は、戦史が苦手かつ嫌いなので、この課題は、大変苦痛なものであった。

著者の田中賢一氏は、高野山慰霊祭や空挺同志会で何度かお目にかかる機会があったが、あれだけ齢を重ねられても、さすが旧軍挺進隊出身、眼光未だ鋭く、死線を潜り抜けた者のみが纏い得る風格に畏怖したのを覚えている。

能力の低い私は、残念ながらその著書から多くのことを学び取ることができなかった。そんな私が、一番勉強になったことは、大東亜戦争中に行われた陸軍の空挺作戦に参加した者が現場から見た臨場感溢れる作戦の様子を、追体験できたことだ。

しかしながら、私の読んだ限り、個人的主観で書かれたこの文章は、歴史史料としては、第2級(第3級史料)であると判断せざるを得ないし、また、精神論を学ぶにしても、イケイ将校の目からしか見えていない偏ったものであると感じずにはいられない。特に、義烈空挺隊は、その編成から実戦投入まで長大の日時を費やしており、将校はともかく、下士官や兵士は不安を募らせたり、作戦に参加しないことが安堵していた者も必ずいたはずだ

と思うが、それについて触れられていないのは、未掌握であったのか、士卒の名誉のために触れなかったのかは定かではない。有事はともかく、平時の自衛官が学ぶべきは、そういった極限状態にある曹士の心身の状態の把握とケア、その状態での士気高揚施策であると思うが、それらについては触れられていないのが残念である。



また、軍の編制・装備、時代背景が現在と  
違い過ぎるため、作戦自体は参考にならない  
のではないかと。

私のような中途半端な知識しか持ち合わせ  
ていない者が、独学で戦史を学ぶことは、大  
変危険であると思う。よく、「追体験」とい  
う言葉が使われるが、大変危険である。

実際米軍では、朝鮮で戦った下級将校が、  
中・上級将校となったベトナムでは、現場で  
の体験を基に敗北を喫している。

先般、団の幹部教育で行われたディベート  
で、空挺団の幹部は、経歴値に基づく即断即  
決が大切である、という結論が出たが、それ  
が如何に危険なことか歴史が物語っている。

戦史からは、「戦いの原則」、「攻撃・防衛  
の要則」ぐらゐのエキスを学んでおけばよい  
のではないかと思う。野外合ほか各種教範に  
は注意書きがあり、「教育訓練の準拠として  
の目的以外には使用しない」とあるように、  
実戦では使用できない。つまり、実戦では、  
状況に合わせて臨機応変に対処することが大  
切である、ということであろう。話が横道に  
それてしまったので、元に戻す。

戦史から私のような素人でも学べる事項は、  
精神面であり、これについては、心の拠り所  
が如何に重要かということを感じた。義烈空  
挺隊の奥山隊長は、幼年学校出身の真正正銘  
の将校であるという「誇りが彼の責任感をよ  
り強固なものにした」という事実は、それを裏  
付けている。これは今の自衛隊にはないもの  
だ。少年工科学校、防衛大学校出身という  
ことは、部内でも誇りにならない。ましてや  
一般の人の中には、少年工科学校存在すら  
知らない人が多いだろう。尊敬されることに  
より、名誉心が生まれ、その名誉を守るため、  
強い責任感と使命感が生まれる。今、自衛隊  
に一番欠けているものではないだろうか。有  
事の際、自衛隊の最も強敵となるのは、「国  
民の目」かもしれない。その点について、旧  
軍人を羨ましく思うのは、私だけであろうか？

後方支援隊  
衛生小隊長・一等陸尉 本田 勝則  
一 全般

今回、「陸軍挺進部隊外史」を読む機会を  
得たわけであるが、正直なところ、私自身、  
戦史に関してやや苦手としたところが、適当な  
理由は、戦史を学習するに当たって、適当な  
資料が分らないとともに、入手することが  
できず、大きく一つのテーマについて、全  
体にわたって記載した書籍(例えば、「第二次  
世界大戦」全般など)を読むことはあるもの  
で、それぞれ個々の内容については少量で多  
くの項目が記載されているため、冒頭の項目  
については記憶も薄れてしまう状態である。

それでは、一戦闘等について書かれた書籍を  
読むかといえば、個々の細部の時代背景や関  
係人物等を理解するのがやはり苦手で、その  
分量から手をなかなかなか出せないという状態  
である。

しかしながら、本冊子については、私達の  
先人である挺進部隊について、実際にその一  
員であった田中氏の体験及び関係者からの取  
材により丁寧に解説されており、戦史が苦手  
な私でも、逐次読み進めることができるもの  
であった。

二 特に印象に残った事項

前述のように、戦史について苦手な私でも  
読み進めることができたわけであるが、特に  
本冊子における「死生観」に関する記述を読  
んで、私自身が感じたところを述べたい。

本冊子において、全般に死生観に関する記  
述は見られるが、「義烈空挺隊における特攻  
隊員の死生観」において、当時の隊員の心情  
が詳しく考察されている。ここでは、後に  
「義烈空挺隊」と呼ばれた「奥山隊」と「諏  
訪部隊」の編成から実際の実行動となった沖  
繩空挺作戦までの、隊員の死生観の保持につ  
いて考察がなされている。

「義烈空挺隊」に当たっての「任務」とは、  
大まかに当初は「サイパン島に強行着陸し、

同島の飛行場に待機する爆撃機の破壊」それ  
が取り止めになり、「硫黄島に強行着陸し、  
同島の飛行場に待機する爆撃機の破壊」と変  
わり、最終的には、「沖繩の北・中両飛行場  
に強行着陸し、同島の飛行場の爆撃機及び施  
設等の破壊」と変化した。義烈空挺隊の任務  
が変化したのは、戦況の変化に伴うものであ  
り、真にその必要性があるかどうかが当時検  
討された結果である。指揮官(士官)につい  
ては、各種情報を直接得る機会も多く、任務  
の変化を理解するのは、一隊員よりも可能で  
あったと考える。しかしながら、間接的に情  
報を得る隊員各個もその任務の変化に対応し、  
それに準備したのである。各任務が付与され  
る度に、狭義での「死生観」が確立されたほ  
かに、根底に各変化した任務に対応する、広  
義での「死生観」が存在したのである。本冊  
子においては、前者の死生観を「形而上の死  
生観」「支えるものがないまでもそれ自体で存  
立しうる死生観」、後者の死生観を「形而下  
のもの(死生観)」「拠りどころを求めず死生  
観」と記している。この形而上の死生観も、  
当初の任務が付与されたときから確立された  
ものではなく、逐次その死生観を補強する形  
で、また、形而下の死生観から変化した形で  
成立したようである。

平時における自衛隊(国際貢献の待機任務  
等が本来任務として付与される状況において、  
いかにして平素からこの形而上の死生観を確  
立するかが重要であることは、今までも様々  
な機会で指導を受け、また、自身が若ながら  
も指導を受けてきた。しかし、形而上の死生  
観の確立は容易なことではないことは、本冊  
子を読んで理解されるし、現在の陸上自衛隊  
において、形而上の死生観自体を確立する  
というよりは、そのための、「精神的土  
台」を準備することが必要である。創設から  
現在に至るまで、特に近年において次々と新  
たに任務が付与(明文化)されている自衛隊  
は、義烈空挺隊の当時とは異なるが、その変  
化に対し、対応していかなければならない。  
では、その「精神的土台」とは、どのような  
ものであると自分自身が考え、また、部下  
隊員を指導していかなければならないか。

三 その他

私自身は、熊本県の出身であるが、健軍駐  
屯地が義烈空挺隊の発進飛行場であることは、  
団に移動して来て知った事項である。昨年度  
のYS訓練において、帰隊直前に義烈空挺隊  
の慰霊碑を訪れることができたのだが、本冊  
子を読んで、改めて貴重な機会を得られたの  
だと痛感した。

後方支援隊整備中隊  
三等陸佐 奥谷 一文

空挺団にいと、パレンバン空挺作戦や義  
烈空挺隊の沖繩空挺作戦についてはよく耳にす  
るが、それ以外の空挺作戦については、ほと  
んど耳にすることがなかった。また、パレン

パン空挺作戦以外の空挺作戦は、ほとんど成功していないとも耳にしていたが、本誌を通じて、失敗に終わった作戦や、計画のみに終わった作戦などの概要を知ることができ、改めて空挺部隊の運用の難しさを感じた。

空挺降下訓練には、多大な時間と費用が掛かる。それを無駄にしないためには、空挺作戦を実行に移したいところではあるが、緊要な時期と確かな目標を持って実行しなければ、無駄死となりかねない。この本の中で最も印象深い話は「忿懣の一聯隊」である。挺進第1聯隊がパレンバン空挺作戦に参加できず、第2聯隊に栄光をさらわれてしまった後、なかなか訓練の成果を発揮させる空挺作戦を実行することができず、「愚案でもよい。支作戦でも構わぬ。何でもよいから一働きさせてくれ。こんなゴム林の中で、便々と時を過ごしておられるか」といきなり立つ将兵達。その気持ちは分らないでもない。今でこそ自衛隊も、イラク派遣などにより、その武装集団としての重要性を国民に認識されているのが、一昔前は、実働任務は災害派遣ぐらいのものであったから、今より自衛隊の重要性について国民の認識は薄く、当時「ソ連が本当に侵攻でもしてきたら、活躍できるのになあ」などと、少しは思ったりもした。しかし、空挺部隊を活躍させるために、空挺降下をさせるために、空挺作戦を立案しようとするのは、本末転倒のような気もするが、空挺部隊存続のため彼らの努力によって、今の空挺団があるのだと感じさせられた。

この本のテーマは、統率の変化と特攻隊の死生観の二つであると思うが、統率の変化については、当時の全体の流れから当然のことのように思われ、これといって目新しく感じさせられるものはない。死生観については、特攻に対する心の抛り所として捉え、それが将校の場合は、出身経歴によるプライドであったり、敵に対する憎しみであったり、小隊長としてのプライドということを描かれており、

そして、その部下は、「中隊長が引き連れてゆくのだから、それについて行くのは当然」と思っていたというから、意外に単純なものだと感じた。

私が、今回本誌を読んで感じたことは、おむね以上である。

最後に、今回これを読んで、陸軍挺進部隊について、今まで知らなかった史実を知ることができたが、本誌では省略されている海軍の落下傘部隊についても興味を湧いてきた。これもまた、今までは耳にすることがなかったため、その存在すら知らなかったが（忘れていたのかもかもしれない）、これを機会に、それに関する文献を探してみたいと思う。

### 後方支援隊整備中隊

#### 二等陸尉 松本 勝幸

今回、貴重な資料である「陸軍挺進部隊外史」を読ませていただき、不肖ながら、空挺隊員である自分にとって資とすべき数々の教訓を知ることができました。

今でこそ、落下傘降下による事故は極めて少なくりましたが、当時は落下傘自体が一般的には未知であったろうし、技術的にも未完成の時期に落下傘部隊へ志願した人達は、元来、難局に進んで当たる性質の持ち主であろうことは、容易に推察されるが、長期間にわたる厳しい訓練を黙々と実施できる忍耐力と責任感を併せ持っていたのだと感じました。しかし、幾ら必死の覚悟があっても、非戦闘消耗は避けるべきであると改めて思いまして、落下傘降下による事故は、当時としては技術的に仕方ないかもしれません。渡渉訓練の事故で部下を失ったことは悲劇です。また、海上輸送中に多くの艦船が沈められたことにより、陸軍兵士を海の上で失うことは、シーレーン確保を重視せず、敵の可能行動を予期しなかったことによる人為的な失策と感じました。こういった事例に誰か責任を感じたのか疑問が残ります。

空挺作戦に関しては、パレンバン空挺作戦は正に奇襲が成功した戦例であり、痛快に感じました。インドネシアでは、現地住民の対日感情は悪くなく、特に落下傘部隊はとも歓迎されたと認識しています。パレンバン空挺作戦の成功体験を基に、その後幾つかの空挺作戦が計画されたようですが、実施に至らなかったことは、当事者としては残念だったことだと思えます。しかし、計画の目的が空挺部隊を運用するためと感じ、手段が目的化してしまっただけではないかと思いました。レイテ空挺作戦で、地上部隊との提携の話が少しありましたが、戦争末期にはフィリピンに大量の人員を送ったが、武器はほとんどなく、小銃も数名に1丁の割合だったと他の文献で読みました。フィリピンでは武器のない地上部隊に比し、内地でしっかりと訓練を積み、きちんと武装をした空挺部隊の方が大いに訓練していたと感じます。

昨年、訓練で健軍駐屯地へ行きました。そこから義烈空挺隊は沖繩へ特攻攻撃に発進したわけですが、意気揚々と出撃したと伝え聞き、感心しました。実際には、1機のみ強行着陸成功であり、辿り着けなかった人達は、実に残念だったと思います。制空権がないだけに行われた作戦ですが、制空権がないだけに、困難であるという矛盾も感じました。「義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観」において、奥山隊長の心の抛り所が特に印象に残りました。自分自身が自衛隊生徒出身ということもあり、多少共感することができたか死にます。

死に直面し、自分を納得させるために、幼年学校出身であることを強く意識したのだと思えます。しかし、そのため部下に対する同情も強くなってしまったのではないのでしょうか。きっと普段から部下思いの指揮官だったと思います。機会があれば、もっと詳しく勉強したいと思っています。

### 後方支援隊 落下傘整備中隊長 菅野一等陸尉 一 全般

2004年スマトラ島沖の地震の際、ある報道番組で「空の神兵」の歌が流れ、キャストが日本とゆかりのある地域である旨報道していた。親戚宅で家族と見ていたので、60年前の出来事を誇らして話していたのを思い出した。その際、第6代落下傘整備中隊長は、オランダ軍を制圧し、精油所頂上部に日章旗を掲げた人であったことを強調して話していた。今回、改めて「陸軍挺進部隊外史」を確認するに当たって、先人達の偉業、空挺精神、挺身赴難、死生観について考えさせられた。

また、中隊長小川弘氏（故人）に生前お話を伺う機会に恵まれたら、当時の生々しいエピソードを聞けたら、残念に思うと同時に、OBと話をする機会があれば（機会を作り）、後輩に伝えていきたいと思う次第です。

### 二 外史から学ぶこと

パレンバンの作戦では、大東亜戦争の全般の戦況が悪化していない状況で、我が早期提携作戦で迅速な提携ができ、目標地域における補給品及び装備品がある程度にとどめた中で、十分任務を達成した。また、士気高揚に多大の効果があったり、まばゆいばかりの栄光に輝いているが、それ以降の作戦では、苦渋の連続であったが、そういう中であっても随所に挺身赴難、死生観について多くのことを教えてくれた。

軍人が生涯の中で最も大切な時に、生死をかけた如何にその職責完遂に努めたか、あるいは、どのようにして責任を取ったかについて考えると、偉大な業績や活躍は、一朝にして出来るものではなく、生い立ち、生活・勤務環境によって、時代の流れの影響を受けつつ、厳しい修養や多くの経験・体験を積み重ねて、日本人として、また、軍人として磨き



上げられ、いざとなった時に、これらが集約された実力を発揮されるものであろうと考えられると、優れた先人の生涯の研究や、どのような体験を積み重ねてきたかについて、更に奥深く学ぶことが大切な気がしてならない。

人生は一度きり、やり直しがきかないが故に、先人に学びつつ自己の運命や未来を切り開いていくために、重要なことである。

三 まとめ

今日、従来の任務に加え、新たに任務化された国際貢献においても、日本人の気質に近い、いわゆる誠実・献身、それに若干欠けている挑戦なるものを、あらゆる面を実戦のために身に着けなければならぬ。また、それについての評価を受け、あらゆる機会に自ら自問自答し、プライドを持って実践していかなければならない我々にとっては、先人の教えから学ぶことが涵養である。

最後に、義烈空挺隊長奥山大尉のように、ある意味の名譽心を心の拠り所としていながら、部下隊員が中隊長と共に往くのだから、俺も往くと言われるような人間的に魅力のある姿や、レイテ空挺作戦における白井聯隊長の、苦難の限界がきても平常心を忘れず振る舞う行為や人柄、統率力に優れ、部下隊員を感化させた人間的に魅力のある指揮官になりたいたいものであり、そういう指揮官を目標にしていきたい。

後方支援隊整備中隊

二等陸尉 吉村 慎太郎

空挺作戦の特性は、今も昔も変わることはない。それは部隊が確実に存在することで、敵に不断の脅威を与え続け、他の作戦手段では対応することのできる重要な緊要な任務を受け出撃する。そして、その任務を完遂する、若しくは最後の兵士となっても、あくまで任務の達成を迫り続けて戦い続けなければならないということであり、そのためには、隊員の高い意識と能力を必要とするところま

で同じである。

戦いの場はどうなったか。技術が進歩しても、輸送力の限界、そして、天候に左右されるといった短所は埋まることはなく、総合的に見れば、困難な状況を克服せねば戦いの場が上がることすらできないといった面も変わらぬ。

この「陸軍挺進部隊外史」を読んで特に印象に残ったのは、義烈空挺隊に見る特攻隊員の死生観である。余談ではあるが、私の前勤務地は、予科練のあった土浦であり、習志野駐屯地の空挺館と同様に、特攻隊として出撃された方々の遺書が展示してある。どちらも死地へ赴く人のものとは思えぬほど悲壮さはなく、ただ国・家族への想いと後に続くであろう未来への希望が感じられる。

圧倒的な航空優勢の中を敵艦隊へ突入して往った予科練生、タクロバン、沖繩のように、生還の見込みの全く無い任務、敵の圧倒的優勢下にあるパレンバンへの増援任務に對しても臆することなく進んで就き、戦い、そして散って逝った挺進部隊の兵士に比べると、様々な雑念を抱き、決心を鈍らせてしまう自分の未熟さが恥ずかしくなってしまう。これを機に、幹部として、そして空挺隊員としての心構えをしっかりと考え、今後の職務に臨んでいきたいと思う。

後方支援隊落下傘整備中隊

二等陸尉 中井川 裕磨

一 全般

「陸軍挺進部隊外史」を読んで、改めて空挺精神、特攻精神の凄さを感じた。「空の神兵」の命令を持つパレンバン空挺作戦から天候不良により直前で引き返したものの、計画途中で取り止めになったものを含め、沖縄空挺作戦までの数々の空挺作戦が収録しており、大変勉強になり、また、空挺隊員として、資とすべきものを得ることができた。

二 特に印象に残った事項

義烈空挺隊は特攻隊でも、戦闘機により単独で敵に体当たりする神風特別攻撃隊とは全く違う形の特攻隊であるが、神風特別攻撃隊に負けないぐらいの特攻精神、死生観が確立されていたと思う。他の特攻部隊は、長くて2か月で消滅しているのに、義烈空挺隊は指定されたから突入までに半年もかかっている。また、目標に向かって訓練を積み重ねても、戦況の変化等により作戦が中止になり、毎日日出撃準備を繰り返して、天候不良等により延期したりと、目標を失い訓練だけを続け、精神的重圧はただならぬものがあつたに違いない。それにも拘らず、士気を失うことなく、奥山隊は、指定された136人が最後まで一人の脱落者もなく、作戦を決定したのは、指揮官はもちろん隊員個々の使命感、死生観が、考えられないほど強く確立されていたのだと感じた。

特に、健軍飛行場から沖繩に出撃する際、握手する奥山隊長と諏訪部隊長、それを取り囲む隊員の写真、隊員が搭乗位置へ前進する写真があるが、これから死に向かう人とは思えないほどの笑顔であったり、晴れやかな顔をしているのが強く印象に残る。

また、大戦果を収めたパレンバン作戦、目的を達したならば敵中を潜行して帰ってくることを認められていたレイテ作戦とは違って、命の続く限り遊撃戦を命じられた義烈空挺隊を、最後まで導き、部下からの厚い信頼を受けていた奥山大尉の偉大さを感じるとともに、指揮官としての資質、人間性はもちろん、部下を思う気持ち、部下を引き付ける魅力等色々な要素があると感じた。

著者田中氏の一説に「星移り歳変わり、死生観などということが、全く無縁のような時代になったが、まだ歴史というには余りにも近い、われわれと本当に同時代に生きた人が、今日とかけ離れた歴史上の人物になってしまっていることに、今更ながら愕然とすることがある。」とあるが、時代の移り変わりによ

て、その時代に戦争を経験し、共に戦った仲間を思う気持ちを感じるとともに、切なさを強く感じ、強く印象に残った。今の時代にこれほどの死生観、国家観、軍人として鍛え抜かれた責任感、特攻精神を、この時代を生きた人のように確立できるか、また、部下に涵養できるかということ、難しいことではあるが、自衛隊が、国際貢献の本来的任務化等、次々に新たな任務が付与される中、自分自身強い使命感、責任感、時には死生観を確立するともに、幹部として部下をどのように指導、涵養していかねばならないかと考えさせられた。

三 その他

我が落下傘整備中隊の第6代中隊長小川一等陸尉は、パレンバン空挺作戦の経験者であり、精油所に日章旗を掲げた人物である。詳しくは分からないが、パレンバンの話を聞くとも必ず気が掛かることであり、また、小川一尉が在隊した中隊で勤務できることを誇りに思う。

後方支援隊落下傘整備中隊

補給整備小隊長・二等陸尉 児玉 拓之

一 全般

今回、「陸軍挺進部隊外史」を読む機会を得て、改めて先人達の苦労を実感した。たった60余年前の日本で、自らの命を懸けて戦った人達がいた。今の平和な世の中では想像もできないような悲惨な戦争の中で、光を放つ陸軍挺進部隊は、我々の誇りであるとともに、忘れてはならない対象であると考えられる。戦後の復興を支えた日本の経済も、命を懸けて戦う国民性が、国際的な信用に結び付いたからにはかならない。その最先鋒を行っていたのが、挺進部隊であり特攻隊である。初陣であるパレンバン空挺作戦は、多大なる成果を収め、世界に日本の挺進部隊の精強さをアピールする場となったと考える。以下、特に空挺精神及び兵站に関して考察し、今後の資



二 空挺精神に関する考察

「陸軍挺進部隊外史」を読み、空挺精神とは、任務のために進んで死ぬことではないと感じた。当然、任務達成の過程で命を落とす可能性はあるものの、死に急ぎ、死の美学の類を追及する精神とは明確に異なると思われる。また、大戦末期の特攻精神のように切迫した中で、半ば追い込まれるように死に場所を求める気持ちとは異なり、もう少し余裕のある中で見出す死生観であると考える。その根源は、任務の特殊性や、訓練の厳しさから、元々死と隣り合わせであるためではないかと考察する。航空機から降下すること自体が、非日常であり、大怪我や死が日常だったとも言える。事実、初期の挺進団の演習においては数名が殉職されている。

挺進団の歴史を見ると、創立が昭和15年と開戦の1年前であり、情勢としても大戦末期のような特攻的な雰囲気はなかったものと思われる。そのような中、厳しい訓練を志願して受け、使命感に燃えた挺進隊員が誕生していったわけであるが、彼らは、他の軍人とは異なる、大局的な視点を持っていたものと考察する。つまり、彼らは、どれだけ危険な任務であろうとも、任務を達成するためには、死をも乗り越える責任感と精神力を持っていたのであろう。特攻ではないものの、常識では考えられない戦法を採用できたのも、そのような考えを持った人間の集まりであったのだと言える。大戦末期には、残念ながら事実上の特攻作戦にも多数が参加しているが、6か月もの間、作戦正面を変えられながらも耐え続け、一人の脱落者も出さず、全員が出撃した義烈空挺隊等に他を例を見ない。恐らく何通もの遺書を書き、何度も身辺整理をしていたものと考えられる。

空挺精神とは、人とは違った訓練や経験を積みながらも、決してそれにあぐらをかくことなく、常に謙虚に、任務達成のためには死ぬまで何をしても、何のためなのかを理解できる心の深さだと考える。

三 兵站面からの考察

今回、「陸軍挺進部隊外史」を読み、日本陸軍が挺進部隊を運用する際に、意外なほど兵站や地上部隊との連携を重視していたことを知った。少なくとも、昭和18年9月に取り止めとなったペナペナ・ハーゲン空挺作戦までは、継続的な補給若しくは地上部隊との連携がない限り、空挺作戦は発動されていない。パレンバン空挺作戦においては、降下後1日で予定通り地上部隊と連携している。また、パレンバン空挺作戦時の補給品に関しては、人員降下に続いてほぼ同数の航空機をもって火器等の物量を投下している。また、滑空機の開発や、滑空機で空輸できる戦車の開発など世界に先駆けて創意工夫をしていたことが窺える。更に敵の鹵獲品である機関銃を個人携行火器とするなど、使えるものは何でも使った柔軟性があったものと考察する。ところが、昭和19年のレイテ空挺作戦以降は、継続的な補給や地上部隊との連携を前提としない空挺作戦が発動されている。特に、沖縄空挺作戦に至っては、事実上の陸上特攻であった。大戦末期の特攻作戦が主流であった時代においては、当然、挺進隊においても、命を落とすことを前提とした作戦が常態化していたものと思われる。

四 その他

空挺団に転属してから、1年半が過ぎ、生活のリズムもできてきたが、今回、「陸軍挺進部隊外史」を読み、改めて空挺部隊の有るべき姿を見たような気がする。基本降下を終えて早くも4年余りが過ぎたが、空挺隊員としての死生観が確立できているとはまだ言えない。むしろ、短期間で確立できるものではないのではないかと感じている。

空挺教育隊研究科

一 等陸尉 柵木 徳之

「統率の姿勢―日本陸軍四年間の変り方―」という項目に最も興味を感じた。これは、現在の我々の状態と同じではないのだろうか。陸軍挺進部隊は、その後の特別攻撃隊とは全く異なる、特別な機動運用部隊であり、取っ置き部隊であったと思う。挺進部隊は、ヘリコプター実用化以前においては、画期的な機動運用部隊であり、それまでの常識から掛け離れた距離、時間において作戦できる唯一の部隊であった。これは現代の空挺部隊についても同様であり、空挺部隊は、特別に編成・装備・訓練された部隊であり、臨時編成であるヘリボン部隊とは全く異なる。しかしながら、この特別な部隊をもって行う特別な作戦という特性が、様々な誤解を受け、運用する上級司令部の錯誤の原因となっており、この点もあるかと思う。

このような観点から、このような部隊を運用した日本陸軍内において、どのような統率の姿勢があったのかは大変興味深い。この資料によれば、陸軍では5回の空挺作戦が実行又は計画されている。これに対し、その当時の戦争全般の状況と作戦についての状況判断の妥当性(正常か否か)を評価してみた。

期間	作戦名	戦局・状況判断
昭和17年 2・14	パレンバン 空挺作戦	開戦直後であり、連合国の態勢未定 ・正常
4・29	ラシオ 空挺作戦	(極めて慎重、作戦の効果、地上部隊との連携) 日本軍攻勢中 ・一部異常 (功名心、支那軍に対する侮蔑)

昭和18年 7月	ペナペナ・ ハーゲン 空挺作戦	連合軍反抗開始 日本軍攻勢終末 ・一部異常 (特攻的用法)
-------------	-----------------------	----------------------------------------

昭和19年 12・6	レイテ 空挺作戦	連合軍攻勢 特攻戦法採用 ・異常
昭和20年 5・24	沖縄 空挺作戦	日本軍圧倒的不利 特攻常態化 ・異常 (作戦の費用対効果、人命の軽視)

また、戦争全般に占める作戦の地位について、パレンバン空挺作戦については、南方の地下資源の確保という状況から、戦略的運用であったと考える。しかしながら、ラシオ、ペナペナ・ハーゲンは、戦争全般に及ぼす影響という観点からは小規模であり、また、レイテ、沖縄に至っては、目的が不明確になりつつあり、正常な運用であったとは言えない。運用する上級司令部の心理状態が多分に影響していると考えられる。

当初	開戦	末期
失敗しては いけない	↓ とにかく使 わなければ いけない	
大事に使わ なければい けない	↓ 使ってあげ なければ申 し訳ない	

少ない経験の中からはあるが、YSにおける空挺部隊の運用についても、右記と同様の傾向が見られ、現代においても、有事の際には、このような状況が生起するものと考え



### 来年の靖國カレンダーの五・六月に 義烈空挺隊の絵を掲げる

英霊にこたえる会

本部運営委員 田中 賢一

義烈空挺隊が沖繩の飛行場に突入したのが、5月24日なのに因んで、五・六月の部にこの絵を掲げることになった。この絵は小柳次一カメラマンが撮った写真を基に、我が会の会員だった故松本武彦画伯が20号の油絵に描き、靖國神社の境内に事あるごとに展示したもので、現在は英霊に答える会が保管している。

絵の左右上部に掲げてある詩歌について



原図は20号の油絵 郷里に別れを告げる



小柳カメラマンは義烈空挺隊が発進地健軍に移ってからは、終始付き添い貴重な写真を遺している。

いて、私は騎兵十四聯隊会の世話人をして、靖國神社みたま祭に毎年雪洞を献納している。何を書いたらよいか、いつも私に意見を求めるので、私は義烈空挺隊のことを話し、隊員の遺詠いくつかを示しその中から選んでもらった。このお二人は終戦まで支那戦場に在って、義烈空挺隊の認識はなかったが、この度、大そう感銘しこの詩歌をしたためてくれ、特攻協会にも入会してくれた。

山中浩太郎さんの書いた短歌、

よしや身は千々に散るとも来る春に

また咲き出でん靖國の宮

は説明を要しない。詠者関三郎軍曹は

初めから奥山中隊の一員で、二番機に搭乗し散華した。長野県出身。

小林雅男さんの書いた渡辺裕輔少尉の漢詩は難解なので少しく説明する。

恋闕至情是赤心

尊皇大義是臣道

磅礴天地宇内間

唯有神州不滅氣

恋闕 〓 れんけつ 闕は宮城の門 天皇を慕い奉ること

磅礴 〓 ほうはく まぜ合わせる

天皇をお慕いするのは真心で

天皇を敬うのは臣たる道

天地に普く存するは

神州不滅の大精神

渡辺少尉はもとの奥山中隊の者ではない。初め義烈空挺隊がサイパンのB-29基地を狙った時、中野学校から潜入謀者として十名が配属されたが、その中の一人であり、中野学校二俣分校卒業時志願して配属された。サイパン特攻が取り止めになった後も義烈の一員となっていて、沖繩には一戦闘員として十二番機に搭乗し散華した。新潟県出身。

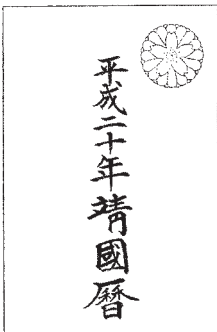
〇靖國カレンダー御入用の方は左記へ。

〒一〇二一〇〇七三 東京都千代田区

九段北三一一一 靖國神社遊就館内

「英霊にこたえる会」カレンダー係

TEL・FAX 〇三―三二六四―四六一〇



●体裁 縦18.2cm×横12.7cm  
●頁数 40頁  
●編集発行 靖國神社社務所

#### ◆主な内容

- 〇靖國神社の由緒、祭事暦
- 〇家庭のみたままつり
- 〇年中行事と節氣
- 〇十干・十二支表、日の吉凶
- 〇人生儀礼の説明
- 〇厄年表
- 〇国歌と国旗の知識
- 〇歴代天皇・年号一覧表
- 〇参拝の御案内
- 〇手水・玉串拝礼の作法
- 〇全国の護國神社一覧表
- 〇年齢干支九星早見表

#### ◆頒布価格 1部 300円

- 〇300部以上取りまとめの場合は下記の通り頒布価格が割安となります。

(300部以上 1部250円)

(500部以上 1部200円)

- ◆送料 1部120円、2部140円、3部180円、4～6部210円、7～13部290円、14～27部340円、28・29部450円、30部以上の場合は当神社負担

#### ◆お申し込み先 靖國神社社務所 (広報課)

〒102-8246 東京都千代田区九段北3-1-1  
電話 03(3261)8326 FAX 03(3261)8625 (広報課)



# 特攻隊絵本 『お父さんへの千羽鶴』 出版記念講演会

平成19年8月3日(金) 19時から約

1時間半、東京都文京区の文京シビックセンターにおいて、表題の絵本出版記念講演会が開催され、山本卓真会長が「特攻精神の継承を考える」と題して講演をされた。

山本会長は、後記のようなレジュメに基づき、特攻に関する内外の評価、特攻隊員の心境や任務完遂のための努力(このことに関しては、兄上の山本卓美中尉(陸士56期、一式双翼特攻隊・勤皇隊隊長として部下10名を率い、昭和19年12月7日レイテ島オルモック湾の米艦船に突入・戦死)が、福島県原町飛行場で特攻隊編成後、台湾を経て、フィリピン戦線に至るまでの経過を克明に記して遺された日誌に触れながら話をされた)、特攻隊戦没者の慰霊顕彰、特攻精神の真価等に関して具体的な事例を挙げながら話をされ、国防の基本は、国民一人ひとりが、国家としての社会であり、個人であることを認識し、正しい国防意識を持ち、一旦緩急あれば義勇公に奉ずる、との使命感を涵養することが大切であり、特攻精神の真髄もまたそこにあるのであって、

この精神は日本人として未来永劫に継承していかねばならない、また、国家としては、現実を直視した国家防衛戦略を確立すべきである、と力強く述べられた。

## (レジュメ)(抄)

### 1 特攻の評価

2 一〇〇%の戦死確率と隊員の心境  
純粋な国家、親族、特に母親への恩愛の情、妻子を残して、軍人としての使命感、「死に花咲かす」も私心なり、只任務あるのみ。

部下を犬死にさせぬこと！戦況判断

脱落者無き義烈空挺隊

### 3 戦果を挙げるための努力

飛行機・武装の整備に全力、羅針盤の調整、故障との戦い

### 4 朝鮮出身の特攻隊員、靖國合祀は日本人の義務

林長守軍曹(少飛12期・航空通信)

「吾、只今より突撃す」

### 5 特攻の精神とは

楠公父子 湊川、四条畷  
切迫した祖国への使命感、核心は、義勇公に奉ず

### 附 満州での体験

ソ聯侵入、対戦車特攻隊編成、不安より戦果への思案、終戦  
島田部隊長訓示「生きて祖国の再

建、自身はシベリアへ



お父さんへの千羽鶴  
ゆきとときたひろし

この絵本の作者「ときたひろし」さんは、高校卒業後警視庁に奉職、18年間第一線で勤務した元警察官。平成15年末に退職して絵本制作を始め、「絵本で日本を元氣よく」をモットーに、これまででない分野での絵本制作に活躍する40歳の作家である。

「敵艦目指して体当たりするお父さんの零戦には、愛娘ともえちゃんの折った千羽鶴も一緒でした。最後のとき、その鶴たちは……。かつてない視点から描かれた感動の特攻物語」とあるように、作者は、「……千羽鶴は、

自分のためではなく、他人への祈りから作られます……私心なき祈りを形にした日本の千羽鶴には、宗教を超えた精神的な世界標準にふさわしい美しさ

があると私は思うのです。千羽鶴のようには、私心を捨てて他人の幸せを願う散華した、神風特攻隊に代表される当時の将兵とその家族の願いを今一度見直したい、そんな思いからこの作品が生まれました。日本は、世界は今、彼らの思いにどう応えているのでしょうか……。と、「あとがき」の中で述べている。

この絵本は、戦争を知らない次世代、三世代の親や子に、祖国のため、愛する家族や人のために命を捧げた父や祖父の思いやその尊い姿を語り継ぐに相応しい格好の絵本である。なお、巻末の親子で触れたい「特攻隊のこころ」として挙げられた全国主要施設ガイドの中に、世田谷山観音寺内「特攻平和

